
桜文論叢

第105卷 2021年9月

日本大学法学部

Nihon University
College of Law

目 次

論 説

1930年代ベルリンにおける
クレメンス・クラウスの音楽活動 …………… 佐藤 英 …… 1

La transcription des phonèmes du français en *katakana* :
Le cas des voyelles du français …………… Camille Lepeltier …… 33

証人の笑い
—— 沖縄移民をめぐる民族誌的考察 —— …………… 前嵩西一馬 …… 55

資 料

クロード＝アンリ・サン＝シモン
「第二趣意書 序文」および
「百科全書の計画 第二趣意書」の草稿
—— 翻刻 —— …………… 江島 泰子 …… 85

1930年代ベルリンにおける クレメンス・クラウスの音楽活動

佐藤 英

はじめに

本稿は、ウィーン出身の指揮者クレメンス・クラウスが、ベルリンにおいて行った音楽活動について、ラジオ放送やレコード制作といった音声メディアとのかかわりにも着目しながら検証するものである。考察の対象とする期間は、ナチスが政権を握る1933年から、第二次世界大戦が勃発する直前の1939年6月までとする。これまでの論者による論文と同様、ドイツとオーストリアのアーカイブの資料を駆使した実証的研究である¹。

本稿で注目するのは、主に以下の三点である。

第一点は、クラウスがベルリン国立歌劇場監督に就任するまでのプロセスである。両者が初めて共演するのは、1933年のリヒャルト・シュトラウスの《アラベラ》のレコーディングだった。その後、両者は共演の機会を得ないままであったが、1934年12月、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーが同歌劇場監督を辞任した後、クラウスがその後継者に選ばれた。このプロセスについては、従来から様々な研究が行われている²。フルトヴェングラーが作曲家パウル・ヒンデミットを擁護する記事を公表したことに端を発するヒンデミット事件に関わりがあること、そして、ほかならぬこのヒンデミット事件が、ナチス・ドイツ時代における芸術と政治の関係性を象徴的に示す事例でもあるからである。しかし、先行研究において、クラウスが残した記録は参照されてこなかったよ

うに思われる。それゆえ本稿では、そうしたクラウスの記録に加え、当時の資料を再検証する。これにより、彼とアドルフ・ヒトラーやヨーゼフ・ゲッベルスとのコネクションがどのようにして生まれたか、また、このコネクションがベルリン国立歌劇場の人事にどのような影響を及ぼしたかについて、新しい知見を示す。

第二点は、クラウスがベルリン国立歌劇場監督の地位にあった、1935年から1936年にかけて、彼がベルリンにおいて行った活動についてである。国立歌劇場でのオペラ公演のほか、ナチスの行事やラジオの音楽番組への出演、さらにレコード制作を検証する。クラウスが残していた記録をもとに、この期間の全演奏データを示す。放送に関しては、制作現場の交信記録を参照し、これまで言及されてこなかった番組の経費についても可能な限り提示する。

第三点は、クラウスとベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の共演である。従来、クラウスとベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の初共演は、このオーケストラの資料に基づき、1939年6月11日のリヒャルト・シュトラウス生誕75年記念演奏会であると言われてきた³。だが、クラウスが書き記していた演奏記録、放送原盤記録などをあらためて調査した結果、この前年に共演が行われていたことが明らかになった⁴。ベルリン・フィルに関しても、共演の経緯に加え、ラジオ放送とのかかわりについても述べる。

1. リヒャルト・シュトラウスの《アラベラ》世界初演の中継放送とレコード制作（1933年）

クレメンス・クラウスは、フランクフルト市立歌劇場音楽総監督、ドレスデン等への客演を通じ、1920年代後半にはドイツにおいて著名な指揮者になっていた。彼は1929年9月のウィーン国立歌劇場音楽監督就任を機にオーストリアを活動の拠点にしたため、ドイツにおける演奏の機会は減っていた。例えば、ヒトラーが首相に就任した1933年1月30日からリヒャルト・シュトラウスの《アラベラ》が初演される同年7月1日までのあいだにドイツに行われたコンサートは、2回を数えるにすぎなかった。3月31日のドレスデンにおけるオー

ケストラ・コンサート（ワーグナー《タンホイザー》から序曲とバッカナール、ショパンのピアノ協奏曲第2番 [ピアノ独奏はエルドマン]、リヒャルト・シュトラウス《家庭交響曲》）、4月23日にライプツィヒにおいてワーグナー生誕100年記念として上演された《トリスタンとイゾルデ》がそれである。

ドイツにおいてクラウスの知名度は高かったものの、彼がベルリンで演奏する機会は1933年のレコーディングまでなかった。この章では、クラウスがベルリンに最初の活動の機会を見出すまでの過程を追う。そのきっかけを作ったのは、クラウスがドレスデンにおいて指揮したりヒャルト・シュトラウスの《アラベラ》初演である。本稿では、ドイツのラジオ局やレコード産業との繋がりという観点から、《アラベラ》初演以降を検証する。

1.1 《アラベラ》世界初演のラジオ放送

7月1日にドレスデン国立歌劇場で行われた《アラベラ》の世界初演は、当初はフリッツ・ブッシュの指揮で予定されていた⁵。彼は反ナチの立場をとっていたため、1933年3月7日のヴェルディ《リゴレット》の公演をナチスの関係者に妨害され、最終的に音楽監督の地位を追われてしまう⁶。ブッシュの代役として《アラベラ》の指揮者に抜擢されたのがクラウスである。

クラウスが選出されるに至る経緯は、こうだった。《アラベラ》の公演は、ドレスデン初演後、ベルリン、ウィーン、ミュンヘンでも演奏されることが計画されていた。クラウスは1933年3月3日にリヒャルト・シュトラウスに宛てた手紙において、これまでベルリンで指揮した経験がないため、当地の公演を担当したいとアピールし、シュトラウスもこれを支援する姿勢を見せていた⁷。そこにブッシュの問題が起き、彼が《アラベラ》初演の指揮者から外されることが決まる。シュトラウスは、《アラベラ》初演のための諸々の交渉を委ねていたハインツ・ティーティエンに対し、ドレスデンの初演を担当する指揮者としてクラウスを推薦した⁸。シュトラウスとティーティエンの間で交わされた書簡によると、初演指揮者の候補者にはエーリヒ・クライバーも挙がっていた⁹。彼との打診結果を待つように述べた同年4月6日のティーティエンのテ

レグラムを最後にその名が言及されなくなっていることから¹⁰、クライバーは都合がつかず、最終的にクラウスということで話がまとまったようだ。クラウスは6月13日からドレスデンに滞在して公演の準備をし、初演の後もさらに5回（7月3, 5, 8, 12, 15日）、当地で《アラベラ》を指揮した¹¹。

この《アラベラ》は、ナチス・ドイツ時代に始められたラジオ番組シリーズ「国民の時間」の枠内において、7月1日に、まさにその初演の様子が生放送された¹²。この「国民の時間」とは、1933年4月から開始されたナチスのプロパガンダ番組の一つで、全国ネットのドイツ放送（Deutschlandsender）と各地方局のすべてが同一の番組を同時に放送する、中央の統制が強いものだった（この放送システムは「全国统一放送」と呼ばれた）¹³。1933年7月には、原則として、日曜日を除く毎日19時からの1時間がこの番組に充てられていた。《アラベラ》の場合、この時間内に全曲が収まらないため、各局は次のように対応した。公演のすべてを放送したのは、各地への配信の基地局となった中部ドイツ放送、前述の全国ネットを持つドイツ放送、地方局ではオストマルク放送と西ドイツ放送だった。それに準じたのが南西放送で、19時から22時30分までがこのオペラの放送に充てられた。その他の局、すなわちフンク・シュトゥンデ・ベルリン、バイエルン放送、北ドイツ放送、シュレジエン放送、南放送は、19時から最初の1時間だけを放送した¹⁴。

この《アラベラ》世界初演の様子は、先に触れた放送局のほか、イギリス（ただし最初の2時間だけである）、さらにケーニスヴスターハウゼンから送信されていた世界向けの短波放送でもオンエアされたと思われる。ラジオ情報誌『ドイツのラジオ』によると、この日の短波放送は19時から西ドイツ放送、20時から中部ドイツ放送が放送の担当とされており、20時からの番組では途中の「休憩」では天気予報と予告されている¹⁵。19時から西ドイツ放送では《アラベラ》が放送されていたこと、20時からはこの公演の担当放送局の番組が番組表に出ていること、しかも、休憩時間に天気予報が挿入されることが示唆されていることから、短波放送でも《アラベラ》の全曲が放送されたと考えられるのである。

《アラベラ》の公演については、新聞等における劇評のみならず¹⁶、ラジオ情報誌の番組批評コーナーでも好意的に評された。ここでは、『ドイツのラジオ』の記事を見てみたい。この評者が着目したのは、リヒャルト・シュトラウスが色彩豊かなオーケストレーションを発揮することにかけては並ぶもののない作曲家だという点である。この《アラベラ》の場合、シュトラウスのそのような「名人芸と、月日を重ねるうちに成し遂げた明晰さ、つまり室内乐的なスタイルとの幸福な混ざり合い」が実現しており、それがこの作品の魅力であったという¹⁷。同誌の他の批評においては、放送に技術的な問題があった場合、それが指摘されているが、今回はそれが記されていない。上記のように、論評がもっぱら作品を讃えるものとなっていることからわかるのは、放送は十分なクオリティがあり、オペラを聴くことに集中できたということである。

ところで、クラウスとこの放送を成功裏に終えた中部ドイツ放送との関係は、そもそも良好ではなかった。1929年5月頃、クラウスは同局から放送コンサートへの出演を打診されていた¹⁸。トラブルが生じたのは、出演料の交渉である。報酬の提示を求めるクラウスの要請に対し¹⁹、放送局側が提示したのは1000ライヒスマルクという額だった²⁰。クラウスはこの提案に納得せず、自分の出演料についての過去の事例を伝え、金額を上げようと試みた。フランクフルトでのムゼウム協会では同一プロによる2回のコンサートで3000ライヒスマルクを得ており、放送出演料はこれに加算されるべきであること、さらに南アメリカや北アメリカでのコンサートはさらに高額で、一晩1000ドルを下っていなかったことを告げたのである²¹。この回答に対し中部ドイツ放送は、フランクフルトが2回のコンサートで3000ライヒスマルクならば、コンサート1回につき1500ライヒスマルクが基準になり得るとしても、これに放送出演料を加えた報酬は出せないと回答する。「ドイツの著名な同僚たちは例外なく、貴殿とはまったく対照的に、慎ましい要求しかしてきていないからです。貴殿の要求を批判するつもりはありませんが、私たちがお互いに理解しあえないというまさにそのことが残念でならないのです」という返信とともに、中部ドイツ放送のコンサートにクラウスが出演する話は白紙になった²²。

このトラブルのため、クラウスはこの《アラベラ》の中継放送まで、中部ドイツ放送の番組に出演する機会を得なかったようだ。《アラベラ》の放送でクラウスがどの程度の報酬を得たかは不明だが、出演を辞退する要素は多くなかったと考えられる。クラウスはリヒャルト・シュトラウスの強い信頼を得ていたため、この大作曲家の初演作品を広く世界に知らしめることに使命感を感じていたことだろう。また、放送の実現という点で見ても、《アラベラ》世界初演の中継放送は、文化政策の一端として政府から財政的支援が期待できる種類のものであったことも理由として想定できよう。いずれにせよ、クラウスと放送局の間にあったわだかまりは、《アラベラ》初演というビッグプロジェクトの中で、解消していたのである。

1.2 《アラベラ》のレコーディング

クラウスは《アラベラ》の初演を指揮したことで、新たな活動の機会を得た。ドイツ・グラモフォン社からの依頼で、これまで共演の機会がなかったベルリン国立歌劇場のオーケストラを指揮して、《アラベラ》のレコードを作ることになったのである。この録音は、ベルリンのリュッツォウ通りにあるスタジオで、当初、初演後ほどない同年7月10日の14時と翌11日の13時から開始される合計2回のセッションで完成させる計画だった。リヒャルト・シュトラウスの希望により、以下の箇所がレコーディングの候補となっていた。第1幕の二重唱〈あの人は私に適した人ではないわ〉、25センチ盤片面。第2幕の二重唱〈父が申しますには、私と結婚なさりたいとか!〉、25センチ盤両面。第3幕フィナーレから〈本当に良かったですわ、マンドリーカ〉、25センチ盤片面。オーケストラ作品として、第3幕前奏曲とワルツ。セッションの初日には、ヴィオリカ・ウルズレアクとアルフレート・イエルガーの二重唱、2日目にはウルズレアクとマルギット・ボコールの二重唱とオーケストラ作品が録音されることになっていた²³。交渉の結果、オーケストラ作品の録音予定は中止になった。もし録音するとしたら、ベルリンのオーケストラがこの作品を演奏した後のほうがよいとの判断があったからである。各セッションも、3時間まで

ということになった²⁴。

この計画は、ウルズレアクの急病のため、秋に延期された²⁵。日程は9月の最終週に決まり、9月30日の15時から第1幕の二重唱を収録し、余った時間で未収録分のリハーサル、10月1日に残りを録音するというのである²⁶。しかし、クラウスが楽譜をもとに演奏時間を割り出したところ、予定していた面数では収まらず、最低でも5面が必要であることが分かってきた。そこで彼は、ある提案をする。ドレスデンから初演でも歌ったアルノ・シェレンベルクを呼び、第2幕のアラベラとラモラルの短い二重唱と、ここで続けて演奏されるワルツを追加し、30センチ盤も併用して全部で6面に収録する、というものだった。クラウスは、「いつの時代にも通用する解釈となる、信頼できる録音」を作ろうと考えていたのである²⁷。

この提案は、レコード会社にとっては「理想主義」にほかならず、営業戦略上、受け入れがたいものだった。今回の収録では収録時間が長い——つまり、レコードの販売価格が上がる——30センチ盤は使用せず、当初の予定通り、25センチ盤4面で録音できるよう、演奏個所を調整することで話がまとまった²⁸。

このレコーディングの早朝、クラウスはウィーンから夜行列車でベルリンに到着した。アドロン・ホテルで休息した後、レコーディング・スタジオに移動した²⁹。第3幕のフィナーレは予定通りの箇所、ほかは歌い始める場所を変更し、第1幕の二重唱〈だけど本当に、私のための人がこの世にいるのなら〉、第2幕の二重唱〈あなたのような方を、私はこれまで見たことがありません〉の録音が行われたのである。録音終了後、クラウスはドイツ・グラモフォンのスタッフに対し、共同作業に感謝の気持ちを述べる手紙を送った³⁰。

クラウスとベルリンの楽壇との結びつきが生まれたことにより、1934/35年のシーズン中に、クラウスをベルリン国立歌劇場のオーケストラ・コンサートに招聘する計画が持ち上がってきた。この件は、歌劇場監督ヴィルヘルム・フルトヴェングラーからクラウスに伝えられた³¹。これに対してクラウスは、ウィーンでの活動に専念しなければならず、客演コンサートの仕事を制限していること、企画中のオペラ公演があって予定を開けておく必要があるとの理由

で断りの手紙を書いている³²。結局、クラウスとベルリン国立歌劇場との共演は、1935年1月に同歌劇場監督に就任するまでに、このレコーディングしか機会がなかったのである。

2. クラウスのベルリン国立歌劇場監督就任までの経緯

クラウスがベルリン国立歌劇場監督に就任するにあたり、決定的な要因となったのは、ヒトラーやゲッベルスとのコネクションである。彼らに関係が生まれるきっかけとなったのは、1934年10月30日、バイエルン国立歌劇場総支配人のオスカー・ヴァレックがゲッベルスに対し、このオペラ座の音楽総監督ハンス・クナッパーツブッシュの退任と、その後釜にクラウスを据えることを提案してきたことである³³。この背景には、ヒトラーがクナッパーツブッシュをミュンヘンのポストから降ろし、その後釜にクラウスを据ようと考えていたことがあった³⁴。同年11月22日、ゲッベルスは再びヴァレックと話し合う機会を持ち、クラウスのミュンヘン招聘の件について、ゲッベルス自らが交渉にあたる決断をする³⁵。

ゲッベルスとクラウスの会合の可能性は、おそらくこの11月のヴァレックとの話し合いの頃、クラウスに伝えられたと思われる³⁶。クラウスの『指揮記録』によると、彼がベルリンに滞在したのは11月23日から25日である。しかし、このスケジュールでベルリンに滞在するためには、クラウスはウィーンでの仕事を調整する必要があった。問題となったのは、11月22日である。この日、クラウスはウィーン国立歌劇場でヴェルディの《ファルスタッフ》を指揮した後³⁷、シェーンブルンで開催された「ヨハン・シュトラウスの夕べ」でもタクトをとることになっていた³⁸。ヴェルディの《ファルスタッフ》は、タイトルロールで出演が予定されていたヤーロ・プロハスカが病気になったこともあり、ヴォルフ＝フェラーリの《4人の田舎者》に変更された³⁹。また、「ヨハン・シュトラウスの夕べ」にクラウスはベルリンでのレコーディングという名目で出演せず⁴⁰、カール・アルヴィンが代役となった⁴¹。

11月22日の夜、クラウスはベルリンに向けて出発し、24日の午後1時から2

時15分まで総統官邸でヒトラーとゲッベルスに会った⁴²。ヒトラーとゲッベルスの間では、この前日までに、「偉大な人間にして芸術家」であるクラウスをミュンヘンに招聘することで意見がまとまっていた⁴³。面会当日の様子は、ゲッベルスが日記に書き記している。クラウスに対してミュンヘンの件を切り出したのはヒトラーだった。クラウスは、ウィーンを離れることに躊躇した。当地のオペラ座の建物が素晴らしいと言うのである。そこでヒトラーとゲッベルスは、ミュンヘンにも新しいオペラ座を建造すると返答したようだ⁴⁴。この場でクラウスがどのような返事をしたかについて、ゲッベルスの日記に記載はない。だが、クラウスがこの時の模様について『指揮記録』に「決定的な会談」と書き残していることから、彼がこのオファーをどのように受け止めたかを推測できよう。彼は、この場では承諾の旨は伝えなかったのかもしれないが——もし承諾していたらゲッベルスは日記にそう記したはずだ——、この提案に前向きであったのだ。

クラウスがこのオファーを好意的に受け止めることができた理由の一つとして、この時点で彼が抱えていた、ウィーン国立歌劇場との契約問題を挙げることができる。彼がウィーン国立歌劇場の総監督に就任したのは1929年9月1日で、契約期間は5年だった⁴⁵。1934年春にこの契約更新は行われたものの、1年単位となっていた⁴⁶。このような不安定な状況ゆえ、ヒトラーとゲッベルスから提示されたポストは、クラウスにとって魅力的なものだったのである⁴⁷。

クラウスのミュンヘン転出の準備が始まった矢先、ある事件が起きる。同年11月25日、つまりクラウスがヒトラーやゲッベルスと会った翌日、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーが作曲家パウル・ヒンデミットを擁立する記事「ヒンデミットの場合」を発表した。これを契機に、いわゆるヒンデミット事件が起きたのである。フルトヴェングラーは、ナチスの文化政策と対立する態度をとる以上、公職にとどまることは許されなかった。12月4日、フルトヴェングラーはゲーリングのもとに行き、ゲッベルスに宛てた辞表を提出すると、ゲッベルスはこれを受理した⁴⁸。こうしてフルトヴェングラーは、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団音楽監督をはじめ、ベルリン国立歌劇場監督、プロイセ

ン枢密顧問官，さらには帝国音楽院副総裁の地位から身を引くことになる。同日，ベルリン国立歌劇場音楽総監督だったエーリヒ・クライバーも，フルトヴェングラーに同調して職を辞した⁴⁹。

フルトヴェングラーの辞任はこの翌日にウィーンでも報じられ⁵⁰，すぐに後任の候補者としてクラウスの名が噂された⁵¹。彼が11月末にベルリンに行っていたことに目を付けた者がいたのである⁵²。クラウスは，そのような申し出は受けていないと回答した⁵³。

ベルリンから戻った後，クラウスはウィーンでの指揮活動が続いた。11月26日のヴェルディ《ファルスタッフ》，11月30日のモーツァルト《魔笛》（いずれも国立歌劇場），12月3日のパレストリーナとJ・S・バッハの作品によるウィーン国立歌劇場合唱団の合唱コンサート（楽友協会），12月5日のウィーン音楽アカデミー（現在のウィーン国立音楽大学）による記念コンサート（楽友協会），12月7日のヴェルディ《ファルスタッフ》，12月8日のビットナー《すみれ》の初演（いずれも国立歌劇場）がそれである。この間にナチスの上層部では，フルトヴェングラーの後任の件で議論が進んでいた。その詳細は明らかではないが，面談をしたばかりのクラウスに対し，ミュンヘンに代わり，ベルリンのポストを提供することで話が進んだことは確かだ。クラウスは，ビットナーの初演の後，ベルリンへ向かう⁵⁴。12月10日の午後4時半から5時半に総統官邸でふたたび面談が行われた。そして，同日午後7時15分，クラウスはベルリン国立歌劇場監督に任命されたのである⁵⁵。

クラウスのオペラ監督任命は，この劇場における実績が買われたというより，政治的決定であったと言える。このようなトップダウン式の歌劇場人事は，ナチスが政権を掌握してから程なくして始めていたことだった。その事例として，ドレスデン国立歌劇場のケースを挙げることができる。ナチスが政権を獲得した時，フリッツ・ブッシュがこの劇場の音楽監督の任にあった。《アラベラ》初演で述べたように，1933年3月7日のヴェルディ《リゴレット》の公演を最後に，ブッシュはこの職を辞すことになる。この後任候補となったのは，それまでこの劇場と縁がなかったカール・ベームである。彼の回想録によると，彼

はこの劇場での最初の公演となったワーグナーの《トリスタンとイゾルデ》第1幕の演奏を終えた後、音楽監督への就任を打診された。ベームはハンブルクの契約が残っていたことを理由にこのオファーを固辞したものの、ドレスデンでの活動に魅力を感じたため、ハンブルクに戻ると契約満了前に退職できるように願い出たという⁵⁶。このプロセスは迅速に進められた。ベームがドレスデンに客演したのは5月3日⁵⁷、移籍が決定し、彼が友人からの祝いの手紙に返礼したのはこの10日後である⁵⁸。そして翌年1月1日からはドレスデンに居を移すことになる⁵⁹。この人事がこれほど手際よく進んだ背景には、1934年4月にベームが友人に宛てた手紙で述べたように、ヒトラーの意向があった⁶⁰。ベームがこの劇場に初めて招聘された際、公演が終わる前に音楽監督を打診されたのも、おそらくこの時点までに人選が済んでおり、本人の希望があれば話が進むようになっていたためと思われる。

さて、クラウスのベルリン移籍決定は、12月11日にウィーンでも報じられた。このニュースを第1面で報じた新聞さえあったのである⁶¹。この日の午後、クラウスは翌年8月末までとなっていたウィーン国立歌劇場との契約を解消するため、辞職願を提出する⁶²。この日の晩に行われたヴェルディの《ファルスタッフ》は、クラウスがウィーン国立歌劇場音楽監督として指揮した最後の公演となった。この日、反共的な組織である護国団のメンバーがオペラ座に詰めかけ、第3幕開始時にクラウスが登場した際、口笛や野次で騒ぎ立てた。そのため、警察の手により騒ぎが静められたという⁶³。12月15日、クラウスはウィーン国立歌劇場のメンバーに感謝の手紙を残し、このオペラ座を去った⁶⁴。その際、クラウスはウィーンで育てた歌手たちをそっくりベルリンに連れて行った。ただし、ヴィオリカ・ウルズレアク、ヨーゼフ・マノヴァルダ、フランツ・フェルカー、カール・ハメスには、ウィーン国立歌劇場と結んでいた契約が1934/35年のシーズン末まで残っていた。彼らがウィーンとの契約更新をせず、ベルリンにおいて専属契約で出演するようになったのは、この次のシーズンからである⁶⁵。

3. 1935年から1936年にかけてのベルリンにおけるクラウスの活動

クラウスがベルリン国立歌劇場音楽監督としての活動を開始したのは1935年1月からだったが、この街での活動はわずか2年で終わった。その理由は、彼はヒトラーやゲッベルスとのコネクションはあるものの、ベルリンの楽壇とほとんど縁がない状態でオペラ座の監督に就任したことにあった。制作現場で権限を持つ人々との交渉で手を煩わされたのである。クラウスにとって不幸だったのは、フルトヴェングラーが1935年2月にはゲッベルスに謝罪し、同年4月からベルリンで活動を再開したことだった。総支配人ハインツ・ティーティエンのように、突如現れたこの新参者に劇場を追われることを恐れるあまり、フルトヴェングラーと組み、反クラウスのキャンペーンを行う者さえいた。それがあまりに執拗であったため、同年5月にはクラウスがミュンヘンに転出し、フルトヴェングラーがベルリン国立歌劇場監督に復帰するという噂が流れるようになる⁶⁶。クラウスもゲッベルスに事あるたびに不満を述べるようになり、当初約束されていたミュンヘンへの異動を希望する。その結果、クラウスは1937年1月に活動の拠点をミュンヘンに移すことになる⁶⁷。

以上は、1935年から翌年にかけてのクラウスとベルリン国立歌劇場との関係についての要点である。今回は、歌劇場内での複雑な人間関係には踏み込まず、クラウスの音楽活動に目を向け、そのアウトラインを描くことにしたい。この期間の活動のメインだった、ベルリン国立歌劇場でのオペラ公演のほか、ラジオ放送の番組出演とレコーディングにも着目する。なお、クラウスのオペラ公演の演目と日付は、クラウスの『指揮記録』に基づくものである。

3.1 1935年1月から6月までの活動

クラウスがベルリンで披露した最初の演目は、ワーグナーの《ニュルンベルクのマイスタージンガー》だった。この演目は1月15日に続き、シーズンに終わりまでにさらに4回（1月20日、1月30日、3月3日、5月11日）、クラウスの指揮で公演が行われている。ナチスが政権を掌握してちょうど3年目にあたる

1月30日の公演には、ヒトラーも臨席したという。このほか、クラウスが指揮した作品は、ワーグナーの《ニーベルングの指環》4部作が2回（《ラインの黄金》は1月26日と6月9日、《ワルキューレ》は1月27日と6月10日、《ジークフリート》は2月3日と6月12日、《神々の黄昏》は2月6日と6月14日）、リヒャルト・シュトラウスの《アラベラ》が4回（3月9日、3月24日、4月27日、7月1日）、《エジプトのヘレナ》が9回（3月30日〔新演出初日でヒトラーが臨席した〕、4月4日、4月9日、4月12日、4月25日、5月3日、5月24日、6月5日、6月19日）、《ばらの騎士》が7回（5月8日〔新演出初日〕、5月12日、5月22日、5月28日、6月2日、6月22日、6月25日）である。これらの演目を見てわかるように、クラウスが音楽監督に就任した最初のシーズンでは、彼の担当はワーグナーとリヒャルト・シュトラウスの公演に集中していた。このことは、クラウスの招聘の際、彼のドイツ・オペラのスペシャリストとしての側面が買われたことを物語っている。

本稿の第1章で見たように、1933年以降のドイツにおいてクラウスがラジオやレコードという音声メディアを通じて示してきたのは、リヒャルト・シュトラウスの演奏に秀でた指揮者という側面だった。この特質は、この1935年1月から6月までのラジオ放送を通じても広く世に伝えられている。先の公演のうち、《エジプトのヘレナ》の初日は、帝国放送ベルリン局によって生放送された。この6か月間にクラウスが出演したラジオ番組はさらに2つあるが、そのいずれにおいても、彼はリヒャルト・シュトラウスの作品を指揮している。

その一つは、1935年5月1日に放送された番組である。この日は祝日で、全国ネットのドイツ放送と各地方局が番組を持ち寄りながら、終日、全国統一放送が行われた。クラウスが関係したのはベルリン国立歌劇場において開催された帝国文化院の祝典行事で、この模様も全国に中継された⁶⁸。この行事の式次第については、1930年代後半に作成された帝国放送協会本部の録音盤リストから知ることができる。放送の開始は9時55分で、ヘルマン・プレープストのアナウンスによる導入アナウンスの後、クラウスが国立歌劇場のオーケストラ（シューツカペレ・ベルリン）を指揮してリヒャルト・シュトラウスの《祝典前奏

曲》を演奏した（演奏時間は10分17秒）。その後、ゲッベルスの演説が続いた。内容は、ドイツの文化建造物の改築と、1934/35年度の国家賞をレニ・リーフェンシュタールとエーバーハルト・ヴォルフガング・メラーに授けることを告知するものだった（33分1秒）。その後、ブラームスの交響曲第4番から第4楽章がローベルト・ヘーガー指揮のシュターツカペレ・ベルリンによって演奏され（演奏時間は8分26秒）⁶⁹、祝典は終わった。

この祝典に次ぐクラウスのラジオ出演番組は、1935年6月11日の20時15分から21時45分にリヒャルト・シュトラウスの71歳を祝して公開放送された、《ナクソス島のアリアドネ》の劇中劇全曲である。指揮者クレメンス・クラウス、放送演出レオポルト・ハイニッシュのほか、以下の歌手がメンバーとなった。

アリアドネ：ヴィオリカ・ウルズレアク（ソプラノ）

バッカス：ヘルゲ・ロスヴェンゲ（テノール）

水の精：ミリツァ・コルユス（ソプラノ）

木霊：イロンカ・ホルンドナー（ソプラノ）

木の精：ゲルトルーデ・リュンガー（アルト）

ツェルビネッタ：エルナ・ベルガー（ソプラノ）

ブリゲッラ：エーリヒ・ツィンマーマン（テノール）

スカラムッチョ：ベンノ・アルノルト（テノール）

ハルレキン：カール・ハンメス（バリトン）

トルファルディン：オイゲン・フックス（バス）

帝国放送ベルリン局大管弦楽団のメンバー⁷⁰

この放送は、ヨーロッパで広く聞かれるものとなった。ドイツでは「国民の時間」での全国統一放送、すなわち全国ネットのドイツ放送、ドイツ国内の各地方局（ベルリン、ブレスラウ、フランクフルト、ハンブルク、ケルン、ケーニヒスベルク、ライプツィヒ、ミュンヘン、シュトゥットガルト）の同時放送番組とされた。ドイツ国外で全曲を放送したのはルーマニア、スウェーデン、スイス、ユーゴ

スラビアで、部分的な中継を実施したのはフィンランド（最初の30分）、スペインのマドリッド局（最初の45分）だった⁷¹。

この《アリアドネ》の放送は、ナチ政権下の文化政策がどのような実りをもたらすかを広く伝えるプロパガンダとして、大きな波及効果が期待できるものと言えた。それゆえ、帝国放送協会指導部はこの番組の制作を担当する帝国放送ベルリン局に対し、3000ライヒスマルクの助成金を提示した⁷²。そもそこの番組は、ベルリン国立歌劇場の要職にある指揮者に加え、ベルガー、ウルズレアク、ロスヴェンゲなどの名だたる歌手も擁していたため、放送局が全額負担する自主制作番組としては経費の掛かるものであったということもある。この番組の出演者への報酬は、現時点で把握できた限りでは、ウルズレアクには800ライヒスマルク⁷³、ベルガーには400ライヒスマルク⁷⁴、リュンガーは300ライヒスマルクである（旅費はこれとは別に支給された）⁷⁵。他の出演者については、この時期の放送局自主制作番組への出演料が参考になるだろう。これまでの調査で明らかになったのは、クラウスには1937年3月14日にシュトゥットガルト局が放送したモーツァルト《ティートの慈悲》で1000ライヒスマルク⁷⁶、ロスヴェンゲには1937年2月25日にミュンヘン局によるプッチーニ《蝶々夫人》で600ライヒスマルクが出演料として支払われている⁷⁷。彼らにも旅費の分は加算されていた。

この番組は放送スタジオからオンエアされたため、劇場中継とは異なり、適切な場所にマイクを配置できた。音声の状態が良く、番組は放送と同時に録音盤にも収録されている。1940年6月にはミュンヘン局でこの録音が放送する計画を立てられていたことが物語るように⁷⁸、再放送の可能性も想定しての措置である。幸い、この音源は戦火を免れ、完全な形で残ったため、クラウスがドイツ帝国放送協会の自主制作番組に初めて出演した折の模様を今日でも耳にすることができる⁷⁹。

3.2 1935年10月から1936年6月までの活動

ベルリン国立歌劇場監督として2シーズン目（1935/36年）になると、クラウ

スは4つの演目を9回ずつ指揮している。モーツァルトの《コジ・ファン・トゥッテ》(10月6日, 10月19日, 10月26日, 11月7日, 11月13日, 11月22日, 1月13日, 4月18日, 4月22日), リヒャルト・シュトラウスの《ばらの騎士》(10月17日, 11月16日, 12月27日, 1月28日, 3月1日, 3月13日, 4月12日, 6月13日, 6月22日), ベートーヴェンの《フィデリオ》(11月2日〔新演出初日〕, 11月9日, 11月19日, 12月1日, 12月11日, 1月21日, 1月30日, 6月8日, 6月15日), プッチーニの《トゥーランドット》(12月8日〔新演出初日〕, 12月14日, 12月26日, 1月1日, 2月4日, 2月16日, 4月5日, 4月14日, 5月31日)がそれである。このうち1935年10月26日の《コジ・ファン・トゥッテ》と12月26日の《トゥーランドット》がラジオで生放送された。

このシーズンの演目を見ると、クラウスのレパートリーの多様さが発揮されるようになってきているのがわかる。おそらく、彼がウィーンで育てた歌手が歌劇場の専属契約となり、柔軟にプログラムを組めるようになったためと思われる。そうした彼の活動の一端を示しているのが、1936年にドイツ・グラモフォン社によって制作された数多くのレコードである。先に見た1933年の事例のように、制作サイドで盤面が増えることを極度に嫌っていた雰囲気はなく、ベルリンにおけるクラウスの上演演目に含まれていなかった作品も収録された。この背景には、ドイツのレコード産業がこの時期に回復してきたことが影響しているのだろう⁸⁰。この時クラウスが収録した曲目については、1933年のケースと異なり、彼のもとに記録が残されていない。本稿ではマイケル・グレイのリサーチを基礎とし⁸¹、これに不足している情報を加えて全体を把握することにしたい。なお、*印を付した曲目は、グレイの記録ではオーケストラ名が記載されていないが、他の作品と同様、ベルリン国立歌劇場のオーケストラ、すなわちシュターツカペレ・ベルリンが演奏している可能性は高いように思われる。

1月22日

モーツァルト：《フィガロの結婚》第3幕から手紙の二重唱

ヴィオリカ・ウルズレアク, エルナ・ベルガー (ソプラノ)

2月19日

ヴェルディ：《リゴレット》第1幕から〈二人は同じ〉

ヴェルディ：《リゴレット》第2幕から〈悪魔め, 鬼め〉

アレクサンデル・スヴェト (バリトン)

2月21日

ヴェルディ：《トロヴァトーレ》第4幕から〈ご覧下さい, 私の苦い涙を〉*

ヴィオリカ・ウルズレアク (ソプラノ), アレクサンデル・スヴェト
(バリトン)

4月23日

R・シュトラウス：《ばらの騎士》第3幕から〈夢だわ, 本当ではあり
得ない〉

ティアナ・レムニッツ, エルナ・ベルガー (ソプラノ)

5月29日

ヴェルディ：《仮面舞踏会》第1幕から〈あなたの生命には〉

ヴェルディ：《仮面舞踏会》第3幕から〈お前こそ心を汚すもの〉

アレクサンデル・スヴェト (バリトン)

R・シュトラウス：〈春の祭り〉 作品56-5

R・シュトラウス：〈ツェツィーリエ〉 作品27-2

ヴィオリカ・ウルズレアク (ソプラノ)

6月6-12日

モーツァルト：《ドン・ジョヴァンニ》第1幕から〈お手をどうぞ〉⁸²

ハインリヒ・シュルスヌス (バリトン), エルナ・ベルガー (ソプラノ)

6月11日

モーツァルト：《ドン・ジョヴァンニ》第1幕から〈お手をどうぞ〉*

ワーグナー：《タンホイザー》第1幕から〈君が大胆な歌で我々と争っ
たとき〉*

ワーグナー：《タンホイザー》第2幕から〈ああ, 天よ, わが願いをき

きたまえ！)*

ハインリヒ・シュルスヌス (バリトン), エルナ・ベルガー (ソプラノ)
 ヴェルディ:《ドン・カルロ》第3幕から〈私の最後の日〉*⁸³
 ハインリヒ・シュルスヌス (バリトン)

7月31日

ヴェルディ:《トスカ》第2幕から〈歌に生き, 恋に生き〉
 プッチーニ:《トゥーランドット》第2幕から〈この宮殿の中で〉
 ヴィオリカ・ウルズレアク (ソプラノ)
 R・シュトラウス:《ばらの騎士》第3幕から〈私が誓ったことは〉
 ヴィオリカ・ウルズレアク, エルナ・ベルガー, ティアナ・レムニツ
 ツ (ソプラノ)

3.3 1936年11月6日の「工場コンサート」

ベルリン国立歌劇場の1935/36年のシーズンが7月6日に終わった翌日, クラウスは休暇に入る。そして9月1日に, バイエルン国立歌劇場の芸術総監督の契約に署名した。ミュンヘンでの活動は1937年1月1日からだった⁸⁴。クラウスがミュンヘンに移転するまではベルリンのポストについていたが, 『指揮記録』によると, 彼には「ベルリンで1936年12月末日まで休暇が与えられた」。そのため, 彼はこの年の後半にベルリン国立歌劇場の公演を指揮することはなかった。しかし, オペラ座の「監督」としてこの休暇期間にベルリンで演奏する機会があった⁸⁵。R・シュトック社において開催された「工場コンサート (Betriebskonzert)」である。

この「工場コンサート」とは, クラシック音楽の一流演奏家が工場を訪問して昼休みに演奏を披露する, 放送局主催の公開行事だった。番組の時間は60分である。この番組への出演料は手厚かったと思われる。1937年1月29日に開催された「工場コンサート」を例にすると, カール・ベームに800ライヒスマルク, エルナ・ザックに500ライヒスマルク, ヘルゲ・ロスヴェンゲに700ライヒスマルクが旅費とは別に支払われているのである⁸⁶。

1936年11月6日の正午から13時に開催されたクラウスのコンサートは、このシリーズの第1回にあたり、全国統一番組として生放送された。彼が指揮したのはドイツ放送大管弦楽団（Das Große Orchester des Deutschlandsenders）で、演目はニコライの《ウィンザーの陽気な女房たち》序曲、ウェーバーの《魔弾の射手》からマックスのレチタティーボとアリア〈嫌だ、これ以上、この苦しみには耐えられない〉、ブラームスの《ハンガリー舞曲》から2曲（作曲者による編曲）、ビゼーの《カルメン》からドン・ホセのアリア（花のアリア）、チャイコフスキーの組曲《くるみ割り人形》抜粋（序曲、行進曲、〈中国の踊り〉、〈トレパーク〉、〈花のワルツ〉）、ワーグナーの《タンホイザー》序曲で、ウェーバーとビゼーではテノールのマルセル・ヴィトリッシュが出演した⁸⁷。

コンサートが親しみやすい曲で構成された理由は、この行事が芸術を一般に開かれたものにすることを目指すナチスの理念を実現したものだからである。コンサートのレポートにおいては、この行事はナチスの余暇団体「歓喜力公団」のスローガンの一つ「芸術は国民のものである」が実行に移されたものとみなされていたし、この行事の開催にあたって帝国放送指導者だったオイゲン・ハダモフスキーも、「芸術家は、王とともにではなく、労働者とともに歩むべきである」と述べたという⁸⁸。

4. ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団への客演

ベルリン国立歌劇場のポストを離れた後、クラウスは活動の拠点をミュンヘンに移した。そのため、必然的にベルリンの楽壇との関係は疎遠になってゆく。彼がふたたびベルリンで演奏できるよう段取りを整えたのは宣伝省である。1938年11月25日、ドイツ・オペラハウスにおいて、帝国文化院の設立5年を祝う記念行事が開催された。この祝賀演奏で、クラウスはベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮する機会を初めて得たのである。

クラウスがこの行事に招聘されるまでの経緯は、ベルリン・フィルの支配人ハンス・フォン・ベンダがクラウスにあてた手紙（1938年11月5日付）によって推測することができる。この書簡によると、宣伝省のルートヴィヒ博士なる人

物がベルリン・フィルに対し、この行事でクラウスが指揮することを伝えてきたという⁸⁹。このことは、指揮者の人選にはベルリン・フィルが関与せず、クラウスと宣伝省の間で決定していたことを意味している。

クラウスの出演はこの行事の20日前に決まったため、リハーサルスケジュール調整が問題となった。ベルリン・フィルでは11月20日と21日にブルーノ・キッテルの指揮によるブラームスの《ドイツ・レクイエム》、11月24日にプロイセン芸術アカデミーで4人の作曲家が自作を指揮するコンサートが予定されていた⁹⁰。いずれも演奏の機会がそれほど多くない作品だけに、十分なりハーサルが必要だった。一方、クラウスは、11月22日にミュンヘンでリヒャルト・シュトラウスの《平和の日》の公演を指揮することになっていた。双方にとって件の行事のために十分にリハーサルができる時間は、11月19日の10時から16時までの間にしかなかった⁹¹。この前日にクラウスはハノーヴァーでヴィオリカ・ウルズレアクとの「歌曲の夕べ」に出演することになっていたため、ここからベルリンまでの移動時間を勘案した結果、19日の午前11時30分からフィルハーモニーでリハーサルをするということで話がついた。しかし、これでは本番の会場で音響が確認できないため、行事当日にもベルリン・オペラハウスで最終リハーサルをするようになった⁹²。ただし、共演のシュルスヌスは19日のリハーサルに参加できないため、伴奏は彼なしで練習しておき、当日の本番1時間前の10時半から会場でオーケストラと合わせるようになったようだ⁹³。

この行事もラジオで中継放送され、ドイツ帝国放送協会によって録音盤も制作された。当日の式次第を、全22面に収録された録音盤の内容で示すと次のようになる。

50206～50208 リヒャルト・シュトラウス：《祝典前奏曲》（6分）

〔注記〕この作品の演奏には約12分を要するが、1939年のリスト作成時点で音源の一部が失われていた。

50208～50209 拍手とアナウンス（1分19秒）、シューベルト：〈音楽に寄せ

- て〉（2分57秒）
- 50209～50211 シューベルト：〈無限なるものに〉（4分2秒），拍手とアナウンス（1分9秒）
- 50211～50214 J・S・バッハ：ブランデンブルク協奏曲第3番から第1楽章と第3楽章（11分44秒），拍手とアナウンス（1分21秒）
- 50214～50217 ローベルト・ライの演説（9分16秒），拍手とアナウンス（1分4秒）
- 50217～50226 ヨーゼフ・ゲッベルスの演説（31分14秒），ライによる閉会の辞（42秒），国歌（2分3秒）
- 50226～50227 終了アナウンス（1分36秒）⁹⁴

現在、この音源はドイツ放送アーカイブに保存されているが、現存しているのは演説の部分が中心で、音楽は《祝典前奏曲》の冒頭部分55秒間、〈音楽に寄せて〉の全曲のみである⁹⁵。この録音を聞くと、リハーサルの時間が限られた演奏ではあったため、特に1番の歌唱においてシュルスヌスといささか息の合わないところがあることは否めない。しかし、クラウスが巧みにルバートを用いてテンポに絶妙な揺らぎを作っていること、さらに彼の音楽作りの特徴と言える陶酔的で透明感のある音色をベルリン・フィルから引き出すことに成功していることも、この録音からうかがわれる。

さて、その後クラウスは、1939年3月8日にベルリン国立歌劇場に復帰を果たす⁹⁶。演目はリヒャルト・シュトラウスの《ダフネ》と《平和の日》である。いずれもこの前の年に初演された1幕物のオペラで、前者はドレスデンでカール・ベーム、後者はクラウスがミュンヘンで初演を手掛けていた。このダブルビルによる公演は、その後、3月12, 17, 24日, 4月11日, 5月4日と続く。クラウスはさらに5月にベルリンにおいて、外国人のためのドイツ音楽研究所(Deutsches Musikinstitut für Ausländer)で行われた指揮者講習会の講師も担当した(5月2～5, 10, 14, 15, 25日)。彼はベルリンに長期滞在しなかった。任地のミュンヘンだけでなく、各地で精力的に公演をこなしながら、ベルリンの

仕事を成し遂げたのである。以下、そのスケジュールを具体的に示す。3月15日にワーグナーの《トリスタンとイゾルデ》でウィーン国立歌劇場にも復帰し、その後、彼の任地であるミュンヘンにおけるオペラ公演（3月18日と5月24日にリヒャルト・シュトラウスの《サロメ》、3月22日に《トスカ》、3月25日にムソルグスキーの《ソローチンツィの定期市》とオルフの《月》、4月9日にビゼーの《カルメン》、4月10日と5月7日にプフィッツナーの《パレストリーナ》、4月13日にチャイコフスキーの《エフゲニー・オネーギン》、4月20日にリヒャルト・シュトラウスの《平和の日》、4月22日にプッチーニの《トゥーランドット》、5月16日にリヒャルト・シュトラウスの《ばらの騎士》、5月18日にヴェルディの《ドン・カルロ》）とオーケストラ・コンサート（5月8日、ベートーヴェンの交響曲第8番、ソプラノのフェリーチェ・フューニ＝ミハチェクを迎えてのプフィッツナーの歌曲〈春の空はなぜこんなに青い〉作品2-2、〈菩提樹の下で〉作品24-1、〈悲しみの聖母像の前で祈るグレートヒェン〉作品38-5、〈母なるヴィーナス〉作品11-4、ドヴォルザークの交響曲第9番《新世界から》）を指揮する。加えて、レーゲンスブルクにおいてウルズレアクとの歌曲の夕べ（3月20日）、フランクフルトでのオペラ客演（4月16日にプフィッツナーの《パレストリーナ》、4月18日にリヒャルト・シュトラウスの《ばらの騎士》）、フロレンツでのオーケストラ・コンサート（3月30日、ベートーヴェンの交響曲第8番、レスピーギの交響詩《ローマの噴水》、リヒャルト・シュトラウスの《アルプス交響曲》）にも出演したのである。

1938年11月の記念行事に続くベルリン・フィルとの共演オファーは、この多忙な日々を送っていた最中の4月13日にクラウスのもとに届いた⁹⁷。6月11日に75歳となるリヒャルト・シュトラウスのための記念公演で、宣伝省のゲッベルスの後援により実現したのである。公演は、ラジオでも全国に中継放送されることになっていた。

この時も、リハーサルのスケジュール調整に時間を要した。6月10日にクラウスは、ウィーン国立歌劇場でリヒャルト・シュトラウスの《平和の日》を指揮することになっていた。そのための準備の合間しか時間が取れず、ベルリンでのリハーサルは6月6日と7日の午前中となった⁹⁸。また、《平和の日》を

終えた後、翌日の記念コンサートのゲネラルプローベに間に合うよう、彼はウィーンとベルリン間を特別機で移動する手筈が整えられていた⁹⁹。

6月11日の午前中、リヒャルト・シュトラウスはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とともに、75歳を祝うコンサートを指揮することが決まっていた。クラウスは、このコンサートもラジオで中継放送が予定されていたことをベルリン・フィルからオファーを受けた時点で知っていたため、ウィーン・フィルとの競合を避けたプログラムを組もうとした¹⁰⁰。ウィーン・フィルが演奏したのは、《ウィーン・フィルのためのファンファーレ》（この曲のみルドルフ・モラルトの指揮だった）、組曲《町人貴族》（ヴォルフガング・シュナイダーハンのヴァイオリン、ハンス・アルトマンのピアノ）、《家庭交響曲》である¹⁰¹。これに対し、クラウスとベルリン・フィルは、交響詩《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快なはずら》、ヴィオリカ・ウルズレアクをソプラノ独唱に迎えての《フリードリヒ・ヘルダーリンの3つの賛歌》、交響詩《英雄の生涯》を演奏し、作曲者の誕生日を祝った¹⁰²。

5. 総括

ヒトラーが政権を取った時点で、クラウスはベルリンの楽壇とコネクションを有していなかったものの、リヒャルト・シュトラウスの《アラベラ》世界初演を指揮したことで、ドイツ・グラモフォンからの同曲のレコーディングをする機会を得た。このレコーディングで指揮したのは、ベルリン国立歌劇場のオーケストラである。これを契機にこのオーケストラとの縁が生まれはしたが、次の共演の機会がないまま、1934年のヒンデミット事件を迎える。この事件でフルトヴェングラーが公職をすべて辞した時、そのポストにはベルリン国立歌劇場監督も含まれていた。ヒンデミット事件の引き金となるフルトヴェングラーの「ヒンデミットの場合」が新聞に掲載される前日、クラウスはヒトラーとゲッベルスに会っている。クラウスをウィーン国立歌劇場からバイエルン国立歌劇場に引き抜くためのものだった。しかし、ヒンデミット事件でフルトヴェングラーがベルリン国立歌劇場監督を辞すという、想定外の事態が起きた

ことで、クラウスがこの歌劇場のポストを継ぐことになる。このベルリン人事は、ベルリン国立歌劇場で強い人事権を有していたゲーリング主導によるものというのがこれまでの見方だった¹⁰³。しかし、ヒトラーやゲッベルスの間でクラウスのミュンヘン移籍が同時期に前向きに検討されていたことを踏まえると、この計画がトップダウンで切迫性を増ししていたベルリンに変更されたとみなすのが妥当である¹⁰⁴。ゲーリングが本件の決定に関わったとすれば、それはヒトラーとゲッベルスの意向に従うことであつたと思われる。

このような経緯を経てクラウスはベルリン国立歌劇場監督に就任したものの、その期間はわずか2年で終わった。フルトヴェングラーの復帰とともに、ベルリンにおけるクラウスの立ち位置が悪くなったためである。しかし、あらためて考えてみると、クラウスがベルリンのポストを辞してミュンヘンに異動したのは、当初の計画に戻ったことを意味している。クラウスにとっても、最初にナチスから打診されたのはバイエルン国立歌劇場の話だったため、クナッパーツブッシュの退任の話が進まない状況を踏まえて、ベルリンからミュンヘンに移ることを希望できたのである。

クラウスのベルリンにおける活動は、国立歌劇場でのオペラの指揮に加え、ラジオ放送やレコード制作においても行われた。特に音声メディアを通じての活動は、ベルリンの音楽文化を広く世界に示す機会となったことだろう。そして、ベルリン国立歌劇場監督を辞任した後、クラウスは宣伝省を通じて、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮する機会を得ることになる。帝国文化院での祝賀演奏、全国放送でのリヒャルト・シュトラウス生誕75年記念演奏会という、ナチスのプロパガンダとしての性格が強い行事への招聘だった¹⁰⁵。

全体を俯瞰すると、クラウスの活動を支えた人物として、リヒャルト・シュトラウスの存在の大きさに気づかされる。クラウスの演奏レパートリーでこの作曲家の作品が重要な位置を占めていたことは、本稿で示した多くの事例によって明らかである。クラウスがベルリン国立歌劇場との縁を作るきっかけとなったのも、この作曲家の《アラベラ》初演だった。そして、レコーディングでもこの作品が取り上げられている。先にこのレコーディングに関して詳述し

だが、プロセスを注意深く見ると、全4面のレコードを作るにあたり、シュトラウスの意向が反映されるものとなっていた。文書で確認はできないが、レコーディングの指揮者の人選にもシュトラウスが口添えした可能性も指摘できそうだ。そもそもシュトラウスは、かつてベルリン国立歌劇場の音楽総監督を務めていたため、作曲家としてのみならず、演奏家を推薦するということにかけても、ベルリンにおいて強い発言力を持っていたのである。

クラウスがリヒャルト・シュトラウスの解釈に秀でた指揮者だったということは、音声メディアを通じても広く世に伝えられていた。ドレスデンにおける《アラベラ》初演のラジオ中継とベルリンでのレコーディング、ベルリン国立歌劇場からの《エジプトのヘレナ》のラジオ中継、ドイツ帝国放送協会制作の《ナクソス島のアリアドネ》の公開放送、1935年と1938年の帝国文化院の行事における演奏と中継放送、1936年のレコーディングでの《ばらの騎士》、そしてリヒャルト・シュトラウス生誕75年記念コンサートの放送である。

音声メディアとのかかわりとなると、宣伝省によるプロパガンダを意識せざるを得なくなるが、クラウス本人としてはどうだったのか。《アラベラ》のレコーディングのところで述べたように、クラウスの関心はレコードによって作品の模範的解釈を残すことにあった。クラウスが音声メディアを通じて演奏を披露したのも、敬愛する作曲家の作品を秀逸な演奏で世に広めたいという、彼の芸術的欲求ゆえであろう。こうしたクラウスの想いは、ナチスのプロパガンダの一環として展開されることになるが、これはこの時代に音楽家がドイツの第一線で活躍するために避けて通れぬことだったのである。

* 本研究は JSPS 科研費 JP26770071, JP17K02378, JP21K00218 の助成を受けたものである。

注

1 本研究にあたっては、以下の図書館およびアーカイブから資料を提供していただい

- た。ここに記して、感謝したい。ドイツ連邦公文書館、オーストリア国立公文書館、バイエルン州中央公文書館、オーストリア国立図書館（同館の音楽コレクションの「クレメンス・クラウス・アーカイブ」には特にお世話になった）、ベルリン国立図書館、ドイツ放送アーカイブ、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団アーカイブ。
- 2 一例として、次の研究がある。Fred K. Prieberg: Kraftprobe. Wilhelm Furtwängler im Dritten Reich, Wiesbaden (Brockhaus) 1986, S. 187-194.
 - 3 Peter Muck: Einhundert Jahre Berliner Philharmonisches Orchester, Tutzing (Hans Schneider) 1982, Bd. 3, S. 289 und 458
 - 4 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団で管理している演奏記録、とりわけ1930年代のものに不備が認められることは、指揮者ヨーゼフ・カイルベルトの評伝においても指摘されている。Thomas Keilberth: Joseph Keilberth. Ein Dirigentenleben im XX. Jahrhundert. Hrsg. von Hermann Dechant, Wien (Apollon Musikoffizin) 2007, S. 43.
 - 5 リヒャルト・シュトラウスの《アラベラ》初演に関しては、以下を参照。Gerhard Splitt: Richard Strauss, die Dresdner Uraufführung der *Arabella* und das “Neue Deutschland”. In: Dresden und die avancierte Musik im 20. Jahrhundert. Teil II: 1933-1966. Hrsg. von Matthias Herrmann und Hanns-Werner Heister, Laaber (Laaber-Verlag) 2002, S. 285-303.
 - 6 エーバーハルト・シュタインドルフ（識名章喜訳）『シュターツカペレ・ドレスデン——奏でられる楽団史——』（慶應義塾大学出版会，2009年），123-124頁。
 - 7 Richard Strauss – Clemens Krauss: Briefwechsel. Gesamtausgabe. Hrsg. von Günter Brosche, Tutzing (Hans Schneider) 1997, S. 129 u. 132.
 - 8 Dagmar Wünsche (hrsg.) : Richard Strauss und Heinz Tietjen. Briefe der Freundschaft. In: Richard Strauss-Blätter, Heft 20 (1988), S. 54.
 - 9 Ebd., S. 56 u. 58f.
 - 10 Ebd., S. 60.
 - 11 Österreichische Nationalbibliothek (ÖNB). Musiksammlung. F59 Clemens Krauss Archiv 158/1-3. Clemens Krauss: Dirigier-Daten (Manuskript). 本稿では、クラウスの演奏に関するデータは、すべてこの資料に基づいている。論証の過程でこの資料に言及する場合には、本文中に『指揮記録』と示す。
 - 12 本稿で記したドイツ国内でのラジオ番組の放送日は、ラジオ情報誌『ドイツのラジオ (Der deutsche Rundfunk)』の当日の番組欄の情報に基づいている。《アラベラ》世界初演の様子がラジオで放送されることに関しては、例えば以下の新聞で同年5月27日に報じられていた。Vgl. Salzburger Volksblatt, 27. 5. 1933, S. 9. ザルツブルクに在住していた作家シュテファン・ツヴァイクはこの記事を読んだと見え、この翌日、リヒャルト・シュトラウスに宛てた手紙において、《アラベラ》初演の様子がラジオ放送されることに言及している。Richard Strauss – Stefan Zweig: Briefwechsel. Hrsg. von Willi Schuh, Frankfurt a. M. (S. Fischer Verlag) 1957, S. 51.

- 13 ラジオ番組シリーズ「国民の時間」の概要については、以下の文献を参照。Heinz Pohle: *Der Rundfunk als Instrument der Politik*, Hamburg (Verlag Hans Bredow-Institut) 1955, S. 297-299. 1933年のクラシック音楽番組における全国統一放送については、以下の拙稿も参照。拙稿「バイロイト音楽祭とナチス・ドイツ興亡——ラジオ放送をめぐる実証的検証——」（佐藤英・大西由紀・岡本佳子編『オペラ / 音楽劇研究の現在——創造と伝播のダイナミズム——』, 水声社, 2021年), 189-191頁。
- 14 *Der deutsche Rundfunk*, 11. Jahrgang (1933), Heft 26, S. 55-57.
- 15 Ebd., S. 18.
- 16 リヒャルト・シュトラウスの《アラベラ》の批評に関しては、以下も参照。Franzpeter Messmer (hrsg.) : *Kritiken zu den Uraufführungen der Bühnenwerke von Richard Strauss, Pfaffenhofen* (W. Ludwig Verlag) 1989, S. 254-264.
- 17 *Der deutsche Rundfunk*, 11. Jahrgang (1933), Heft 28, S. 62.
- 18 Österreichisches Staatsarchiv / Haus-, Hof- und Staatsarchiv (ÖStA/HHStA). HA Oper SR 1. Mitteldeutsche Rundfunk an Clemens Krauss, 8. 8. 1929.
- 19 ÖStA/HHStA. HA Oper SR 1. Clemens Krauss an den Mitteldeutschen Rundfunk, 15. 8. 1929.
- 20 ÖStA/HHStA. HA Oper SR 1. Der Mitteldeutsche Rundfunk an Clemens Krauss, o. D.
- 21 ÖStA/HHStA. HA Oper SR 1. Clemens Krauss an den Mitteldeutschen Rundfunk, 23. 8. 1929. 1929年1月の為替レートによると、1ドルに対し、4.2ライヒスマルクである。つまり、クラウスがアメリカで得た報酬をドイツの通貨に換算すると、約4200ライヒスマルクに相当することになる。当時の為替レートに関しては、以下を参照した。R. L. Bidwell: *Currency Conversion Tables*, London (Rex Collings) 1970, p. 23.
- 22 ÖStA/HHStA. HA Oper SR 1. Der Mitteldeutsche Rundfunk an Clemens Krauss, 27. 8. 1929.
- 23 ÖStA/HHStA. HA Oper SR 3. Ludwig Lustig an Clemens Krauss, 5. 7. 1933.
- 24 ÖStA/HHStA. HA Oper SR 3. Ludwig Lustig an Clemens Krauss, 7. 7. 1933.
- 25 ÖStA/HHStA. HA Oper SR 3. Deutsche Grammophon an Clemens Krauss, 13. 7. 1933.
- 26 ÖStA/HHStA. HA Oper SR 3. Karl Holy an Clemens Krauss, 25. 9. 1933.
- 27 ÖStA/HHStA. HA Oper SR 3. Clemens Krauss an Karl Holy, 27. 9. 1933.
- 28 ÖStA/HHStA. HA Oper SR 3. Karl Holy an Clemens Krauss, 28. 9. 1933.
- 29 ÖStA/HHStA. HA Oper SR 3. Clemens Krauss an Karl Holy, 27. 9. 1933.
- 30 ÖStA/HHStA. HA Oper SR 3. Clemens Krauss an Karl Holy, 4. 10. 1933.
- 31 ÖStA/HHStA. HA Oper SR 4. Wilhelm Furtwängler an Clemens Krauss, 25. 6. 1934.
- 32 ÖStA/HHStA. HA Oper SR 4. Clemens Krauss an Wilhelm Furtwängler, 4. 7. 1934.

- 33 Joseph Goebbels: Die Tagebücher von Joseph Goebbels. Hrsg. von Elke Fröhlich, München (K. G. Saur) 1993-2008, Teil I, Bd. 3/1, S. 129.
- 34 奥波一秀『クナッパーツブッシュ——音楽と政治——』（みすず書房, 2001年), 132-133頁。
- 35 Goebbels, a. a. O., Teil I, Bd. 3/1, S. 141.
- 36 ゲッベルスがクラウスに面談を打診した日付は, 残されている資料から特定することはできない。ただし, 本論において後述するように, クラウスは11月22日のウィーンでの予定を変更し, ベルリンに向かっている。この事実が示しているのは, ゲッベルスからの打診は, この直前に突如舞い込んだものであったということである。11月22日のクラウス出演公演の予告を時系列に見てゆくと, 11月21日までの新聞では彼の名前と予定演目が記されており, 11月22日の新聞ではじめて上演時間の短い演目への変更が掲載されている。新聞掲載情報が, 少なくとも前日までのものを反映していると考えれば, ゲッベルスからクラウスへの連絡は11月21日であった可能性を指摘できる。
- 37 Der Wiener Tag, 18. 11. 1934, S. 12. この《ファルスタッフ》の公演は, 18時55分から21時45分まで, オーストリア国内でラジオ中継されることになっていた。Radio Wien, 11. Jahrgang (1934), Heft 8, S. 22.
- 38 Der Wiener Tag, 21. 11. 1934, S. 7.
- 39 Kleine Volks-Zeitung, 22. 11. 1934, S. 7. ラジオ放送では, 予定されていた《ファルスタッフ》に代わり, 19時から21時35分まで, 《4人の田舎者》がオンエアされた (Salzburger Volksblatt, 22. 11. 1934, S. 6)。《ファルスタッフ》と《4人の田舎者》の演奏時間はほぼ同じであるが, 放送時間から推測するに, 舞台展開や休憩時間を含めた上演時間は《4人の田舎者》のほうが少し短かったと思われる。
- 40 Kleine Volks-Zeitung, 24. 11. 1934, S. 9.
- 41 Der Wiener Tag, 23. 11. 1934, S. 4.
- 42 この時刻は, クラウスの『指揮記録』に基づく。
- 43 Goebbels, a. a. O., Teil I, Bd. 3/1, S. 142.
- 44 Ebd., Teil I, Bd. 3/1, S. 143.
- 45 Neue Freie Presse, 20. 12. 1928, S. 8; Marcel Prawy: Die Wiener Oper. Geschichte und Geschichten, Wien/München/Zürich (Verlag Fritz Molden) 1969, S. 133.
- 46 Ebd., S. 146.
- 47 ウィーンにおけるクラウスの立場が不安定だったことをうかがわせるエピソードがある。カール・ベームの回想録によると, 彼が1933年にウィーン国立歌劇場に客演した時, 内々に音楽監督就任を打診された。ベームは, クラウスが留守中であるため, 断ったという。Karl Böhm: Ich erinnere mich ganz genau. Autobiographie. Hrsg. von Hans Weigel, München (Deutscher Taschenbuch Verlag) 1976, S. 40.
- 48 Goebbels, a. a. O., Teil I, Bd. 3/1, S. 149.
- 49 Wiener Zeitung, 6. 12. 1934, S. 9.

- 50 Wiener Zeitung, 5. 12. 1934, S. 8.
- 51 Wiener neueste Nachrichten, 6. 12. 1934, S. 2.
- 52 Die Stunde, 6. 12. 1934, S. 1.
- 53 Der Wiener Tag, 6. 12. 1934, S. 3.
- 54 Der Morgen. Wiener Montagblatt, 10. 12. 1934, S. 9.
- 55 この時刻等は、クラウスの『指揮記録』による。
- 56 Böhm, a. a. O., S. 40f.
- 57 シュタインドルフ, 前掲書, 132頁。
- 58 Bundesarchiv (BA). R9361-V-46755. Karl Böhm an Mutzenbecher, 13. 5. 1933.
- 59 BA. R9361-V-46755. Karl Böhm an den Kampfbund für Deutsche Kultur, 2. 10. 1933.
- 60 BA. R 9361-V-46755. Karl Böhm an Wilhelm Rode, 25. 4. 1934.
- 61 Der Wiener Tag, 11. 12. 1934, S. 1.
- 62 Neue Freie Presse, 12. 12. 1934, S. 7.
- 63 Götz Klaus Kende und Signe Scanzoni: Der Prinzipal. Clemens Krauss. Fakten, Vergleiche, Rückschlüsse, Tutzing (Hans Schneider) 1988, S. 179f.
- 64 ÖNB. Musiksammlung. F59 Clemens-Krauss-Archiv 88, Clemens Krauss an die Mitglieder des Wiener Operntheaters, 15. 12. 1934.
- 65 Kende und Scanzoni, a. a. O., S. 180.
- 66 Ebd., S. 194.
- 67 クラウスとベルリン国立歌劇場との不和に関しては、以下の拙稿に詳しい。拙稿「ナチス・ドイツ時代のクレメンス・クラウスとベルリン・フィルハーモニー管弦楽団」（『桜文論叢』第91巻, 2016年）, 412-413頁。ミーシャ・アスターも以下の文献でこの件について論じている。Misha Aster: Staatsoper. Die Bewegte Geschichte der Berliner Lindenoper im 20. Jahrhundert, München (Siedler Verlag) 2017, S. 164-171.
- 68 Der deutsche Rundfunk, 13. Jahrgang (1935), Heft 18, S. 38.
- 69 Schallaufnahmen der Reichs-Rundfunk G.m.b.H.. Von Ende 1929 bis Anfang 1936, Berlin 1936, S. 152. この祝典行事の様子は録音盤16面に収録されたが、現在ではゲッベルスの演説の約1分が残されるのみである。Deutsches Rundfunkarchiv (DRA). K001187650 (Archivnummer: 2753319). Festakt der Reichskulturkammer in der Berliner Staatsoper mit der Verleihung der Nationalpreise für Film und Buch, 1. 5. 1935 (Aufnahmedatum).
- 70 Schallaufnahmen der Reichs-Rundfunk G.m.b.H.. Von Ende 1929 bis Anfang 1936, Berlin 1936, S. 628. このリストによると、この演奏は24枚のディスクに収録された（原盤番号は Bln 25054/76, 当時の放送用ディスクは片面収録である）。内容は、ドイツ語とフランス語の放送開始アナウンスと拍手の後に演奏が行われ、終演後の拍手に続き、ドイツ語のフランス語の放送終了アナウンスがあった。本論でもこの後言及するように、この録音は現存している。ドイツ放送アーカイブから提供された

資料によると、ベルリンの放送局が制作した多数のスタジオ・オペラ番組の全曲録音としては、この《アリアドネ》が現存する最も古いものである。

- 71 Der deutsche Rundfunk, 13. Jahrgang (1935), Heft 24, S. 16 u. 31-37.
- 72 BA. R 78/912. Reichssendeleitung A2 an Dr. Schönicke, Betr. Ariadne auf Naxos von Richard Strauss, 26. 3. 1935. 同文書によると、《アリアドネ》の放送日は4月11日とされている。同文書においてこの日はリヒャルト・シュトラウスの誕生日と説明されていることを踏まえると、正しくは6月11日と考えられる。
- 73 BA. R 78/266. Grothe (RRG Programmverwaltung) an Reichssender Stuttgart Programmverwaltung, 28. 11. 1936.
- 74 BA. R 78/263. Grothe (RRG Programmverwaltung) an Reichssender Stuttgart Programmverwaltung, 30. 10. 1936.
- 75 BA. R 78/261. Grothe (RRG Programmverwaltung) an Reichssender Frankfurt Programmverwaltung, an 28. 10. 1936.
- 76 BA. R 78/282. Grothe (RRG Programmverwaltung) an Reichssender Stuttgart Programmverwaltung, Betr.: Genehmigungsantrag für Clemens Krauss, 5. 2. 1937. この番組には、ウルズレアクも出演しており、その報酬は750ライヒスマルクだった。BA. R 78/282. Grothe (RRG Programmverwaltung) an Reichssender Stuttgart Programmverwaltung, Betr.: Genehmigungsantrag für Viorika Ursuleac, 5. 2. 1937.
- 77 BA. R 78/276. Grothe (RRG Programmverwaltung) an Reichssender München Programmverwaltung, 26. 1. 1937. 同文書によると、このプッチーニの番組に出演したエルナ・ベルガーの報酬は、400ライヒスマルクである。
- 78 BA. R 78/536. Reichssender München Programmverwaltung an RRG-Zentralschallarchiv, 7. 5. 1940. この録音の再放送に関しては、1940年6月のラジオ情報誌『ドイツのラジオ』（Der deutsche Rundfunk）の番組欄に記載は認められなかった。
- 79 Richard Strauss: Ariadne auf Naxos. Gesamtaufnahme der Oper in einem Aufzug, ohne Vorspiel, Clemens Krauss (Dirigent), 11. 6. 1935 (Aufnahmedatum), Acanta 40.21 806 (LP), ©1973.
- 80 Curt Riess: Knaurs Weltgeschichte der Schallplatte, Zürich (Droemersch Verlag) 1966, S. 246 und 284.
- 81 1936年のクラウスのレコーディングデータについては、特記ない場合を除き、以下のデータベースの情報に基づくものとする。Michael Gray: A Classical Discography. <https://classical-discography.org/> (最終閲覧日: 2021年5月26日)。 그레이의 調査結果は、プロデューサーの名前等も含むもので、レコード会社の原データ、ないしそれに準じたソースに基づくものと思われる。なお、 그레이의 데이터は、以下のサイトにも提供され、ディスコグラフィで検索できるようになっている。The AHRC Research Centre for the History and Analysis of Recorded Music. <https://charm.rhul.ac.uk/index.html> (最終閲覧日: 2021年5月26日)。

- 82 モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》からの当該の歌は、6月11日にも録音が行われている。グレイによると、6月6-12日の分はPolydorレーベルでレコード番号62775、6月11日の分は同レーベルのレコード番号62760で発売されたという。マトリックス番号は両者で異なるため、記録の上では別録音ということになるが、Preiserレーベルから発売されたこれらのレコードの復刻CDを聞く限り、内容は同一と思われる。Lebendige Vergangenheit. Erna Berger, Preiser 89035 (CD), © 1990; Heinrich Schlussnus. Arien und Szenen, Preiser 89212 (CD), © o. J. これらの録音は、以下のインターネットサイトのデータベースでも試聴可能である。SLUB Mediathek. <http://mediathek.slub-dresden.de/db/apsisa.dll/ete>（最終閲覧日：2021年5月26日）。
- 83 《ドン・カルロ》の収録日はグレイの情報に記載がないため、以下のドイツ・グラモフォンのCDに添付されている解説書の3頁の情報に基づく。Grandioso! Great Verdi Recordings from Caruso to Pavarotti. Deutsche Grammophon 479 1884 (CD), ©2013.
- 84 Die Musik, 29. Jahrgang (1936), 1. Oktober, S. 78. クラウスの『指揮記録』によると、その後、1938年5月1日にはバイエルン国立歌劇場のインテンダントに任命されたという。
- 85 クラウスが出演した「工場コンサート」の紹介記事では、彼の肩書はベルリン国立歌劇場監督とされている。Der deutsche Rundfunk, 14. Jahrgang (1936), Heft 47, S. 3.
- 86 BA. R 78/270. Grothe (RRG Programmverwaltung) an Reichssender Breslau Programmverwaltung, 7. 1. 1937.
- 87 BA. R 78/257. Reichssendeleitung A2 an alle Reichssender-Sendeleitungen, 23. 10. 1936; Der deutsche Rundfunk, 14. Jahrgang (1936), Heft 44, S. 37-39.
- 88 Der deutsche Rundfunk, 14. Jahrgang (1936), Heft 47, S. 3.
- 89 Bayerische Hauptstaatsarchiv (BayHStA). Staatsoper 1725. Hans von Benda an Clemens Krauss, 5. 11. 1938.
- 90 Muck, a. a. O., Bd. 3, S. 288-292.
- 91 この日に16時までという制約があったのは、この翌日のコンサートのリハーサルがこの時刻から開始することになっていたためである。BayHStA. Staatsoper 1725. Hans von Benda an Clemens Krauss, 5. 11. 1938.
- 92 BayHStA. Staatsoper 1725. Erik Maschat an das Berliner Philharmonische Orchester, 7. 11. 1938.
- 93 BayHStA. Staatsoper 1725. Berliner Philharmonisches Orchester an Clemens Krauss, 12. 11. 1938.
- 94 Schallaufnahmen der Reichs-Rundfunk G.m.b.H.. Von Anfang 1936 bis Anfang 1939, Berlin 1939, S. 168.
- 95 DRA. K000776020 (Archivnummer 2976071). Fünfte Jahrestagung der Reichskulturkammer und der Gemeinschaft „Kraft durch Freude“ im Berliner

Opernhaus, 25. 11. 1938 (Aufnahmedatum).

- 96 クラウスがベルリン国立歌劇場において指揮したのは1936年以来初となったが、1937年9月にはベルリン国立歌劇場のメンバーとともにパリ公演を行っている。その際に演奏したのは、リヒャルト・シュトラウスの《ばらの騎士》(9月6日)と《ナクソス島のアリアドネ》(9月10日)である。このパリ公演の様子は、ラジオで放送された。Radio Wien, 13. Jahrgang (1937), Heft 49, S. 50f.
- 97 この日付は、この翌日に発送された手紙による。BayHStA. Staatsoper 1725. Erik Maschat an das Berliner Philharmonische Orchester, 14. 4. 1939.
- 98 BayHStA. Staatsoper 1725. Clemens Krauss an das Berliner Philharmonische Orchester, 26. 4. 1939.
- 99 BayHStA. Staatsoper 1725. Clemens Krauss an das Berliner Philharmonische Orchester, 22. 4. 1939.
- 100 BayHStA. Staatsoper 1725. Erik Maschat an das Berliner Philharmonische Orchester, 14. 4. 1939.
- 101 Richard Strauss und die Wiener Philharmoniker, Wien (Wiener Philharmoniker) 2019, S. 237.
- 102 この日の演奏曲目は、クラウスからベルリン・フィルに伝えられた。BayHStA. Staatsoper 1725. Clemens Krauss an das Berliner Philharmonische Orchester, 22. 4. 1939.
- 103 Michael H. Kater: Die mißbrauchte Muse. Musiker im Dritten Reich, München (Europa Verlag) 1998, S. 96f.
- 104 フルトヴェングラーが新聞に掲載した記事の内容が、掲載前にゲッベルスに伝わり、ベルリン人事を見越してクラウスとの最初の会合を行った可能性について、考慮する必要はないと思われる。ゲッベルスの日記を読む限り、ゲッベルスが事の重大性を認識し、フルトヴェングラーを呼び出して「圧力を加えなければならない」と思うに至ったのは、新聞に記事が掲載されてから4日後の11月29日だからである。Goebbels, a. a. O., Teil I, Bd. 3/1, S. 146.
- 105 この後、クラウスがこの後ベルリン・フィルと共演する機会は、1939年10月の放送演奏、1941年の定期演奏会、1942年の演奏旅行、1944年の演奏会と放送録音と続く。以上に関しては、拙稿「ナチス・ドイツ時代のクレメンス・クラウスとベルリン・フィルハーモニー管弦楽団」(『桜文論叢』第91巻, 2016年)に詳しい。また、以下の論考においては、1939年10月の放送出演を詳しく検証した。拙稿「ドイツのラジオ放送における音楽番組への第二次世界大戦勃発の影響」(『桜文論叢』第100巻, 2019年), 108-113頁。

La transcription des phonèmes du français en *katakana* :

Le cas des voyelles du français

Camille Lepeltier

1. Introduction

La prononciation du français est un des points les plus difficiles de la langue française en début d'apprentissage. Cette étape de l'étude de la langue paraît insurmontable pour les apprenants lorsqu'ils l'abordent pour la première fois. Nous tenterons dans cette étude, d'analyser dans un premier temps les différences entre les systèmes phonétiques français et japonais, pour comprendre la difficulté rencontrée par les apprenants japonais dans l'apprentissage de la prononciation du français ; puis nous essaieront de créer un pont entre les deux systèmes pourtant si divergents afin d'aider les apprenants dans leur apprentissage.

Pour cela, nous étudierons les cas de transcriptions des mots du français en *katakana*, procédé qui permet aux locuteurs japonais d'intégrer les mots étrangers dans leur propre langue. L'utilisation des *katakana* pour écrire les sons du français pose inévitablement des obstacles dans la retranscription des phonèmes français inexistants dans la langue japonaise et donc dans son système graphémique. Néanmoins, il pourrait permettre dans une moindre mesure, une simplification des phonèmes français perçus comme inaccessibles par les apprenants et ainsi, leur faciliter l'apprentissage de la prononciation de cette langue dans un premier temps.

Dans cette étude, nous nous pencherons uniquement sur le cas des phonèmes vocaliques du français et du japonais, en laissant de côté les phonèmes consonantiques, ainsi que les voyelles nasales qui sont un cas spécial des phonèmes vocaliques français. Les voyelles du français forment à elles seules un cas particulier d'étude, de par leur grand nombre dans le système phonétique de la langue et en raison de l'absence de certaines d'entre elles dans le système phonétique japonais.

Lors de l'apprentissage d'une langue étrangère, la transcription des mots nouveaux de la langue dans le système graphémique de la langue première est une méthode courante pour faciliter l'assimilation de leur prononciation. Dans le cas des apprenants japonais, les mots du français sont retranscrits en *katakana*, le système graphémique japonais utilisé habituellement pour noter les termes empruntés aux langues étrangères.

Nous nous demanderons donc ici dans un premier temps, quelles sont les transcriptions les plus utilisées pour chaque voyelle française dans les mots d'emprunts du français en japonais. L'étude de ces mots étrangers entrés dans la langue, nous permettrait de connaître la transcription classique des phonèmes du français : le passage de la perception du phonème nouveau à la retranscription graphémique dans le système de la deuxième langue.

Ces transcriptions correspondent-elles à la prononciation française de ces phonèmes ? Quels graphèmes sont utilisés lorsque le système est confronté à un phonème nouveau, inexistant dans la langue japonais ? Cela nous amène à nous demander de quelle manière nous pourrions utiliser cette méthode de transcription en *katakana* en classe de FLE. Dans quelle mesure la prononciation japonisée de ces nouveaux phonèmes est-elle compréhensible par des interlocuteurs francophones natifs ? Quelles seraient alors les transcriptions en *katakana* les plus adaptées à la compréhension des phonèmes français par ces interlocuteurs francophones ?

Nous définirons tout d'abord les différences des systèmes phonétiques vocaliques français et japonais, puis nous étudierons les transcriptions les plus utilisées pour retranscrire les mots du français dans le système graphémique japonais des *katakana* et enfin nous nous pencherons sur l'utilisation didactique de ces transcriptions que nous pourrions exploiter en classe de FLE, avec des apprenants japonais.

2. Les systèmes vocaliques

Nous présenterons tout d'abord quelques notions fondamentales qui nous permettent de décrire la structure des voyelles des langues française et japonaise. Nous utilisons ici l'API (Alphabet Phonétique International) afin de retranscrire plus fidèlement les phonèmes des deux langues.

2.1 Le système vocalique français

Le français est une langue qui possède un grand nombre de phonèmes vocaliques : on comptabilise en tout seize voyelles dans son système phonétique (Léon, 1992 : 70). Cependant, nous verrons plus tard que ces seize phonèmes ne sont pas tous discriminés par les francophones natifs de nos jours. Ces seize voyelles françaises sont notés en API comme ceci : [i y u e ε ə ø œ o ɔ a α ã ã̃ õ õ̃]. Dans cette étude, nous ne nous pencherons pas sur les voyelles nasales [ã ã̃ õ õ̃], afin de nous consacrer plus précisément aux douze autres voyelles.

Afin de comprendre les différents procédés qui permettent aux locuteurs de produire ces phonèmes, nous allons nous intéresser au fonctionnement de l'appareil phonatoire qui crée les sons du langage.

Nous pouvons décrire l'articulation des phonèmes vocaliques à l'aide de trois paramètres : l'aperture, le lieu d'articulation et le degré d'arrondissement des lèvres. Le niveau d'aperture équivaut à la distance qui sépare la langue et le palais dans la

cavité buccale. En français, nous pouvons définir quatre degrés différents :

- fermé, comme dans les voyelles [i y u] ;
- mi-fermé, avec les phonèmes [e ø o] ;
- mi-ouvert, qui correspond aux voyelles [ɛ œ ɔ] ;
- ouvert, pour les phonèmes [a ɑ].

Plus la langue s'éloigne du palais, plus le degré d'aperture sera ouvert. Et à l'inverse, lorsque la langue est très proche du palais, celui-ci sera défini comme fermé.

Le second paramètre correspond au lieu d'articulation, qui précise le lieu de l'appareil vocalique où le phonème sera produit. Les voyelles antérieures sont articulées entre le bout avant de la langue et le palais dur, comme les phonèmes [i] et [e], tandis que les voyelles postérieures sont produites à la racine de la langue, par exemple les voyelles [u] et [o], au niveau du palais mou. Les voyelles entre ces deux points sont dites centrales, comme c'est le cas des phonèmes [y] et [ø].

Le troisième critère est le degré d'arrondissement, qui s'appuie sur la forme des lèvres lors de l'articulation de ces phonèmes. Les voyelles arrondies sont prononcées en arrondissant les lèvres, avec une nette protrusion des lèvres en avant, comme les voyelles [y u ø œ o ɔ]. Les voyelles non arrondies ou étirées correspondent, quant à elles, à une ouverture plus réduite des lèvres. C'est le cas des voyelles [i e ɛ a] dont la production nécessite un étirement des lèvres.

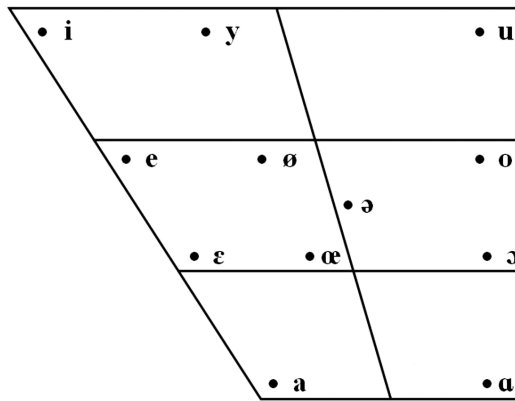


Figure 1 : Le système vocalique français

Ce sont donc les changements de positions des articulateurs tels que la langue et les lèvres qui permettent de produire les différentes voyelles de la langue. (Detey et alii, 2017). Dans la figure 1 ci-dessus, sont représentées les douze voyelles du français classées sur un trapèze vocalique, selon deux des critères décrits précédemment :

- **le degré d'aperture** : les voyelles en haut du trapèze sont les plus fermées, tandis que les voyelles en bas sont les plus ouvertes ;

- **le lieu d'articulation** : les voyelles à gauche du trapèze correspondent aux voyelles antérieures, articulées au niveau de la pointe de la langue, tandis que les voyelles à droite sont postérieures et sont situées à la racine de la langue.

2.2 Le système vocalique japonais

Le système vocalique japonais est un système classique, composé de cinq voyelles existantes en français /i, u, e, o, a/, à une différence près. En effet la voyelle /u/ n'est pas produite comme le [u] français, qui est réalisé en position postérieure fermée, mais est phonétiquement moins arrondie et plus antérieure que le [u] que l'on connaît en français, c'est-à-dire que les lèvres ne s'avancent pas dans le cas de la production de ce phonème, contrairement au [u] classique (Wioland, 1991). Elle est retranscrite par le signe [ɯ] en API (Labrune, 2013 : 183, Shinohara, 1997 : 27).

Les phonèmes japonais [i e o a] sont quant à eux sensiblement identiques aux phonèmes français et l'aperture, le lieu d'articulation et le degré d'arrondissement des lèvres utilisées dans la production de ces dernières sont approximativement les mêmes. Ces voyelles-ci ne devraient donc pas poser de problème dans l'apprentissage de la prononciation du français.

Le système phonétique japonais est donc constitué des cinq phonèmes vocaliques suivants : [a i u e o]. Comparé au système phonétique français, nous pouvons observer que ce nombre est extrêmement bas.

2.3 Comparaison des deux systèmes

Le français et le japonais ont donc certaines voyelles en commun dans leur système phonétique, plus exactement les quatre voyelles suivantes : [i e o a].

Dans la figure 2 ci-dessous, nous pouvons observer que ces quatre voyelles précédemment évoquées sont sensiblement aux mêmes positions sur les critères d'aperture et d'articulation en français et en japonais. Cependant, nous pouvons facilement remarquer la grande différence entre ces deux systèmes vocaliques. En effet, le système français comprend un grand nombre de phonèmes totalement inexistants en japonais.

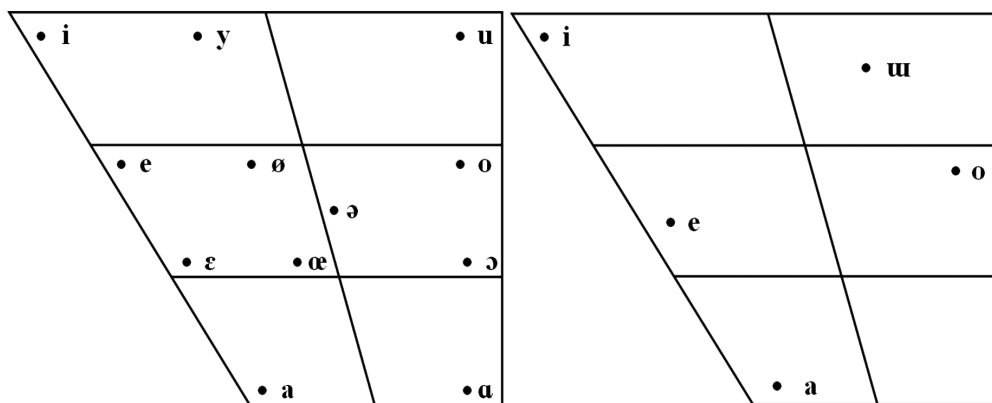


Figure 2 : Comparaison des systèmes vocaliques français (à gauche) et japonais (à droite)

De par la simplicité du système japonais, un locuteur français n'aura qu'assez peu de difficultés à prononcer les voyelles du japonais, à l'exception du phonème [ɯ], étranger au système phonétique français. Cependant, à l'inverse, le nombre conséquent de voyelles dans le système vocalique français est contraignant pour un apprenant japonais.

Certains phonèmes comme le [y] n'ont pas d'équivalent en japonais sur le trapèze vocalique, de même que les voyelles centrales [ø œ ə] qui sont parfaitement inconnues au système japonais. Il n'existe pas non plus de discrimination entre les phonèmes [e] et [ɛ] en japonais, tout comme les phonèmes [o] et [ɔ] ; [a] et [ɑ] (Vance, 2008 : 5-54, Akamatsu, 2002 : 29-31).

La prononciation du français est donc une étape difficile de l'apprentissage de la langue pour les apprenants japonais. Les humains perçoivent les langues étrangères à travers un crible phonologique en assimilant les segments inconnus avec le système phonémique de leur langue maternelle (Best, 1995 : 194) et l'apprentissage de la prononciation du français demande l'assimilation de plusieurs phonèmes jusqu'alors inconnus pour les japonophones.

3. La transcription des phonèmes vocaliques français en japonais

Lors de l'apprentissage d'une langue possédant un système graphique différent de celui des apprenants, il est courant d'observer chez les élèves, une retranscription automatique des nouveaux mots de la langue dans leur propre système d'écriture.

Les apprenants japonais utilisent les *katakana* pour retranscrire les mots français, afin de noter la prononciation de ces mots nouveaux, en créant ainsi un lien avec le système phonétique de leur langue (Detey, 2005 : 240). Nous allons tout d'abord définir ce système graphique japonais utilisé par les apprenants : les *katakana*.

3.1 Un point sur les *katakana*

Le japonais est une langue qui utilise un système d'écriture complexe, basé sur l'emploi de quatre types de caractères combinés (Labrune, 2013 : 180). Ces quatre formes graphémiques sont :

- les caractères chinois, appelés *kanji* (漢字) ;
- les *hiragana* (ひらがな) et les *katakana* (カタカナ), deux alphabets syllabiques composés de 46 signes chacun ;
- et l'alphabet latin, appelé *rōmaji* (ローマ字) en japonais.

Nous ne nous intéresserons ici qu'au système des *katakana* : c'est le mode d'écriture qui permet, entre autres, de retranscrire les mots emprunts de langues étrangères (Taylor, Taylor, 1995 : 130). Ce système graphémique est un syllabaire composé de 46 signes, permettant de retranscrire les différents phonèmes de la langue. Ce dernier est agrémenté de signes diacritiques et de combinaisons de signes et atteint alors jusqu'à plus de 100 caractères simples ou composés (Labrune, 2013 : 181).

Le système syllabique japonais permet de retranscrire l'intégralité des phonèmes existants dans la langue japonaise. Ce système graphémique est, à l'exception de trois symboles, parfaitement transparent avec son système phonétique oral (Kess, Miyamoto, 1999 : 89).

A l'inverse, la graphie des mots du français est un cas complexe. En effet, le système orthographique français reflète imparfaitement la prononciation de sa langue (Detey et alii, 2017). Par exemple, le phonème vocalique [o] possède un grand nombre de graphies différentes comme les graphies « o », « ô », « au », « eau ».

L'écriture du français est donc un élément complexe de l'apprentissage de cette langue, tout particulièrement pour des apprenants dont la langue orale et écrite est pratiquement identique. En français, une lettre peut correspondre à plusieurs sons, tandis qu'un phonème peut s'écrire de différentes façons en fonction de l'orthographe d'un mot, ce qui n'est pas le cas en *katakana*.

3.2 Les graphèmes japonais utilisés dans la transcription des phonèmes français

Nous avons besoin de comprendre comment les phonèmes du français sont transcrits habituellement lors d'un passage vers le système graphémique japonais. Pour cela, nous allons observer quelles sont les transcriptions les plus généralement utilisées dans les cas de mots d'emprunts français, entrés dans la langue japonaise courante.

De nos jours, nous comptons environ 10% du vocabulaire japonais constitué d'emprunts étrangers. Ces mots d'emprunt sont pour une majorité des termes provenant de l'anglais, puis d'autres langues européennes comme le français, le portugais, le néerlandais ou l'allemand (Taylor, Taylor, 1995 : 314).

Pour illustrer cette étude, nous utiliserons un petit corpus constitué d'une liste de mots utilisés en japonais, qui proviennent originellement du français. Ces mots d'emprunts sont passés par un phénomène de transcription en *katakana*, afin de pouvoir entrer dans la langue japonaise et la prononciation s'est donc adaptée au système phonétique japonais.

Dans le tableau ci-dessous, nous pouvons lire tout d'abord le mot original français avec sa prononciation notée en API, puis sa transcription en *katakana*, suivie de celle en *rōmaji*.

Mots d'emprunt français	Prononciation en API	Transcription en <i>katakana</i>	Transcription en <i>rōmaji</i>
Atelier	[atəlie]	アトリエ	atorie
Béret	[berɛ]	ベレー	berē
Buffet	[byfɛ]	ビュッフエ	byuffe
Café au lait	[kafeolɛ]	カフェオレ	kafeore
Camouflage	[kamufɥaz]	カムフラージュ	kamufurāju
Concours	[kõkur]	コンクール	konkūru
Coup d'État	[kudeta]	クーデター	kūdetā
Encore	[ãkõR]	アンコール	ankōru

Enquête	[ãkɛt]	アンケート	ankēto
Fondue	[fõdy]	フォンデュ	fõndyu
Gourmet	[gurme]	グルメ	gurume
Haute couture	[otkutyr]	オートクチュール	ōtokuchūru
Hors d'œuvre	[ɔrdœvr]	オードブル	ōdoburu
Mannequin	[mankẽ]	マヌカン	manukan
Mayonnaise	[majõnez]	マヨネーズ	mayonēzu
Omelette	[ɔmlet]	オムレツ	omuretsu
Potage	[potaz]	ポタージュ	potāju
Pot-au-feu	[potofø]	ポトフ	potofu
Rendez-vous	[rãdevu]	ランデブー	randebū
Restaurant	[rɛstorã]	レストラン	resutoran
Romance	[romãs]	ロマンス	romansu
Rouge	[ruʒ]	ルージュ	rūju
Sommelier	[sɔmɛlie]	ソムリエ	somurie
Soufflé	[sufle]	スフレ	sufure
Truffe	[tryf]	トリュフ	toryufu

Dans cette liste de mots, nous pouvons observer que les huit occurrences du phonème [a] sont transcrites avec le graphème 「ア」 /a/, ainsi que les deux occurrences de la voyelle [i] sont retranscrites par le *katakana* 「イ」 /i/. Ces deux phonèmes ne posent aucune difficulté pour les japonophones, car ils sont identiques aux phonèmes japonais [a] et [i].

Les deux phonèmes [o] et [ɔ] sont discriminés dans la langue française, mais ce n'est pas le cas en japonais : les sept occurrences du [o] fermé, ainsi que les cinq occurrences du [ɔ] ouvert, sont transcrites par l'unique graphème 「オ」 /o/, correspondant au phonème [o] en japonais. Il en va de même pour les phonèmes [e] et [ɛ] qui sont transcrites par le *katakana* 「エ」 /e/ dans les sept occurrences de la voyelle [e] et les sept occurrences de [ɛ].

Les voyelles [ə ø œ u y] n'ont pas d'équivalent dans le système japonais et sont positionnées dans le trapèze vocalique autour du phonème /u/. Dans notre corpus de mots, nous pouvons observer que les trois occurrences des phonèmes [ə] et [ø] sont

effectivement transcrites avec le *katakana* 「ウ」 /u/.

C'est également le cas pour la voyelle [u] transcrite quatre fois avec ce même graphème 「ウ」 /u/, mais aussi quatre fois par le phonème allongé 「ウー」 /ū/. Le système phonétique japonais distingue les voyelles brèves des voyelles longues (Nishi et alii, 2008 : 576-588). Nous pouvons observer que ce graphème est suivi d'un allongement seulement lorsque le phonème [u] se trouve en position de dernière syllabe du mot.

En revanche, la voyelle [œ] n'est représentée qu'une seule fois dans ce corpus dans le mot « hors-d'œuvre » et est retranscrite 「オーダブル」 /ōdoburu/ en *katakana*, en utilisant donc le phonème 「オ」 /o/.

Pour finir, le phonème [y] est un cas différent de ces quatre précédentes voyelles, car il est constamment transcrit dans les mots du corpus par le *katakana* 「ユ」 /ju/.

3.3 Une simplification du système vocalique français

On observe donc une simplification du système vocalique français avec plusieurs phonèmes différents regroupés sous le même graphème japonais.

Nous avons pu observer dans ce corpus que les douze voyelles étudiées ici étaient simplifiées en seulement sept *katakana* différents : 「ア・イ・エ・オ・ウ・ウー・ユ」 /a, i, e, o, u, ū, ju/. Les phonèmes [e] et [ɛ] ; [o] et [ɔ], ainsi que les voyelles [a] et [ɑ] seraient donc perçues et produites comme un seul et même phonème. Tandis que les phonèmes [ə ø œ u y] ne connaîtraient pas de réelle distinction, à part pour la voyelle [y].

Cette fusion en un seul *katakana* serait-elle une méthode bénéfique pour l'assimilation de l'apprenant ou serait-elle, au contraire, nuisible à la production orale en français et, plus largement, à la compréhension de cette production possiblement altérée de l'apprenant par les francophones ?

4. La discrimination des voyelles du français

La distinction entre les voyelles du système phonétique français est un point important dans la maîtrise de la langue. En effet, s'il existe deux phonèmes proches, mais pourtant différenciés dans le système vocalique, telle la discrimination des phonèmes [e] et [ɛ], c'est pour une raison phonologique.

4.1 Les oppositions phonologiques

La phonologie s'intéresse aux phonèmes porteurs de sens et aux oppositions phonémiques. Ce sont ces oppositions entre les sons qui permettent la communication dans toutes les langues articulées (Vaissière, 2015 : 19, Baylon, Fabre, 1975 : 83-85).

Lorsque deux termes ne sont différenciables que par deux phonèmes en opposition, on considère que ces phonèmes constituent des paires minimales. Une paire minimale est donc définie par deux mots d'une langue ayant un sens différent et qui ne diffèrent l'un de l'autre que par un seul phonème. La discrimination de ces phonèmes est alors primordiale dans la compréhension de ces mots. En français, il existe un grand nombre de paires minimales, incluant les phonèmes suivants :

[a] – [ɑ]	→	patte – pâte
[o] – [ɔ]	→	paume – pomme, nôtre – notre
[e] – [ɛ]	→	les – lait, été – était, j'aurai – j'aurais
[u] – [y]	→	nous – nu, égout – aigu, boule – bulle
[ø] – [œ]	→	jeûne – jeune, meuble (adj) – meuble (nom)
[ø] – [u]	→	peu – pou, deux – doux
[œ] – [u]	→	cœur – cour, humeur – humour, auteur – autour
[ø] – [y]	→	peu – pu, deux – du
[œ] – [y]	→	peur – pur, piqueur – piqûre

Ces paires minimales listées ci-dessus, nous prouvent que ces phonèmes sont bel et bien distingués les uns des autres pour des raisons phonologiques de compréhension de la langue. La discrimination de chaque phonème nouveau serait donc obligatoire et même une étape nécessaire dans l'apprentissage pour se faire comprendre des francophones.

Le travail phonétique et phonologique sur les paires minimales est pertinent en classe de FLE : les apprenants doivent apprendre à différencier ces phonèmes, aussi bien à la perception qu'à la production.

Pourtant, si l'on suit ce raisonnement, les productions orales de certains francophones pourraient alors ne pas être comprises par leurs interlocuteurs également francophones. Il existe en effet des cas où ces oppositions, supposées indispensables, ne sont toutefois pas réalisées. C'est ce que nous pouvons observer dans certains cas de variations régionales de la langue.

4.2 Le cas des variations régionales du français

Dans certaines régions de France ou dans certains pays francophones, les phonèmes ne sont pas discriminés comme le voudrait la norme.

La discrimination entre les phonèmes [e] et [ɛ] est considérée comme importante, car elle permet de différencier un imparfait d'un participe passé (Sauzedde, 2015 : 99), mais cette discrimination est malgré tout inexistante dans certains cas de variations régionales du français. Toutefois, cette absence de discrimination ne nuit pas à l'intercompréhension entre locuteurs de deux variations du français, l'un produisant cette distinction [e – ɛ], l'autre non.

Le mot « béret », supposé être prononcé [berɛ] est produit dans certaines variations [bere], de même que le verbe « avoir » conjugué au futur « j'aurai » [ʒore] et le verbe « avoir » conjugué au conditionnel « j'aurais » [ʒorɛ] sont prononcés tout deux [ʒore].

Le cas des phonèmes [o – ɔ], ainsi que des phonèmes [ø – œ] sont également touchés par cet effacement de discrimination à la production dans certaines variations régionales. Les paires minimales « pomme » [pɔm] et « paume » [pom] sont prononcés avec un « o ouvert » [pɔm] sans aucune distinction phonologique entre ces deux mots.

La règle selon laquelle les phonèmes /E/, /œ/ et /O/ sont ouverts si la syllabe est fermée [ɛ, œ, ɔ] et fermés si la syllabe est ouverte [e, ø, o] n'est donc pas effective dans certains cas de figure des variations.

De plus, l'opposition entre certaines voyelles s'efface également parfois avec l'évolution de la langue. La majorité des locuteurs français ne discrimine plus certains phonèmes de la langue et cela ne gêne en rien à la communication.

Par exemple, la distinction entre les phonèmes [a] et [ɑ] est pratiquement complètement effacée dans les productions de nombreux natifs de nos jours. Pour donner un exemple, la distinction entre les paires minimales « patte » [pat] et « pâte » [pat] n'est plus que très rarement marquée chez les locuteurs français.

L'absence de discrimination des phonèmes [a – ɑ], [e – ɛ], [o – ɔ] et [ø – œ – ə] ne serait donc pas un frein à la compréhension de la langue et à la production orale du français.

Mais alors, quel positionnement devrait-on prendre dans l'enseignement de ces phonèmes en classe de FLE avec des apprenants japonais ? Peut-on simplifier dans un premier temps les phonèmes du français pour faciliter l'apprentissage aux nouveaux apprenants ?

5. L'utilisation de ces transcriptions simplifiées en classe de FLE

Nous avons relevé les différentes transcriptions habituellement utilisées lors de l'appropriation des mots de français dans la langue japonais. Ces transcriptions

permettent aux japonophones d'intégrer ces mots français dans leur langue, correspondant ainsi aux phonèmes du japonais. Toutefois, ce procédé est-il exploitable en cours de FLE ? Peut-on suivre les mots simplifications ou bien d'autres transcriptions seraient-elles préférables ?

5.1 Les regroupements de phonèmes réalisables

Il nous semble possible de pouvoir regrouper les phonèmes [e – ε], [o – ɔ] et [ə – ø – œ] sous un même graphème, respectivement les *katakana* 「エ」 /e/, 「オ」 /o/ et 「ウ」 /u/ (correspondant au phonème japonais [u]). En effet, les paires minimales opposant ces phonèmes précédents entre eux ne sont pas pertinentes lorsque l'on sait que ces voyelles ne sont pas toujours discriminées dans certains cas de variations régionales.

Il en va de même pour la paire [a – ɑ] qui n'est pratiquement plus discriminée en France de nos jours. Ces deux phonèmes peuvent donc être simplifiée par la transcription en *katakana* 「ア」 /a/.

En japonais, le phonème [e] est réalisé entre le [e] antérieur français mi-fermé et le [ε] antérieur mi-ouvert, et il en va de même pour la voyelle [o] qui se produit entre le [o] postérieur mi-fermé et le [ɔ] postérieur mi-ouvert français. Ces deux phonèmes japonais se situent donc entre les deux phonèmes distincts existants en français. Il paraît donc logique que ces phonèmes soient naturellement rapprochés vers un seul et même phonème en japonais.

Il est tout de même nécessaire de présenter les différences existantes en français entre les deux voyelles : dans chacune de ces paires, l'une est plus ouverte et l'autre plus fermée. Même si la différenciation n'est pas encore réalisable à la production de ces voyelles, il est primordial de former l'oreille des nouveaux apprenants aux nouveaux phonèmes du français. L'apprenant pourra alors acquérir petit à petit une bonne perception auditive de ces phonèmes, tout en étant capable de prononcer dans une certaine mesure les mots à la prononciation complexes du français, par le biais de

cette clarification.

La simplification en *katakana* n'a pas pour vocation de remplacer les phonèmes du français, mais d'éclaircir le sujet en passant outre les difficultés premières. Ce ne serait donc qu'une aide pour les apprenants débutants dans leur première approche de la question complexe qu'est la prononciation française.

Dans la figure 3 ci-dessous, nous avons rassemblé les phonèmes pouvant être simplifiés sous un même caractère. Nous observons donc que si l'on suit ce procédé, neuf des douze voyelles du français se retrouvent alors regroupées en quatre blocs différents.

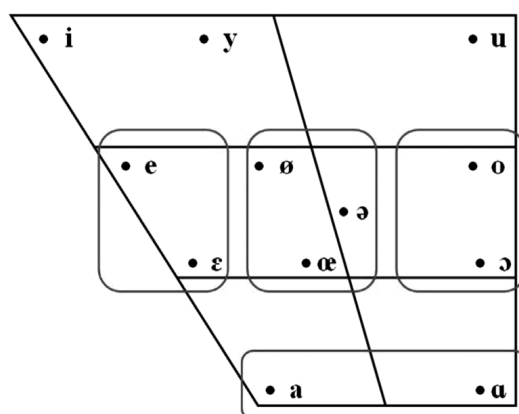


Figure 3 : Les simplifications possibles des phonèmes vocaliques français.

5.2 Les discriminations nécessaires à la compréhension

Certains phonèmes peuvent être simplifiés en un seul, mais ce n'est pas le cas de tous. Comme présenté sur le trapèze vocalique de la figure 3 ci-dessus, les voyelles [i], [y] et [u] ne peuvent être rapprochées d'un autre phonème et doivent être différenciées des autres voyelles du trapèze. En effet, la bonne production de ces phonèmes est nécessaire à la compréhension.

La voyelle [i] ne pose aucun problème ici, car elle a un équivalent similaire en

japonais : elle est donc facilement perçue et produite par les locuteurs japonais dans un contexte de production orale en français.

La voyelle [y] est quant à elle facilement différenciable des autres : elle se distingue des phonèmes [ə ø œ u] par le fait qu'elle peut être notée par un graphème différent des autres voyelles [ə ø œ u] notées 「ウ」 /u/. Nous avons pu observer précédemment que le phonème [y] était constamment transcrit dans nos mots du corpus par le *katakana* 「ユ」 /ju/. En effet, le phonème [y] étant positionné entre les voyelles [i] et [u] sur le trapèze vocalique français, passer par le phonème [i] ou [j] pour acquérir cette voyelle nouvelle est une méthode efficace, utilisée dans les méthodes de prononciation française. Retranscrire la voyelle [y] par le graphème 「ユ」 /ju/ est par conséquent un bon moyen pour assimiler ce nouveau phonème.

Cependant, la voyelle [u] doit être différenciée des trois phonèmes regroupés [ə ø œ], car cette distinction est indispensable en français. La paire minimale « deux heures » [døzœR] - « douze heures » [duzœR] est un bon exemple de l'importance de cette distinction. L'unique différence entre ces deux expressions est l'utilisation des phonèmes [ø] et [u].

Dans notre corpus, le phonème [u] transcrit de deux manières : le *katakana* 「ウ」 /u/ ou bien le phonème allongé 「ウー」 /ū/. Nous pourrions utiliser ce deuxième graphème afin de créer une distinction entre les phonèmes [ə ø œ u]. Nous avons vu au dessus que les voyelles [ə ø œ] étaient habituellement transcrites 「ウ」 /u/ et il serait donc possible de marquer une différence en utilisant le /ū/ allongé pour retranscrire le phonème [u].

Ce procédé permettrait d'attirer l'attention des apprenants sur l'accentuation de cette voyelle dans le mot. En effet, un des problèmes de prononciation qui apparaît souvent dans les productions des apprenants japonais est la non accentuation de cette voyelle [u].

En japonais, les voyelles [u] et [i] deviennent sourdes lorsqu'elles se trouvent

entre deux consonnes sourdes ou en position finale non accentuée (Labrune, 2013 : 184) et cette application inscrite dans la prononciation du japonais se retrouve également parfois dans les productions orales des apprenants en français. Cela peut altérer drastiquement la prononciation de mots français, en particulier dans les cas de mots finissant par le phonème [u]. Par exemple, des mots français tels que « beaucoup » [boku], retranscrit 「ボク」 / boku/ en *katakana*, sont parfois prononcés en éludant la voyelle finale. Ici, « beaucoup » devient [bokuu] en japonais et est alors prononcé [bok] par les apprenants japonais.

La solution pour remédier à ce problème serait donc de marquer la transcription en *katakana* du mot par un allongement, le système phonétique japonais distinguant les voyelles brèves des voyelles longues. Cette opposition n'existe pas en français, mais permet en japonais d'accentuer le phonème vocalique précédant cet allongement. La voyelle sera alors accentuée et prononcée lors des productions orales.

En reprenant notre exemple cité précédemment, le terme « beaucoup » devrait donc se transcrire 「ボクー」 / bokū/ avec un allongement sur la voyelle, pour indiquer que ce [u] final doit être accentué en français.

Ainsi le phonème français [u] pourrait être retranscrit par un [u] allongé, 「ウー」 /ū/, ce qui permettrait alors de le différencier des phonèmes mi-fermés et mi-ouverts [ə ø œ] qui sont également retranscrits par le graphème 「ウ」 /u/.

5.3 Une simplification du système vocalique bénéfique ?

Les *katakana* ne peuvent pas représenter tous les phonèmes vocaliques de la langue française. Le faible nombre de voyelles en japonais ne peut pas reproduire parfaitement l'articulation des douze voyelles du français. Il n'existe donc aucune correspondance exacte entre les phonèmes vocaliques du français et les graphèmes du japonais, en dehors des voyelles [a], [i], [e] et [o] qui ont leurs équivalents dans le système japonais.

Néanmoins, en passant par cette simplification des phonèmes, cela réduirait les difficultés dans l'apprentissage premier de l'apprenant et il pourra par la suite, à force d'écoute du français, entendre, percevoir et identifier les différences entre deux phonèmes réunis sous un seul *katakana*. Les apprenants auront déjà pu se souvenir de la prononciation du mot dans un premier temps, avant de pouvoir affiner par la suite sa production orale dans la langue.

Pour résumer cette étude, les phonèmes vocaliques français pourraient donc être transcrits dans le cadre d'un cours de FLE avec des apprenants japonais, avec les différents graphèmes japonais suivants :

- [a α] peuvent être transcrits avec le *katakana* 「ア」 /a/ ;
- [o ɔ] peuvent être transcrits avec le *katakana* 「オ」 /o/ ;
- [e ε] peuvent être transcrits avec le *katakana* 「エ」 /e/ ;
- [ə ø œ] peuvent être transcrits avec le *katakana* 「ウ」 /u/ ;
- [u] peut être transcrit avec le *katakana* allongé 「ウー」 /ū/ ;
- [y] peut être transcrit avec le *katakana* 「ユ」 /ju/ ;
- [i] peut être transcrit avec le *katakana* 「イ」 /i/.

Représentons ces simplifications en un schéma récapitulatif du système vocalique français (figure 4) : cela revient à rassembler sous un même graphème les phonèmes suivants, tandis que les voyelles [i y u] sont, comme nous le voyons ci-dessous, bien distinguées des autres.

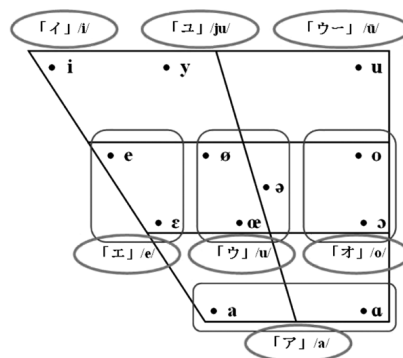


Figure 4 : Le trapèze vocalique français et ses correspondances en katakana

6. Conclusion

Tout au long de cet article, nous avons décrit les différences notables entre les systèmes phonétiques vocaliques français et japonais, en soulignant leurs similitudes et leurs différences. Puis nous nous sommes penchés sur les méthodes de transcriptions classiques en japonais des mots d'emprunts en provenance de la langue française et nous avons cherché à exploiter ces simplifications afin de clarifier la prononciation complexe du français pour les apprenants japonais.

Plusieurs phonèmes du français, comme les paires [a – ɑ], [e – ε], [ə – ø – œ] et [o – ɔ], ne sont pas discriminés dans certaines variations régionales de France et du monde francophone. L'absence de discrimination à l'apprentissage ne poserait donc potentiellement pas de problème quant à la compréhension d'un interlocuteur francophone sur la production de l'apprenant.

Cependant, nous sommes en droit de nous demander si cette simplification serait réellement bénéfique aux apprenants. L'objectif premier de l'apprentissage d'une langue étrangère est de pouvoir communiquer et se faire comprendre par son interlocuteur dans cette langue. Cette prononciation simplifiée des voyelles reste-elle compréhensible par un francophone natif ? Il serait intéressant d'expérimenter ce point en faisant des enregistrements des productions d'apprenants et en les faisant écouter par la suite à des natifs francophones, pour obtenir ainsi des résultats concrets.

Toutefois, comme nous l'avons évoqué dans cette étude, cette simplification est seulement proposée en tant que procédé méthodologique afin d'aider l'apprenant à appréhender facilement le sujet de la prononciation du français. Cette dernière est un sujet complexe mais essentiel dans les cours de FLE : la communication passe par une bonne maîtrise de la prononciation de la langue.

De plus, l'utilisation des *katakana* dans l'apprentissage des langues étrangères est une question parfois controversée chez les professeurs de langue. Nous espérons que cette étude pourra apporter des pistes de réflexion dans le cadre de l'enseignement de

la prononciation du français, mais également pour l'enseignement d'autres langues étrangères, dans les classes d'apprenants japonophones.

L'objectif de cet enseignement simplifié de la prononciation n'est pas de déboucher sur une japonisation de la langue française, mais plutôt de schématiser en simplifiant les difficultés premières des phonèmes nouveaux dans un premier temps et de mener plus tard vers une maîtrise plus poussée de la prononciation française.

Bibliographie :

- AKAMATSU, N. (2002). *A similarity in word-recognition procedure among L2 readers with different L1 backgrounds*, Applied Psycholinguistics, Vol. 23.
- BAYLON, C., FABRE, P. (1975). *Initiation à la linguistique*, Paris, Nathan université.
- BEST, C. T. (1995). « A Direct Realist View of Cross-Language Speech Perception », in W. Strange, *Speech perception and linguistic experience: Issues in cross-language research*, Baltimore, York Press, pp. 171-204.
- DETEY, S. (2005). *Interphonologie et représentations orthographiques. Du rôle de l'écrit dans l'enseignement / apprentissage du français oral chez des étudiants japonais*, Linguistique. Université Toulouse le Mirail - Toulouse II.
- DETEY, S., RACINE, I., KAWAGUCHI, Y., EYCHENNE, J. (2017). *La prononciation du français dans le monde : du natif à l'apprenant*, CLE International.
- KESS, J. F. et MIYAMOTO, T. (1999). *The Japanese Mental Lexicon : psycholinguistic studies of kana and kanji processing*, Amsterdam, John Benjamins.
- LABRUNE, L. (2013). « Le japonais », *Lalies, langues et littérature*, 33, pp.171-219.
- LEON, P. (1992). *Phonétisme et prononciation du français*, Paris, Nathan.
- NISHI, K., STRANGE, W., AKAHANE-YAMADA, R., KUBO, S. A. (2008). « Acoustic and perceptual similarity of Japanese and American English vowels », *The Journal of the Acoustical Society of America* 124(1), Trent Brown, 576-588.
- SAUZEDDE, B. (2015). *Difficulté des phonèmes vocaliques du français auprès des étudiants japonais*, Université Ritsumeikan.
- SHINOHARA, S. (1997). *Analyse phonologique de l'adaptation japonaise de mots étrangers*. Thèse de Doctorat, Université de la Sorbonne Nouvelle Paris-III.
- TAYLOR, I. et TAYLOR, M. M. (1995). *Writing and literacy in Chinese, Korean and Japanese*, Amsterdam John Benjamins.
- VAISSIERE, J. (2015). *La phonétique*. Paris cedex 14, France : Presses Universitaires de France.
- VANCE, T. J. (2008). *The sounds of Japanese*. Cambridge, Cambridge University Press.
- WIOLAND, F. (1991). *Prononcer les mots du français : des sons et des rythmes*, Paris, Hachette.

証人の笑い

—— 沖縄移民をめぐる民族誌的考察 ——

前 嵩 西 一 馬

わたしたちは言語のなかに、わたしたちの生命をもって生きている何かを感じている。もしこの言語の生命が完全無欠であり、そのうちになんら凝固したものがなく、なおまたそれが個々独立した有機体に分割できず、ひとつに統一された有機体であるならば、それは静かな水面のように調和よく渾然とひとつに溶けている生命を持った精神と同様に、決して滑稽に陥ることはないだろう。しかし、水面に落ち葉を浮かべていない池はないのである。

—— ベルクソン『笑い』¹

はじめに ひとつの問い

人は生を説明しようとする。文化人類学者は民族誌とフィールドワークという方法論を用いて、文化の側面からそれを説明しようとする。しかし生は生を説明しようとする思想や言語と本質的に違う展開をするわけで、また、社会には社会特有の展開の仕方（社会的言説のうねり）がある。私の記述にもし、通常の論文然としたテキストのなかに出てこない類の表現や言い回しがあるとなれば、それは上述のベルクソンの言う「水面に浮かぶ落ち葉」を、そしてその「落ち葉が浮かんでいる池」を描こうとしていることにほかならない。文化の語りにおける豊かさが「分厚い記述」によって裏書きされるのではなく、文化そのものの分厚さを突破するために豊かな語りが必要とされる。ある経験を理解するとき、その意味に逃げ込むのではなく、時にその経験そのものを共有、通

過、あるいは拒絶でもいい、そのまま存在として差し出すような「語り」を（あるひとつのテーゼに寄り添いつつ）本稿では実践してみたい。

その「社会特有の展開の仕方」には社会的想像力が備わっていて、そこには「言説という罫」²（public enemy as public interest）が潜む。たとえば日本のナショナル・イマジナリーにおける「北朝鮮」、あるいは連日ワイドショーをにぎわす「私人」としての被告人たち、そして在沖米軍基地問題…。来るべき「他者理解」のため、この「狂態」を転覆させるためのアクロバティックで切実な軌道を描くミサイルは、70年代沖縄から飛来する。当時ブラジルから帰「国」した沖縄移民の三家族が密輸する「信念」は、沖縄復帰50年という「節目」を控えた現在を正確に誤射する。ブラジル移民社会における「勝ち組」³の言説が、沖縄を經由して現在にどう「誤射」されるのか、「他者理解の（不）可能性」という枠組みを通して、本稿は「語り」とそれに付随する（あるいはそれを転覆することすら可能となる）笑いについて考察する。

具体的には沖縄の移民史において現在なお言語化を拒む、ある「勝ち組」の「笑い」を民族誌的事例として扱う。ひとりの男がにやにや笑っている。その「笑い」は一体何なのか。本稿はその唯一の問いに答えるために書かれた民族誌的記述である。しかしここでは笑いというものを確固たる文化素として結晶化させない方法を取る。国民国家の「時間」に還元されるだけの因果律に収まるような便利な挿話をすきあらば探そうとする勤勉な歴史家の目には「移り気」に見えるような、そして私達自身を宙づりにするような、笑いの考察はいかにして遂行できるのか。物事はそれ自体において滑稽なのではなく、ある特別な機能、つまりできごとや行為を枠に入れるという機能を果たすがゆえに滑稽となる⁴。その枠組み（framing）という構造⁵自体をも書き込み得る叙述は果たして可能なのだろうか。つまり、笑うこととその笑いを説明することの差を明確に分節化するのではなく、その間に潜む僅かなもの—文化的機微とでも名づけうるもの—をよすがに、共同体における戦略的本質主義をめぐる機知⁶に寄り添いつつ「笑い」を考察してみたい。

たとえば沖縄の近現代史において、日本語という言語は「ふつうの言葉」と

して君臨してきた。「普通に話せ」という台詞を沖縄の近現代史の文脈を愚直に鑑みて英語に翻訳すれば、Talk Japanese（日本語で話せ）となる。この、日本語で話せという恫喝の声と、「ふつうに」という日本語が意味するものの中に横たわるスペースこそが、私とその機知を携えつつ実践する民族誌の舞台となる。

1. 覚書をなぞる

本章では、今から約43年前に書かれた沖縄の「文化の語り」において重要なテキストのひとつである、「勝ち組レポート」と呼ばれる新川明のテキスト⁷を扱う。やや長くなるが、ここでは幾つもの引用を含むレポート本文から中略を交えつつ紹介し⁸、その複雑な背景を共有する。そしてテキストに現れる特異な「笑い」に改めて着目し、そのシニフィエ（示されるもの）を民族誌的に追跡することそのものを記述してみたい。

1973年11月17日、日本の勝利を信じて疑わない“ブラジル勝ち組”の3家族14人が帰ってきた。その夜、東京・羽田空港に着いた飛行機のタラップを下りる一行は、一斉に「天皇陛下バンザイ」を三唱、つめかけた報道陣のフラッシュを浴びながら、「神州不滅」の信念をあらためて確認して出迎えの人々を驚かした。

「勝ち組悲し半世紀——ブラジルから“勝ち組”三家族帰国——羽田でバンザイ」（読売新聞）

翌18日の新聞には、その異様な帰国風景を伝える大見出しが踊っていた。そして郷里へ帰るまでのあわただしい時間を割いて、この人たちは皇居と靖国神社を参拝、地面にヒレ伏して感泣した。

「“日本は勝った”——最後の“勝ち組”Hさんら帰国——“陛下に会いたい”」（琉球新報）。

「“陛下の命令”で帰国——祖国の勝利を信じつつ——ブラジルから“勝ち

組”の三家族が帰る」(沖縄タイムス)

こうして、その帰郷を伝える新聞やテレビ・ニュースを見た人たちは、ほとんど好奇と憐れみの思いでこの人たちを眺め、これからすごす“敗戦”後の現実世界に、どのように適応してゆくのかを思いやったものである。

帰郷すると追いかけるように、あるテレビ局の追跡ドキュメントで、沖縄でひとまず落ち着き先を見つけたこの人たちのありようが放映された。そこには、依然として何の迷いもためらいもない姿が映しだされていたが、あれから一年余の時間がすぎたいま、果たしてこの人たちはどのようにみずからの信念と現実とのズレを埋め合わせたか。その後、マスコミもほとんど触れることなく、人びとの話題から消えていったこの人たちの“その後”については、少なからず気になることであった。

当時13歳の少年から80歳をこえる老齡者まで、各世代をふくむ14人の人たちが、1年余の年月のなかでどのように変わったのか、変わらなかったのか。私は複雑な思いを抱いて3家族が住む金武、宜野座、久志の村々を訪ねた。

×

私は最初、この稿を「ブラジル勝ち組にみる天皇制思想の形成と持続」と題して書くつもりでいた…(中略)…しかし、実際にこの人たちを2度にわたって訪ね、のべ10時間をこえる時間をかけて話を聞きすすむうちに、この人たちにみる“不屈の忠誠心”の形成や持続に関する一般的な追求をすることの意欲と関心はほとんど消えていた⁹。

それを綴るには、この人たちが沖縄を発つ以前からの、その親たちの生活から説きおこしながら、ブラジルにおけるおそらく筆舌に尽くしがたい苦難の日々と、戦後は“負け組”との対立のなかでなめた心身ともに消耗する、さらにきびしい労苦の歳月を、詳細にたどらなければならない。(中略)

こうして送り出される移民=棄民たちの心の拠り所はただひとつ、故郷への限りない愛と故国の栄光に対する誇りだけであった。(中略)

わずかばかりの財産を処分して、ようやく一家の旅費を捻出したMさん一

家のほか、Hさん、Gさんの両家族は、「国援法」による旅費の立て替え支給で、文字どおり着の身着のまま、かろうじて帰郷してきたものである。ブラジルの寒村における3家族は、「ジュキアの鎖国村」とよばれて孤立し、身体的にも経済的にも、もはや一刻の猶予も許されないほどの限界にきていたのである。（中略）

「忘れるな、ジュキアの鎖国村」と題して3回にわたり同紙（筆者註：現地の日本語紙「パウリスタ新聞」）がおこなったキャンペーン記事の、「国援法ならぬなら、集団自決も覚悟」という見出しが如実に物語っているように、3家族は、まさに極限の事態に追い込まれていたようだ。（中略）パウリスタ新聞のキャンペーン第1回目の記事（上）は、つぎのように結ばれている。

〈この状態を冷たく突き放して考えるならば、この三家族が限られた一部の人の援助でも受けながら朽ち果てても、おれは移民哀話の一頁として忘れ去ってもよかったが、事情は違ってきた。「人さまのお情けにすがっておめおめ生きるよりも人に迷惑をかけないように、死にます」ともらしはじめた。一人が覚悟を決めると妻たちも「私も後に続きます」という。Hさん宅に集った三家族は「覚悟」というとき切腹の型をとる。

一般の人間がこんなことをしたら笑いだしてしまうが、戦後二八年間、かたくなに意志を守り通し、沖縄から肉親が帰国旅費を持って迎えにきても、鉄砲を撃って会おうともしなかったIさんはどんな事故をも起こしかねない危険性をはらんでいる。

この事情を熟知している人々が「事故が起こらないうちに」と一日も早く国援法によって、まず老夫婦四人を日本に送り返そうとするが、日本外務省は「予算がない」の一言で突き放してしまう。（中略）

こうして一民間人の奔走と、現地新聞社の積極的な警鐘に動かされてか、同年10月、日本政府もようやく重い腰をあげて「国援法」による送還を決めた。（中略）

×

この人たちが帰った時、会田雄次京大教授は、その精神状態を分析しながら次のように語った。

〈日本人ばかりでなく、外国だって、情報から隔絶された地域では、このようなことが起こるものです。唯一の情報を大事にして、他を受け入れられなくなり、がんじがらめになってしまう。それを情報の相互交渉というのですが、つまり自分自身のエコーをきいているにすぎないことになってしまうわけです。日本の農村でも、昔からこの傾向は強かったし、私の体験でいえば、現在のように情報がはんらんしている時でも、新しいことを疑い、じぶんの知識だけを信ずる面も残っている。

まして、“神州不滅”をたたき込まれて、それを信念として移民した人たちであってみれば、その気持ちもわからないわけではない。ただ今とってみれば、負けたことがわかっているのに、後へ引けなくなっているような気がする。(略) (読売新聞, 73年11月19日)

そして、沖縄の作家・大城立裕氏は、雑誌『現代の眼』1974年6月号に「ブラジルの“勝ち組”」を書いて、この人たちの心情を、沖縄の歴史風土とのかかわりでとらえるところみをした¹⁰。

大城氏はその文中で、テレビの追跡レポートをみたある人が、「あれほど日本人らしくない話し方をする人が、なぜあんなことになったのだろう」と首をかしげた、というエピソードを書きとめている。「ある人」とは島尾敏雄である。3家族帰郷後のテレビ追跡があった直後、たまたま別の事件で大城氏と共に名瀬市の島尾氏を訪ねた時にかわされた話題の1つであった。

その言葉のアクセントといい、イントネーションといい、そして何よりもその風貌や挙措のすみずみまで、いかにも“沖縄人丸だし”の人たちがテレビの画面で「神州不滅」の牢固とした信念を披露している図は、見る人に奇異の感じを抱かせずにはおこななかった。その印象を島尾氏は話題にしたものであった。

「あなたは沖縄人を買いかぶりすぎます」と私は言った。沖縄人が日本人らしくないからこそ日本人になりたがる、という逆説はいつも私を憂鬱にさせている。その性向は移民において先鋭的にあらわれてきた。沖縄における皇民化運動は、このように悲惨なかたちで成功した、といえる。——と大城氏はつづけて書いている。

「“日本人らしくない”人たちが、日本人以上に日本的に自分を律しているあの姿こそまさに“沖縄人らしい”ということでしょう」——私はそういう意味のことをしゃべったように思うが、そのように言いながら、苦く重い思いが胸につかえて息苦しかった。

沖縄人の悲惨がそこに凝縮されて提示されているからである。そしてその悲惨は、決してこの3家族だけが背負っているわけではなく、総体としての沖縄人が、好むと好まざるとにかかわらず背負わされているのではないのか、という重苦しい思いから逃れることができなかつたからである。しかも、その悲惨を、3家族の当人たちが自覚していないのと同じく、3家族を好奇と憐憫の目で眺める人びともまた、無自覚のまま同じ惨劇を引きずっているのではないのか？

×

ともあれ、3家族は帰ってきて一年余、現実世界のなかでみずから現実認識をいささかなりとも変え得たかどうか。——答えは否（ノン）であった。その信念には依然としていささかの動揺もみられなかつた。再度にわたる訪問で、くりかえし問う私の質問に、老人も青年も動する色もなく答えたのは、〈やはり日本は勝っていると思う〈天皇様は神様である〉という返事だけであった。（中略）

そのGさんをはじめ、Hさん夫妻、Mさんと、いずれも家庭環境の不遇と貧困によって、尋常小学校の低学年しか出ていないという共通点を持っている。学歴で人を評価するほど人間に対して不遜な態度はないし、無意味なことだが、この場合、問題を解く1つの鍵は提供してくれることは否めない。何故ならば、ほとんど読み書きができないということは、現実認識を得るた

めの情報取得に大きな欠落を生じせしめるからである。もっぱら聞くことだけが情報取得の方法であり、しかもその“耳”には、頑なな日本人教育によるフィルターがかけられて、フィルターに適合するもの以外の情報は受け付けない仕組みになっているからである。(中略)

Mさんは私に言った。

〈誰がどんなことを言っても、それはこちらの耳から入り、あちらの耳から抜けていくだけです〉と。

同様の言葉は、前出のテレビの追跡番組でも言われ、その意味をめぐって大城立裕は、同氏が敗戦直後、上海で体験したことを踏まえながら次のように書いた。

〈勝ち組の3家族が帰国したあとのことになるが、テレビでいろいろと追跡したのを見ると、一世の3人のうち1人がどうやら現実認識を正しくしはじめたらしい様子が見えた。ところが彼は、現実を説く相手にニヤニヤしながら答えたのである。「あなたがたがどう言おうと、私はこの耳から聞いてあの耳から抜けていきますよ」これはまったくはずかしくてやりきれないのだと、私は思った。いまさらその洗脳に乗れるか、と思った私の体験と同じことを、その人はしていた。〉(前出論文)

だがあれから1年の時間をおいて、Mさんから再び同じ言葉を聞いたとき、私は大城氏の解釈は必ずしも当たらないという感じを強くした。たしかにMさんは、私にそれを言う時も、あのテレビの時と同じようニヤニヤした表情をみせていた。しかしそれは、テレかくしめいたニヤニヤではない、と私には思えた。むしろ正体不明ともいうべき、おそらくは自分とまったく考えを異にするであろう世界の人間に対して、本能的にみせる自衛的な意味を含んだニヤニヤなのだ、ということ、その雰囲気は示していた。

× ×

〈耳から耳へ抜ける〉と答えるときの“ニヤニヤ”は、はずかしさをかくす笑いではないと私は書いた。それは、この人たちが天皇について語るときの表情でも確かめられるように思えた。「天皇様」とか「天皇陛下様」とか、

この人たちがみずから口にする時はもちろん、私が質問するのに「テンノウ」という言葉を発する時ですら、いままで笑っていた表情は一瞬にしてきびしくなり、座り直して威儀を正すのである。戦前から戦中にかけて、私たち自身が強制され、あるいは自発的にやったのと寸分変わらぬ姿がそこには生きていた。

私は質問した。

〈テンノウヘイカのためならば、今でも喜んで死ぬますか？〉

Hさん、Gさん、Mさん、どの家へ行った時も帰ってくる答えは1つだった。

〈死ぬます。喜んで…。〉

Mさん宅を訪ねた時、私は意地悪くさらに重ねてたずねた。

〈私はテンノウのために死ぬことは馬鹿らしいと思います。しかし沖縄のためになら死んでも構わないと、という気がしますが…。〉

Mさんはきびしい表情で、吐き捨てるように叫んだ。

〈沖縄のためになんか死ぬません。絶対に！しかし天皇様の命令ならいつでも喜んで死ぬ覚悟はあります〉

沖縄のためになんか、絶対に死ぬない、と吐き捨てるように叫んだMさんの表情に、一瞬、暗いカゲリが差したことを、私は網膜の奥に焼きつけた。敗残の身を故郷にさらす悲哀が、その胸に深く沈んでいるのであろう。それ故になお、「神」としての天皇だけが精神の緊張を支える1本の糸である、という感じであった。（中略）

新川 〈移民地でヤマトから来た移民の人たちに馬鹿にされたり、差別をうけるようなことはありませんでしたか？〉

H 〈どこにもよい人もおり、悪いひともいる。内地の人もウチナーンチュも同じ。どこも同じだよ〉

新川 〈その通りですが、たとえば嫁のやりとりなどで、ウチナーンチュの所には嫁はやらないとか…。〉

H 〈それは当たり前で、他府県人は同じ日本人だから、外国の人に嫁にさ

せるより同じ日本人の嫁にさせなさいと、私たちもいいましたよ。それはそうでしょう。内地は同じ日本人でしょう)

新川 〈しかし、おじいさんたちの考えでは、沖縄も同じ日本であって、ウチナーンチュも同じ日本人であるという考え方ではないですか？〉

H 〈同じ日本人でも内地はちがっているでしょう。コトバもちがうしね。しかし教育も同じだし、わたしはやはり同じ日本人だと考えているよ〉

新川 〈おじいさんの方でそう考えても、向こうの方——ヤマトンチュの方で、そう考えない人もいたんではないですか？〉

H 〈それはあるよ。ウチナーンチュをバカにした人がいた。その人にはボクが、「沖縄と日本は教育が違うのか。同じ日本じゃないか」といつてやった。その人はあとで詫びに来たよ〉

そこで妻のKさんが口をはさむ。

K 〈アンシガヨーニイサン、ウチナーンチュと内地のヒトとは、内地のヒトはナサキ(情)がイキラッサン(少ない)ということです。コトバも、ウチナーグチのように、ナサケはネーランということですよ。本当の話、ウチナーグチのように、ナサケはネーランドー。それはどうしてなのか、わからんシガ…。〉(中略)

よく知られるように、“勝ち組”と呼ばれるこの人たちの信念を支える最大の根拠は、「天皇の健在」である。〈もし、日本が負けておれば天皇様が生きておられるは筈ない〉——究極のところ、このあまりにも単純明快な論理が、その核心を形成し、あとはその論理の延長線上に組み立てられていくだけだ。

〈負けておれば日本人たる者、全員腹を切っていた筈だ〉

〈負けておれば、皇居や靖国神社が残される筈はない〉

〈この見違えるような繁栄が負けた国のものか？〉

〈外国の大統領をはじめ、あらゆる人が日本に敬意を表しにやってくるではないか〉

〈沖縄の米軍基地にも、ちゃんと星条旗と並んで日の丸が掲揚されているのは何故か？〉（中略）

この人たちの言葉のひとつひとつは、天皇の国家とその国民に、「戦争」の責任を問うて突きつけられた鋭い刃ではないのか、と思えてくるのだった。（以下略）

南米の日系人社会において、日本が戦争に勝ったのか負けたのかをめぐって殺人沙汰が起こるほど激しい「勝ち組」と「負け組」の戦いがあったことはよく知られているが、その「勝ち組」のなかでも沖縄系の人々がほぼ最後まで残っていたという事実は、余り知られていない。空港に降り立った直後に彼らは「天皇陛下万歳」と叫び、こんなに繁栄しているのは日本が戦争に勝ったからに違いない、日本が負けたのなら国民は腹を切っているはずだし皇居も靖国も無いはずだ、そして天皇陛下が生きておられることが日本が負けていないことの何よりの証拠だなどと、インタビューに応じた。

狂気にも見えるその語りが、戦後日本社会への強烈な批判の言葉となってじわじわと突き刺さる。その3家族のなかの1人であるM氏にインタビューをした新川明が当時興味深いレポートに記した、言語化を拒否する身体記号としての「笑い」。彼に何を訊いてもただにやにや笑いをしている。そのレポートをもとにM氏の笑いを考察する行為が、私達をどこに連れて行くのだろうか。それは、沖縄の「文化素」を突き止めることに繋がるのではなく、そもそもにやにや笑いという行為自体が言語に還元できないものを含むがゆえに、それを言語を構成する場にある形で落とし込むことによって、文化の語りというアリーナにおける多様な還元のあり方を構想し、沖縄をめぐる「批判」をあるいは活性化させることに繋げてみたい。

2. 笑いを解釈する

2009年夏のある日、首里にあるホテルのロビーにて、前章にて扱ったレポー

トの著者、戦後沖縄を代表する言論人（反復帰論¹¹者のひとり）、新川明氏にインタビューをした。4時間を超える長いインタビューにおいて、新川氏は様々なことを語ってくれた。やや乱暴に結論を先取りして言えば、そこで私が出会った民族誌的事象は2つあった。まず、沖縄を代表する固有名2人が（おそらくは密かに）囲碁を指す相手同士だということ。そしてMさん一家を探し出すことはしないほうがいだろう、という先に紹介したレポートを記した当の本人からの助言をどう受け取るか逡巡する筆者自身の身体に、こわばりとそして安堵が生じたということ。ここでは、その「にやにや笑い」についての応答のみ触れることにする。私が率直にあの笑いについて尋ねると、このような答えが返ってきた。

「大城立裕は、Mさんのあのにやにや笑いをテレビでみて、照れ笑いだろうと解釈したが、それはやはり違うと思う。私は実際にMさんにインタビューしたときにその笑いを見たのだが、あれは、にやにや笑いとは書けないんだ。でもあれば照れ笑いでは絶対ない。」

その「にやにや笑いとは書けない」という笑いは一体何なのか。言葉に変換することを拒否する身体記号について更に言葉を費やすという作業は何をもたらすのだろうか。かつての新川が「勝ち組」の人々を質問攻めにしたように、私もまた執拗に新川に問い続けた結果、辿り着いた言葉は次のような台詞だった。（ちなみに新川は延べ10時間のインタビューを行ったと書き記している。）

「このにやにや笑いについては、ヤマト的な生産性を追求するのではなく、徹底して沖縄の人間として時間をかけて追求していく必要がある。ジャーナリズムは取材即発表だが学問は違う。Mさんが沖縄に帰ってきてどういう立場にいるのかということ伝えるためには、この「にやにや」笑いは大事

なことだった。立裕の解釈は違うけどね。」

やはりその笑いを書き込むことで、笑いを共有する人の間に何かが生じている（と、少なくとも新川は了解している）。帰属意識とも政治意識とも少し異なる、時間性と関係性の間に横たわるそれは、学問的な手つきで触れることはできない、あるいは触れてはならない、と言っているようにも聞こえる。

「沖縄の人は狭い共同体に生きているから、文章の上ではやり合うけれど、会うとね、やあやあとやるんだ。高良倉吉¹²とも飲むしね。だから私は稲嶺さんと碁をやるんだ。彼とは一番の囲碁仲間だね。というより彼としか打たない。昨日も、「あんた勝っ手読みしたね」というから「名護市長選のときみたいだねえ」と返したよ。」

にやにや笑いについての語りは予想外の地点に着地した。元沖縄県知事で保守派の政治家として知られた稲嶺恵一と、長い間左派知識人の代表格として活躍した新川明とは世間では「敵同士」の関係だと見なされている。その二人が実は囲碁を指す仲なのだという。新川は、「言説」の尻尾を捕まえようと躍起になっている私に、何を伝えようとしたのだろうか。共同体の触手のようなものの正体を見たような気がした。それは共同体の智恵でもあり、また弱点でもある¹³。Mさんのにやにや笑いと、ひょっとしたら同じものを共同体そのものもすでに持ち合わせているのかもしれない。

インタビューを実施したり民族誌を執筆したりする行為もまた、囲碁を指すという行為同様、多様な共同体の語りの形式のひとつである。新川氏から聞いた、（当時）まだ何人かが存命の「勝ち組」の家族にはインタビューに行かないほうがよいというその理由を私がいつか誰かに語るときがくるだろう。そしてそこには、さらなる想定外の着地点に辿り着く語りが用意されているのかもしれない。

ところで、「勝ち組」、「負け組」、英国紳士、じゃぱゆきさん、マルーン（逃亡奴隷）、コギヤル等、階級やエスニシティといった諸係数で構成されうる歴史的な集団カテゴリーがある。彼らや彼女たちが誰であるかということ言葉を突き止めていくのが社会や人間に携わる人文・社会科学の諸領域だとすれば、彼らの感性や在り方を想像すること、またそれを突き止めていくのは誰かということもまたその領域に含まれるだろう。「勝ち組」が誰かではなく、むしろ彼らの存在様式を想像し探求することについてここで少しばかり賭け金を置いてみよう。

18世紀の小説にみられる英国紳士の修辭的研究を行ったジョン・バレルは次のように喝破した。英国紳士の言葉こそが、共通語に特定された言語である。すなわち何よりも共通語というものは、まず地域主義あるいは特定の職業や同業者団体に根ざした言語を否定する過程を通して規定されるものであり、それゆえに英国紳士という中核をなすビジョンはいわば「あらゆるものを包摂する存在として想定され、一方でなにひとつその包摂の証拠を示すことのできないものである。」¹⁴また、ヒューストン・ベーカーの「完全なマルーン状態」に関する記述¹⁵には、次のようなものがある。あらゆるアメリカの希望や利益そして生産様式とは縁のない開拓地や辺境で危険にさらされながら服従を拒否して彼らは生活をしている。そこには、社会的権威の力やそれを転覆する力が姿を現しうる。

ホミ・バーバによると、国民とは単なる歴史的な事象でも愛国的な政治体の一部でもない。社会的志向という複雑な修辭的戦略としても存在している¹⁶。意味作用を置換し、脱中心化する戦略がとられるなかでこそ既存の権力構造や社会的権威、そしてそれらを転換する力、すなわちサバルタン¹⁷的なものの力が姿を表しうる。Mさんのにやにや笑いは、戦後沖縄社会におけるマイノリティが発動させた「力」の徴だったのだろうか¹⁸。

沖縄の歴史的な文脈において、近代化とは日本人になるということでもあった。いわゆる「同化」である。そこには（特定の条件下における）差別を乗り越えるという主体的側面と、自文化の消滅という客体的側面がある。あるいは、差別

を温存するという側面（決してなくなる差異）と文化的差異を資本主義の法則に則って再生産するという、逆の解釈もできる。その一方で近代化とは、宗教的なしがらみから脱却するという側面もある。世俗化である。しかし「勝ち組」の場合、その半分を近代化しそこねたことになる。あるいは両方かもしれない。ただしこのように勝ち組について語り出すとき、「勝ち組は国民である」ということを単に言っているにすぎないという危険性がつきまとう。ネーションをナラティブとして読み替えると、固定化されたものと行為遂行的なものとの分裂する。その過程を通じて、近代社会のもつ両義的性質がネーションを記述する場へと転じていく。

いわゆる植民地近代を見つけるこの手の眼差しは、逆説的にナショナルな物語を補完し後追いすることに繋がる恐れがある。たとえそれが反省的視点に立っていたとしても。これはいわば「後出しじゃんけん」の類なのだろうか。いや、そうではない。ネーションとのじゃんけんは、今ここで行われている。それが「文化の語り」における私の戦略なのだ。

さて新川氏にお会いした数日後、この「にやにや笑い」について戦前戦中戦後の沖縄社会を鋭く見据えた演劇「人類館」の演出家幸喜良秀氏にも、同じように質問をしてみた。彼は当時国立劇場芸術監督に就いていたため、舞台稽古の最中だったが快くインタビューに応じ、以下のように応えてくれた。

「表現はひとつではない。複雑なのだ。たとえば復帰運動。当たっていたのか間違っていたのか今となってはわからん。ただにやにやするしかない。論理的な解釈をつっぱねる。自己コントロールをする庶民の、あと一步踏み出すための「笑い」だろう。そういう表現しかしないんだ。急に手を握ったようなもの。Mさんが知と感情の訓練がされていない、ただの庶民であるということ。本人に会ってみないと分からないことだけど。島嶼世界の人々、弱小の人々は、こういう表現をとってきたのだろう。微妙な笑い方をするだろう。笑う

ことで次の世界へ行くんだろう。人の上に君臨したりしている人には分からない笑いだと思う。いつも痛い目にあってきた人の笑いなんじゃないだろうか。マイナスをプラスにする笑いだ。「勝ち組」の負の笑いだ。その日の貧困から逃れるために帰ってきたのだ。アメリカ人にはわからん笑いかもね。」

やはり、ここでの幸喜の見立てもまた、弱者の技術としてその笑いを即座に捉えていることがわかる。

「復帰したのは、ヤマトの天皇じゃないんだよ、ただ、豊かになりたかったからなんだ。沖縄にとっては、ウスガナシーメー（国王）でも天皇でもどっちでもいいんだよ。屈折した笑い、内輪の笑い与他人の前での笑いは違う。後者の笑いは屈折しているんだ。知識人の笑いとう島でつぶされてきた弱者の笑いは違うんだよ。小さい島の人はずいつも犠牲になる。その犠牲を乗り越えていく力になるための笑い。沖縄芝居の役者なんかは心の中で「もともと士族だから客より偉いんだ」と思っている。客にお辞儀もしない。対等である。芸は売るけどプライドは売らん。みーわれーぐわー（目だけで笑う）が大事だと言って、頭を下げないんだ。多くの人は知らないだろうけど、「奥山の牡丹」という芝居があるでしょう。牡丹の花は沖縄では咲かないんだよ。幻想、夢。これが沖縄の芸能の美意識だよ。これも芸能の手法のひとつなんだ。」

そして話はいつしか沖縄の演劇的リアリティに移っていく。笑いそのものについて、まわりにいる年配の方々に声をかけ質問していく。たまたまその場にいらした郷土史研究で知られる儀保栄治郎氏をはじめ、一人二人と話に加わり、普段はもう使うことも少なくなった古ぼけた言葉たちを、共同体の四隅から

次々と拾って来だした。

「なまわれー， なまじらわれーというのがあるね。居直っている笑い。」

「多少嘲（あざけ）りに近い部分もあるがそこまではいかないな。」

「やまわれーという作り笑いもある。」

「なまじわれーというのは， お前はそうであっても私は違うよ， というニュアンスの笑いだね。なまげ， なまげーとん， とは， 事故を起こしてもへこたれない不死身のような， ときに反抗的な意味の笑いさ。」

「さーわれーというのは， へらへら笑い。にやにやとは違うね。微笑みという意味もあって， 精神を患っている人の笑いを言う場合もある。」

「んじゃわれーとは， 自分の失敗をごまかす苦笑いのこと。」

「あふあけーわれーとは， 上の歯茎が出る笑いで， 那覇の人が主に使うね。んじ， そうでしょ？」

「うん， はまぐりわれーとも言っていた。」

「みーわれーというのは目で笑うこと。」

「はなわれーとは， 鼻に皺を寄せて笑うこと。」

「あふあわれーとは， あわい， 味のない笑いのこと。」

「たかわれーとは， 空虚な勝ち誇った笑いのこと。」

などなど以下を欠く。

・
・
・

「笑い」についてのタクソノミーを， 古老たちが実に楽しそうに語り合う豊かな時間。これがかつての民族誌の時間であった。この豊穡さを， 旧来の沖縄学，

あるいはふたつのミンゾクガク（民俗学・民族学）は汲めど尽きぬ泉としてこよなく愛した。そして失われゆく文化，滅びゆく慣習を語る語り口に批評的な視点が組み入れられ、「サルベージ人類学」批判が完成し¹⁹，今では耕す場所そのものがなくなりつつある。調査地で時折出会うこの儂い「豊かさ」をどう考えたらよいのだろうか。この問いはかつて人類学の内部で批判されたように，滅びゆく文化へのエントロピックな語りの反復に過ぎないのだろうか。ここから多様性による批判²⁰という観点で少しまとめてみたい。

フィールドで出会った「にやにや笑い」という身体的記号とそれへの応答を繋げていくときに志向されるのは，特定の時間と場所で生じた所作を新たな事物たちへの繋げゆく叙述の力である。民族誌的記述の推進力と言い換えてもいい。私は私の能力の別名である。私ができることの強度や質量が変化していくことは，すなわち私自身の変化と変革を意味する。書くことによって，関わるというあり方を書くことを通して，ひとは経験し，学び，そして学び捨てることになる。エントロピックな語りもまた，すなわち私に還元されるべきものとして乗り越えられる。

ただしそのとき，私の書く行為は具体的な「場」から切断されたものとして提示されない。具体的な私の「場」とは，私の親密圏，沖縄，教室，研究会，そしてフィールドなどである。切断しないことによって，何を試すことが可能になるのか。その具体的な「場」が統制する言葉の意味を，別の場に移し替えることによって編成させること，またその編成自体の意味を考察することによって，言語に還元しえないものを特定し（これが人類学では通常「文化」と呼ばれる領域である），それを言語的实践へと還元することによって多様な還元のあり方を構想すること—ここでは沖縄をめぐる「批判」を活性化すること—が可能となるのだ。

「勝ち組」の帰国に端を発する幾つかの沖縄の風景について，ここまで幾つかの角度から見てきた。事件やできごとにパブリック・インタレスト（人民の権益）があるかどうかという問いの立て方がある。たとえば政治家に賄賂をもらったかどうか訊くということ。あるいは昭和天皇に戦争責任を問うというこ

と。それを万が一私が聞いたとたんに、訊けたとたんに、事態は果たしてどうなるか、という人類学的想像力の問題だ。ただし先の突拍子もない問いの答えを直接聴いたということは、すなわちそのような立場に身を置いたということは、その言葉の内容を他者に伝わるべく言語化するという行為を禁じてしまうことに繋がる場合もある²¹。聴いてしまった事実を表出する言葉が、その言葉の意味を確定する権力の場において、その権力という力によって貫かれ、その言葉が外に漏れ出ることを塞いでしまう。それはときに検閲という姿で顕れる。この事態をどのようにずらしていくかということが最終的には焦点となる²²。すなわちパブリック・エネミーは本当に皆の敵なのかということ、そしてそれはそもそも言葉によって言い表せるのかという、初発の問いを笑うような新たな問いに繋がることになる。

3. 解釈を笑う

フィールドワークの最中、たまたまテレビで猟奇的な殺人事件が報道されているのに出くわす²³。そこでテレビを観ていた一人のおばあさんが真面目な顔をして言う。

「あれはね、前に同じことをした人がいたんだよ、先祖にね。戦争でね、同じような殺し方をしたんだねえ。あり、ここのウァービ（上）の方の川でね、あそこで洗濯していたら、突然日本兵がやってきてね、脱走兵だったのかね、川で水を飲んでいて青年を見つけてすぐ貴様とかなんとか大きい声で叫んでその場で首を切り落としようらしい。もう怖くて怖くて、すぐ家に帰ってから土間でがたがたあして震えてさ。あまりに恐ろしくて家族の誰にもそのことを言えなかったって。**の姉さん、知ってるでしょう、あの人が言いよったよ、こんなだったよって。」

次から次へと目を覆うようなエピソードが、「戦場の記憶」の淵からぞろぞろ這い出してくる。隣の**兄さん、又従兄弟の**姉さん。顔のある証言たちがひとしきり登場したあと、そのおばあさんが小さな菓子折を開いて言った。

「あり、食べて。この前東京で皇居に行ったときに買ってきたお菓子。菊が描いてあるよ。美味しいから、と、かりんでえ²⁴。」

兵士の残虐さや戦争の悲惨さの記憶に包まれた饅頭の味は、親族理論では切り開くことのできない親密圏を示す。生活の逞しさに、時空はでたらめに端折られる。親密でときに痛快ですらあるその歪みに、濃密な語りは溜まる。記憶の波紋に半身を浸し、共同体の水紋に目をこらす「私」がいる。顔のある証言たちに囲まれたおばさんたちは、「現在」を不確定に分節化しながら、歴史をぺろりと平らげてしまった。どうかだまされないでほしい²⁵。沖縄のオーバーたちが食べるその「不気味な」菓子には、時間と歴史が欠けていると思われるかもしれない。しかし、それはれっきとした共同体の言語であり、文化の現在である。「文化の表象は、幽霊や妖怪のようにその姿や居場所を変え、思わぬところに…やってくる」²⁶。「不気味なもの」²⁷は、理不尽な生のなかに不条理な死を想起させる。その生とは「戦争の記憶」をいまだ抱え込む日常であり、その死とは「戦場の死」である。

フィールドで突然そしてしばしば出会ってしまうこのような（どう解釈していいのかわからなくなってしまうような）場面は、歴史的因果関係で括ってもどうやら役に立たないぞという直感を常にもたらす。そのたびに、文化や歴史を記述する枠組みを用いると同時にその外側に這い出るような言葉遣いや言い回しを模索してきた。そしてその幽霊的な感覚が、今こうしてにやにや笑いをなんとか解釈しようとしているときのそれに確かに繋がっていることに気づく。

ここでこの「笑い」の解釈を引っくり返してみよう。正確には、笑いを解釈するという行為を逆立ちさせてみよう。つまり「笑い」というものを現在に住

もう私達が説明する対象としてではなく、現在の社会の有様を扱う主体として私達を要請する「何か」だと捉えてみる。そのためにまずはひとつの迂回路として、よその共同体で出会った別の笑いを紹介する。

時は2006年、ニューヨークのアンソロジー・フィルム・アーカイブにて高嶺剛映画祭「Dream Show: The Films of Takamine Go」が開催されたときのことである。上映中の作品のなか、黒人が演じる役の男がユーモラスな振る舞いをしばし見せるシーンで、会場は異様な雰囲気にもかかわらず、会場全体が静まり返っているなか、ニューヨーク在住の沖縄県人会の中年女性たちが占める一角からだけ笑い声があがっていたのだ。他のアメリカ人観客は誰も笑わない。いや、笑えないといったほうが正確だろう。まるで一般のアメリカ人観客の座る席からだけ、無言の「検閲の声」が聴こえてくるようなそんな奇妙な空間が創出されていた。あの瞬間私は何に触れていたのだろうか。スクリーンに映し出された「黒人」を笑いものにしてはいけないというP C（政治的正しさ）の権威の金網をすり抜けてその向こうがわに届く笑いがそこにあった。「なんでえ、おかしいのにわらわんほうがおかしいさあ」と、県人会のメンバーの一人はそうあっけらかんと答えた。その笑い声が届いた場所、権威の外部、すなわち社会的闘争のアリーナの金網の向こうには、当然「言葉」の外部が茫漠と広がっている。この金網の向こう側に届く「笑い」を、言葉や物語の外部と内部を規定する環境そのものを見つめる視点から捉え直してみよう。

イタリアの美学者であり思想家でもあるジョルジョ・アガンベンは、かつてローマの人々が、共同体から聖なる者として烙印を押された者を、ホモ・サケル（聖なる人間）と呼んだことに注目した²⁸。ホモ・サケルとは、共同体の掟が適用されない聖なる存在という意味を持つ。たとえば父親を殺した息子をそう呼ぶ。共同体の誰かが彼を殺害しても、共同体によって裁かれることはない。またかつてローマの軍人が戦場に赴く際、私はホモ・サケルであると宣誓したという。ホモ・サケルは、「ビオス」（社会性や政治性を含んだ生活）を奪われ、「ゾーエー」（単なる生物としての生命）しか持たない存在だと規定される。法的

保護の外に放り出され生ける屍と化したユダヤ人を指す「回教徒（ムスリム）」というかつてアウシュビッツ収容所で密かに使われていた隠語や、臓器移植のための献体、脳死状態の人間存在を丁寧に扱いつつ、アガンベンはこれを「剥き出しの生」と呼び、生政治（バイオ・ポリティクス）の思考を鍛えてきた。

言葉や物語の外部と内部を規定する環境から見た「PCの金網の向こうに届く笑い」もまた、この「ゾーエー」という生命と「ビオス」という内的歴史（生活）とのふたつによって成立していると言える。「笑い」を司る口は、つまり、食べる、呼吸する、そして性的な機能を務める器官としての口（生命）という「表の顔」を持つと同時に、言葉、物語（内的歴史）を発生させる「裏の顔」を持つのだ。

「勝ち組」のにやにや笑いを、ひとまず共同体的暴力への無意識の自己防御と捉えた場合、この観客席で聴いた笑いは、全体主義の絶対的実体を示す証言となるのだろうか。そうするとにやにや笑いは、ちょうど映画館の暗闇で聞いたあの県人会の女性たちの笑いと真逆の方向で、つまり金網の向こう側からやってくる「笑い」だったのかもしれないということになる。

笑いとは、生の機能つまり器官としての口、内的歴史を司る言葉を操る口、この二つの両端を繋ぐ距離が収縮したり弛緩したりして生じるものである。すなわち、主体化と脱主体化の同時並列をうっちゃる一瞬の「祭り」なのだ²⁹。

前章でつぶさに見たとおり、にやにや笑いを解釈する人々はそれを主体に還元しようとした。つまり言説という枠組みのなかで言語的意味としてその笑いを扱った。ここで私はそれを言説の内部ではなく、「言表（エノンセ）」として扱ってみたい³⁰。結論を先取りして言えば、それは「日本が戦争に負けていない」という強烈な潜在性（それは歴史修正主義者が言い募る類のものでは全くない）を賭け金として、「勝ち組」のにやにや笑いを「狂言」としてではなく別のものとして聞き取る可能性に繋げる。

先に紹介した大城のレポートや、私自身のフィールドでの経験で明らかになったように、にやにや笑いは様々な解釈を呼び込む記号として常に作動する。たとえば「サバルタンは語れない」という命題が指し示すものとして、戦

略的失語症の症候として、あるいはポストコロニアル・メランコリアとして。ここではにやにや笑いというものを、そのような主体を前提とした「意味」、つまり語られる事柄の内容ではなく、「純粋な存在事実」³¹あるいは言語活動そのものとして捉えてみたい。そう捉えることによってこの笑いが、戦後の日本語空間によって創出される「意味」の総体を問い詰めようとしていることがわかる。すなわちこのにやにや笑いは、「戦争に負けていない」という「勝ち組」の台詞を狂言としてではなく証言として聴く、そのための印なのだ。そもそもこのような事態が起こらなければ自分たちの痕跡を残すことがなかったかもしれない「純粋な存在事実」が、大文字の国家や歴史と呼ばれうるものと異郷で出会うことによって、狂人の烙印を押されてしまった。その烙印に惑わされずに、つまり主体に還元せずに、にやにや笑いを「脱主体化の主体」³²として受け取ることが求められているのだ。にやにや笑いは、「戦争に負けてこんなに栄えているはずがない」社会に「のうのうと生きているわけがない」のにこうして現に生きている人間たちの姿を証言することができるのが、ただ主体と呼ばれうるものなのだというを常に伝え続けている。

裏を返せば、にやにや笑いという「純粋な存在事実」を、狂人扱いする「世間」に一面抵抗しているかにみえる沖縄と日本の知識人たちも、実はにやにや笑いを主体に還元することで、つまりそれぞれが望む—無論望むことそれ自体が倫理的であり得るとしても—物語の「作者」を見出そうとしたにすぎない³³。

「勝ち組」のにやにや笑いが沖縄／日本の「歴史」のなかに「言表」として置き直されたとき、アガンベンのいう「回教徒」の姿と重なり合い（正確には正反対の夢を観ていることになるが）、またその影は戦争の生き残りの者たちのそれに連なる。「沖縄戦の証言」という歴史を参照する倫理的指標に「言表」の倫理を重ねた時、次のことが明らかになる。歴史の証言として、私達はサバイバー、生き残った者たちの声を聴くしかない。しかしそれは不完全である。なぜならばそこに絶対的な資格が欠けているからだ。一方で「戦争」を証言する絶対的な資格を持つ死者は完全な証人としてふさわしくそこにあるが、当然ながらその声を聴くことは叶わない。しかし「言説」ではなく「言表」という視

点で言葉の世界を見つめ直したとき、その両者は同じ地平に立つことができる。そしてその瞬間（戦争に本当に負けていればそこにはいるはずがない「私達」に向けられた）にやにや笑いを考えるとき、その主体を探して意味を確定するのではなく、その同じ地平に立つであろう私達が「現在」の有様を証言することとそうしないことのどちらも選べる立場にあるという事態にまずは目を向けるのだ。すると私達は生者でもあるし死者でもあるという存在（脱主体化の主体）だということが確認でき、私達こそが実は、死者（話すことができない者）のために生者（話すことができる者）たりえる完全なる証人でもあることを知るのだ。

こうして戦争で生き残った者たちの証言ではなく、戦場ですでに死んだ者たちの証言を示しうるものとしての「勝ち組」のにやにや笑いを通してはじめて、戦争への完全なる証人の姿が確認されたことになる³⁴。すなわち、にやにや笑いによって、私達は「証言の主体とは脱主体化の主体である」³⁵という命題にたどり着いたことになり、またその命題によってにやにや笑いの正体を知ることができた。

おわりに

かつてアウシュビッツの親衛隊の兵士たちが囚人たちに冷笑的にこのように警告し、そう記憶している生き残った囚人たちも奇妙なことに同じ考えを持っていたという³⁶。

「この戦争がいかように終わろうとも、おまえたちとの戦いは我々の勝ちだ。生き延びて証言を持ち帰れるものはいないだろうし、万が一だれかが逃げ出しても、だれも言うことなど信じないだろう。おそらく疑惑が残り、論争が巻き起こり、歴史家の調査もなされるだろうが、証拠はないだろう。（中略）ラーゲル（強制収容所）の歴史は我々の手で書かれるのだ。」³⁷

ここには信じてもらえない証言だけが残った。それはまさに、「勝ち組」の聞こえない笑い声、にやにや笑いに聞き取るべき、信じてもらえない証言の残響なのだ。信じてもらえない「証言」という存在（そこに意味はなく存在のみが残る）こそが、このにやにや笑いの問いを考える鍵であり、その答えとなる。認識ではなく存在として、つまり常に意味を回収する「言説」によってではなく純粋な存在そのものとして直に、「勝ち組」のにやにや笑いは受け取られるべきだったのだ。

本稿は、アウシュビッツについての見解を二分している対立するテーゼが不十分だとするアガンベンの考察³⁸を目立たないかたちで携えつつ、「勝ち組」のにやにや笑いという印象的で掴みどころのない身体所作を、沖縄人としてでも日本人としてでもなく、ましてや狂人のそれとしてでもなく、引き受けた。その対立するテーゼとは、ヒューマニズム的論法では「あらゆる人間は人間的である」とする一方で、反ヒューマニズム的な論法では「一部の人間だけが人間的である」と唱えられる。しかし証言に耳を澄ますと、以下のテーゼが新たに定式化される。「人間は、人間的ではないかぎりで、人間である」。すなわち「人間は、非一人間について証言するかぎりで、人間である」。人間的なものについて真に証言する者が、人間性が破壊された者であるとするならば、人間と非一人間の関係性に断絶ではなく繋がりを認めることになる。あるいはその繋がりを「断絶」の一時停止と考えてもよいかもしれない。なぜなら、本稿では「戦後」を含む沖縄の文化と時間を考える新しい知識として「笑い」を考察してきたが、その時間は、「戦後ゼロ年」³⁹という言葉に象徴されるような「一時停止」状態が半永久的に続くように見える沖縄の現在から捉えられるべきだから。

アガンベンは、人間的なものを完全に破壊するものは不可能であり、そこに何かが残る、証人とはその残りものことなのだと、重苦しい歴史に抗して囁いた。倫理的な意味を繰り返し付与されることでかえって見過ごされてきた、一人の沖縄移民による密やかな「笑い」によって導かれた小さな民族誌的断章もまた、ここに残されることになる。我々こそが証人足りうると自覚した者たちとともに。

- 1 アンリ・ベルクソン（林達夫訳）、1976年『笑い』、岩波書店、121-122頁。
- 2 「言説という罫」というテーマは、かつて私自身が関与した沖縄県立美術館にて開催されたアトミック・サンシャイン展の大浦作品検閲問題から引かれた補助線上に置かれている。その展示会は、日本のシンボルをモチーフにすることへの自己検閲が沖縄で起こったという表象問題における痛点、富山美術館天皇画裁判の後遺症、そして写真家比嘉豊光の「垂れ幕事件」が投げかける「政治と芸術」の諸問題などによって沖縄を取り巻く「言説」を芸術の現場から再考する「できごと」となった。（その「言説」の内実を整理したものとしてたとえば以下を挙げておく。『アート・検閲、そして天皇「アトミックサンシャイン」 in 沖縄展が隠蔽したもの』大浦信行、小倉利丸、古川美佳、毛利嘉孝、清水知子、井口大介編、2011年、社会評論社。）

言説における「政治的な正しさ」は具体的な時間と空間の文脈に沿ってのみ分節化される。言い換えれば、政治的なものとは具体的な時間と空間という環境に相応しい「身振り」と「読み」として現前する。従って表現のために、あるいは表現の過程において現在とは異なる複数の時間を措定している芸術において、その正しさは時として矮小化されたりあるいは結果的に逆の立場の言説として「翻訳」されてしまうことが起こりうる。ここで、どの作品が正しくどの作家が間違っているという類の議論が的を射ていないということは確認しておく必要があるだろう。なぜならそこでの「正しさ」は、繰り返すが、現在の具体的な文脈という枠組みに入れられてこそ意味を持ちうるものだからである。

ではその枠組み（framing）という行為そのものを行う者は誰なのか、審級の上位にある者が決済しておしまい、というのであれば、いわゆる学問的妥当性の問題をそのまま留保することに繋がる危険性が生じてしまう。そこに、芸術家としての主体あるいは研究者としての主体をあらためて構築する契機を見ようと努めてきた。ただし本稿では「それでもなお」あるいは「だからこそあえて」といった言葉によって指し示される、複層化した文脈のなかで形成される「場」によってあらためて形成される主体を見つめることとそのことによって見えなくなるものを、「笑い」を考察するかたちで扱う。

- 3 第二次世界大戦後、日本が降伏した後もなお、敗戦の事実を受け入れずに勝利を信じていた在外日本人の集団を指す。その事実を受け入れつつ「勝ち組」の説得に廻った人々を一方で「負け組」、または「認識派」と呼んだ。一般的な歴史的記述からこぼれ落ちてしまうような小さな「笑い」を通常の「認識」の回路ではない形で取り上げる本稿にとって、「認識派」というその呼称は大変示唆的である。
- 4 『不気味な笑い フロイトとベルクソン』（ジャン＝リュック・ジリボン、原章二訳、平凡社、2010年）第8章「枠という補助線」を参照のこと。ここでは、枠のない領域—それは枠の機能不全あるいは絶対的な外部（ラカンのいう現実界）の出現によって完成する—をフロイトの「不気味なもの」として措定している。
- 5 この構造が「供犠」という意味論（そして現実社会においては特定の政治性を誘発する）にずれていく過程については、別の機会に論じる予定である。（たとえば沖縄

が独立したとき、沖縄口という「訛り」は国語となる。）

- 6 その仕掛けは、アイロニーを包括的に論じたハッチオンのいう「特定されることを拒む戦略」に近い。リンダ・ハッチオン（古賀哲男訳）、2003年、『アイロニーのエッジ その理論と政治学』、世界思想社、第2章を参照せよ。
- 7 新川明、1978年、「悲惨なる逆説—帰ってきた“勝ち組”についての覚え書」『新沖縄文学』28、85-97頁、沖縄タイムス社。
- 8 本文中に実名や人物関係が記されている箇所は省略しイニシャルを当てた。また特に必要ないと思われる箇所は略した。新聞からの引用文では漢数字のままで、それ以外は算用数字に改めた。
- 9 この箇所で筆者は強くうちあた（精神的打撲を意味する沖縄語）する。なぜなら私自身のフィールドワークのあり方が時折そのような有様だからである。
- 10 本土の心理学者が心理を扱い、沖縄の作家が心情という言葉で歴史を論じる。この自然主義と実存主義の組み合わせが逆になることはなかったであろう。
- 11 1960年後半以降、沖縄の復帰運動を問い直すなかでたち現れた、日本人への同化の是非のみならず、その議論の前提となる国民国家への疑義を突きつける思想で、沖縄独立論とは異なる。
- 12 基地を主体的に引き受ける是非も含め、沖縄（人）の主体化を国民国家の枠組みの中で積極的に論じる歴史学者。
- 13（当事者ではなく）「共事者」という興味深い概念を用いた、ここでいう共同体の力の功罪を射程に含む示唆的な議論が、福島から発信されている（小松理虔、2018年、『新復興論』、ゲンロン）。たとえば文化を自律的に構築する地域の力をつけることが重要なので、場合によっては最終処理場建設もやむを得ないとする福島の人々の矜持の示し方は、たしかに心を揺さぶるものがある。しかし沖縄の文脈に照らし合わせると、それはたとえば基地建設を積極的に沖縄人の主体化に使い込む歴史家や政治家の声に重なって聞こえてしまうところがあり、それではやはり福島の外に住む人々にとって都合がいいように如何様にも解釈される恐れがあり、同時に福島にとって抑圧的に働いてきた東京を含む「上位の」共同体を強化することに繋がるという懸念もある。つまりそのやり方では（すでに問題を構成している）既存の共同体の枠組みの外に出られない、あるいは現在の国民国家のなかで解決できないのではないか。それがたとえば「市民の連帯」というかたちで解決可能かどうかは是々非々だろうと思うが、ここでは置いておく。やや乱暴に言い直せば、そのような「言説」に垂直に切り込む「言表」（フォーコー）を探すこと—なにしる日本語のなかではそのままのかたちで見つからない、むしろ本稿で試みるようにある特殊な手続きを踏まないと見つからない—で、共同体の問題と可能性を考えるための新しい知識を模索する必要がある。
- 14 John Barrell, 1983, *English Literature in History, 1730-1780 An Equal, Wide Survey*, Hutchinson, p78.
- 15 ヒューストン・A・ベーカー・ジュニア（小林憲二訳）、2006年、『モダニズムとハー

- レム・ルネッサンス 黒人文化とアメリカ』, 第8章, 未来社。
- 16 ホミ・K・バーバ (磯前順一ほか訳), 2009年, 「散種するネイション」, 『ナラティブの権利 戸惑いの生へ向けて』, 64頁, みすず書房。
 - 17 サバルタンとは, 何語であれ「私は誰々である」と名乗ることのできない人間を指す。
 - 18 註2で述べた「枠組み」によって, この「力」の多義性はその都度確認されることになる。
 - 19 サルベージ人類学とは, 消滅していく文化を掬い上げる手つきで記述する民族誌を中心に形成された人類学を揶揄する呼称である。その見立てを整理し流れを牽引した論考に, たとえば以下のものが挙げられる。太田好信, 1998年, 『トランスポジションの思想 文化人類学の再想像』, 世界思想社。太田好信, 2001年, 『民族誌的近代への介入 文化を語る権利は誰にあるのか』, 人文書院。
 - 20 フェリックス・ガタリの一連の記号論から導き出された批判的相対化の方法を, ひとまとめにしてこう呼ぶ。議論の詳細については, 以下を参照のこと。久保明教, 2013年, 「人類学機械と民族誌機械 ガタリ記号論からみる現代人類学の展開」, 『現代思想』41-8, 172-183頁。
 - 21 これが, テキストとフィールドに現れる「笑い」のシニフィエ (示されるもの) を民族誌的に追跡した結果たどり着いた「シニフィアン (示すもの) の専制」の姿である。
 - 22 たとえば「動態編成」というガタリという言葉はここに焦点を当てている。フェリックス・ガタリ (杉村昌昭訳), 1981年, 『分子革命 欲望社会のミクロ分析』, 法政大学出版社。
 - 23 この小さな民族誌的挿話についてかつて詳細に論じたことがある。「文化を漕ぐ, 言葉を焼べる 沖縄の近代性と共同性に関する民族誌的断章」, 『琉球・沖縄研究』第2号, 2008年, pp113-145, 早稲田大学琉球・沖縄研究所。「文化の晴れ舞台」としての民族誌は, 知識の集約的一般性を担うとされる一方で, そこで扱われるテキストは不確実な経験や主観と寄せ集めの虚偽が織りなす「日常生活」から / と共に生成される。つまり人類学とは, 実存とテキストとフィールドと制度的リアリズムがごちゃまぜになり, あらゆることが生成可能で精気に満ち混沌とした可能世界でもあるということ, 沖縄というフィールドの—そしてそれを示すやいなや通常は隠されてしまう研究する主体としての研究者の—「日常」の側から示した。
 - 24 「ほら, 味見してごらん」という意味の沖縄口。
 - 25 ホミ・バーバ (本橋哲也ほか訳), 2005年, 『文化の場所 ポストコロニアリズムの位相』, 法政大学出版, 422頁。
 - 26 バーバ前掲書, 422頁。
 - 27 註4を参照のこと。
 - 28 ジョルジョ・アガンベン (高桑和巳訳), 2003年, 『ホモ・サケル 主権権力と剥き出しの生』, 以文社。

- 29 ジョルジョ・アガンベン（上村忠男ほか訳）、2001年、『アウシュビッツの残りもの アルシーヴと証人』、月曜社、174頁。

この自己防御の笑いとは対極的なもうひとつの「証言」としての笑いについて、ここに密かに提示しておきたいイメージがある。ベンヤミンの「歴史の天使」の口元に、「勝ち組」の笑いを通過した今、私は新しい「笑い」を認める。それは自己を防御する笑いではない。なぜなら天使には防御する自己がないから。ジャガーノートという大型トラック（元はヒンズー教の神の名）に喩えられる近代の巨大な力が不可避免的にもたらした破壊の前で、内的歴史という守るべき「私」が消失しているから。そこには、先取りされた未来という視点が、未来へ開かれた歴史（かつてそうであったかもしれない歴史）を見つめることによって、未来へ投影される主体が、現在の「私」にほほえみかける。すなわち、私がいま笑っているのではなく、未来の私が現在の私に笑いかけている、そのようなイメージを構築する「現在」を経験したとき、未来から訪れるであろう私の「笑い」を私自身が感じ取る。なぜなら、この笑いこそが、いつかふたたび「勝ち組」について尋ねられたときの私に訪れるかもしれないから。（ヴァルター・ベンヤミン（久保哲司訳）、1997年、「歴史の概念について」『ベンヤミンコレクション1 近代の意味』、筑摩書房。）

- 30 ここでの「言表」は、本稿で述べるところの「言説の罫」を乗り越える装置として用いられる。「言表」とは、フーコーが『知の考古学』で提唱した、発話されたり記述されたりしたものの実存的な総体を指し、主体に還元することなく語られているものと語られていないものの諸関係を示すことができる（註33を参照のこと）。また、「言表」としてにやにや笑いを扱う叙述の理路は、先述したアガンベン（2001年）の第4章「アルシーヴと証言」に多くを負う。ただし、かつて沖縄の人たちの目に留まった「勝ち組」の抜けきらない「訛り」に代表される、日本人になろうとしてもなれない「残りもの」的なものや、私がフィールドで出会った豊穡な沖縄の笑いの世界を示す死語、すなわち「歴史」の「残りもの」としての消えゆく沖縄語は、アガンベンの理論の背後にある「口語中心主義」を控えめに脱構築していることになる。

- 31 アガンベン前掲書、188頁。

- 32 アガンベンは、その典型的な事例として以下のテキストに登場する人々の生を挙げている。ミシェル・フーコー（丹生谷貴志訳）、2000年、「汚辱に塗れた人々の生」、『ミシェル・フーコー思考集成VI セクシュアリテ／真理』、筑摩書房、314-37頁。脱主体化された主体とは、口承史を一個人として十全に構成するようないわゆる伝記的なものではなく、生物学的な生を生きる存在（ゾーエー）と言葉を話す存在（ビオス）との分離が刻印された場所で聞き取られる何かである。

- 33 アガンベンによれば、「作者」を意味するラテン語アウクトル（auctor）は、なんらかの理由により法的に妥当な行為を実現する能力を欠いている者の行為に立ち会って、その者が必要とする妥当性の補完をその者に授ける者を意味するという。（アガンベン前掲書、200頁。）一切の「権威」を授けられることのない純粋な行為として

の「にやにや笑い」を本章では考察してきた。それに対して、「証人」の権威は、語ることのできないことの名においてのみ語るができることにあり、つまりは主体であることにある。脱主体化があったところにしか証人はいない（前掲書，212頁）というアクロバティックなロジック（あらゆる解釈を笑い飛ばすような「純粋な存在事実」）はこうして完成する。

- 34 言葉とそれを発する主体という言説の枠組みに基づいた主従関係ではなく、言葉がそもそも意味を持つための場としての主体がそこにあるという事態をひとまず示すために創出されたフーコーの「言表」の理論をアガンベンを経由して用いることで、戦争で生き残った者たちの「遂行可能な」証言と戦場ですでに死んでいる者たちの「遂行不可能な」証言はこうして並列し、私のフィールドとそして現在と繋がる。註30をあらためて参照のこと。
- 35 アガンベン前掲書，204頁。
- 36 前掲書212-213頁。
- 37 プリーモ・レーヴィ（竹山博英訳），2000年，『溺れるものと救われるもの』，毎日新聞社，3-4頁。
- 38 アガンベン前掲書，182頁。
- 39 目取真俊，2005年，『沖縄「戦後」ゼロ年』，日本放送出版協会。

クロード＝アンリ・サン＝シモン

「第二趣意書 序文」および「百科全書の計画 第二趣意書」の草稿

—— 翻刻 ——

江 島 泰 子

日本大学図書館法学部分館（法学部図書館）は、クロード＝アンリ・ド・サン＝シモン（Claude Henri de Saint-Simon 1760-1825）とサン＝シモン主義者たちに関する「サン＝シモン・コレクション」を所持している。多くの草稿が含まれているが、その紹介は以下のサイトでなされている。

<https://www.law.nihon-u.ac.jp/library/pdf/345-364.manuscript.catalog.vers.6.pdf>

今回取り上げる資料はこのコレクションの361番に該当し、「第二趣意書 序文」（S-S 361a と記載）および「百科全書の計画 第二趣意書」（S-S 361b と記載）と題された草稿である。上記のサイトに示されているように、これらの草稿はサン＝シモンの秘書により1810年頃に筆写された。冒頭に赤字で Copie du n° 2 と記されている。草稿361a は 8 枚、361b は 35 枚あり、合計 43 枚の用紙で構成されている。

※本資料はパリ国立古文書館に保存されている草稿（Archives nationales F7/4233）のヴァリエーションである。今回の翻刻にあたっては、最新刊の全集（Henri Saint-Simon, *Œuvres complètes*, Presses universitaires de France, 2012）に掲載されている PROJET D'ENCYCLOPÉDIE PAR CLAUDE-HENRI SAINT-SIMON SECOND PROSPECTUS (t. I, pp.599-626) との比較を行った。

翻刻にあたっては、次のような方針をとった。

— 筆記者の書き方を尊重し、固有名詞や文頭であっても小文字の場合は草稿ど

おりとした。

—綴り字記号については、欠落や間違いと思われる箇所があっても草稿どおりとした。

—翻刻文の下線は、筆記者によるものである。

—綴りが明らかに間違っている場合は、sic と記した。

—国立古文書館の草稿と相違している箇所については灰色で表示し、全集の該当箇所を（ ）で示した。大幅な差異の場合は、国立古文書館草稿を元にした上記全集の該当箇所を注で示した。なお、punctuation（句読点等）と大文字・小文字の差異に関しては示していない。

サン＝シモン・コレクション草稿を含む法学部図書館の草稿調査は川又祐教授を中心に計画され、藤原孝、山口正春、トマス・ロックリー、江島泰子が参加して2014-2015年に実施された。この共同研究の成果として草稿がデジタル画像撮影されたことにより、翻刻作業が容易となった。今回、その成果を発表するものである。

La bibliothèque de la faculté de droit de l'université Nihon possède un fonds intitulé «Le Fonds Saint-Simon », composé, entre autres, de manuscrits de Claude-Henri de Saint-Simon ainsi que de ceux de Saint-Simoniens. On peut trouver leur présentation dans le site mentionné ci-dessous:

<https://www.law.nihon-u.ac.jp/library/pdf/345-364.manuscript.catalog.vers.6.pdf>

Le document que nous allons aborder (le numéros 361 du fonds) est composé d'un manuscrit divisé en deux parties : « Second prospectus Introduction » (S-S 361a, 8 pages) et « Projet d'Encyclopédie Second prospectus » (S-S 361b, 35 pages) . D'après le site de présentation, il s'agit d'une copie faite par le secrétaire de Saint-Simon vers 1810. On trouve en tête de la première feuille une mention « Copie du n° 2 » en rouge.

Notre document est une variante du manuscrit conservé aux Archives nationales (F7/4233). Nous l'avons comparé avec le texte PROJET D'ENCYCLOPÉDIE PAR CLAUDE-HENRI SAINT-SIMON SECOND PROSPECTUS édité dans Henri Saint-Simon, *Œuvres complètes*, Presses universitaires de France, 2012, t. I, pp. 599-626.

Lors de la transcription :

- Afin de respecter l'écriture du scripteur, nous avons conservé les minuscules du document pour les noms propres et en début de phrase.
- Nous avons également respecté les signes orthographiques adoptés.
- Les endroits soulignés proviennent du scripteur.
- Les mots qui nous paraissent erronés sont signalés par « sic ».
- Les mots ou expressions différant du manuscrit des Archives nationales (édité dans les *Œuvres complètes* mentionnées ci-dessus) sont ombrés et suivis de ceux-là entre guillemets. Ils sont également ombrés. Lorsque les différences sont considérables et difficiles à signaler de cette manière, nous les mentionnons dans les notes.

Le projet de recherches sur les manuscrits de notre bibliothèque, dont ceux du fonds Saint-Simon, a été entrepris et mené en 2014-2015 par le professeur Hiroshi Kawamata avec la participation de ses collègues, Takashi Fujiwara, Masaharu Yamaguchi, Thomas Lockley et Yasuko Eshima. La numérisation de tous les manuscrits, réalisée grâce à cette étude commune, nous a facilité notre travail de transcription. Nous en publions le résultat.

S-S361a-001

Copie

du n°2

Second Prospectus

introduction (Averstissement)

L'objet de mon travail est de déterminer l'institut imperial de France et la société royale de Londres, à travailler en commun à l'édification d'une nouvelle encyclopedie ¹.

Rappelons-nous l'éducation que nous avons reçue.

On a commencé par fixer notre attention sur l'histoire des Grecs et des Romains : on a enflammé nos jeunes cœurs pour les vertus **republicaines** des Gracques et des Brutus ; on a frappé nos ames encore tendres du poinçon **républicain** (du **républicanisme**). Ce sont les sentiments **les plus** démocratiques qu'on **a cherché à nous inspirer** (nous a **inspirés**).

Quand on nous a fait passer de l'étude des langues anciennes à celle de la langue française : Jean-Jacques, Voltaire, Helvetius, Raynal, **Dalembert** ^[sic], tous les encyclopedistes sans en excepter Diderot qui souhaitait pendre le dernier des Rois avec le boyeau ^[sic] du dernier des prêtres, **sont (ont été)** les auteurs qu'on a mis dans nos mains.

Notre éducation a atteint son but(,) **puisque'elle** nous a rendus révolutionnaires.

Nous avons bien fait de changer la forme de notre gouvernement (Nous **avons bien fait une révolution, et nous avons bien fait**)

puisque nos institutions sociales etaient en arriere de nos lumieres.

Mais aujourd'huy que nous avons porté **(par notre Révolution)** nos institutions au niveau de nos

S-S361a-002

lumieres, nous sommes interessés à la consolider en elevant nos enfants de la maniere la plus convenable pour les faire vivre sous le régime de la monarchie (limitée).

Pour donner cette education à nos enfants, il est necessaire de refondre la masse entiere de nos connaissances scientifiques et litteraires ; c'est à dire

il faut refaire le grand livre ; il faut faire une nouvelle encyclopedie.

L'Encyclopédie du 18^{me} siecle a été ecrite dans un esprit révolutionnaire celle du 19^{me} siecle doit etre redigée dans un esprit absolument opposé ; elle doit être consolidatrice et conservatrice des nouvelles institutions sociales.

Ce sont les hommes qui ont le plus constaté leur capacité scientifique (politique)

ou litteraire auxquels on doit confier le soin d'edifier une nouvelle encyclopedie. C'est par consequent l'institut qui doit former le noyau du nouvel atelier scientifique.

Mais, l'edification d'une (de cette) nouvelle encyclopedie interesse également la

nation anglaise et la nation française, car ces deux nations ont adopté les mêmes principes scientifiques, puisqu'elles suivent toutes deux la doctrine de Bacon qui a pour objet de fonder la science dans son ensemble et dans ses parties sur des observations : car (puisque) ces deux nations ont fondé leurs organisations sociales sur des bases semblables.

D'où je conclus que l'interet commun de la france et de l'angleterre est de charger la société royale de Londres et l'institut imperial de france de travailler en commun à une nouvelle encyclopedie.

L'Encyclopedie du 18^{me} siecle (a été faite dans un esprit bon pour le temps, mauvais pour les circonstances actuelles. Elle) a été construite

d'après un plan

S-S361a-003

proportionné aux lumieres d'alors et très-inferieur à celui que les lumieres acquises depuis **mettent (ont mis)** à portée de **concevoir (découvrir)**.

La division en sciences de mémoire, sciences de raison, **(et)** sciences d'imagination est vicieuse.

(parce que) Chaque science particuliere **exige (exigeant)** **le concours (les concours)** de toutes les facultés de notre intelligence. **ainsi, la (une)** division qui **a partagé (partage)** notre intelligence en trois facultés, **n'a pû [sic] (ne peut)** dans son application scientifique porter que sur des nuances et **elles laissent (qu'elle laisse)** necessairement les differences les plus essentielles entierement confondues.

Par exemple, on peut très bien dire que la botanique exige plus de mémoire que de raison et d'imagination, mais on ne peut pas concevoir **l'existence (d'existence)** d'un botaniste entierement dépourvu de raison et d'imagination.

Le principe d'après lequel on doit **edifier (fonder)** **la nouvelle encyclopedie (l'encyclopédie du XIXe siècle)** est celui que la science dans son ensemble comme dans ses parties doit être basée sur l'observation. **Ce principe, connu depuis longtems puisque Bacon en a été l'inventeur, a été successivement adopté pour toutes les sciences particulieres, mais on n'en a point encore fait application à la science générale, science**

qui se compose de considerations generales sur l'ensemble des sciences particulieres.

(C'est donc) L'analyse de l'histoire des progrès de l'esprit humain (qui) doit servir de base à l'Encyclopedie ; c'est cette analyse qui doit

S-S361a-004

fournir la division du (de ce) grand livre de la science.

Les effets produits par les sciences sont surs mais ils sont lents, aussi, peu de personnes s'y interessent et j'aurai peu d'esperance de voir executer de mon vivant le projet d'encyclopedie que j'ai conçu si le seul motif determinant etait celui de faire faire (faire) des progrès aux connaissances humaines, mais ce projet peut être envisagé d'un (sous un) autre point de vue, il peut et doit être consideré comme un moyen de rapprochement entre les gouvernements, entre les peuples anglais et français².

(Oui,) Je predis, (et je montrerai cette prediction dans le cours de mon ouvrage)³ qu'avant un an à dater du jour que l'institut imperial de france et la société royale de Londres se concerteront pour travailler ensemble (en commun) à (l'édification d') une nouvelle encyclopedie, une paix durable sera faite entre la France et l'Angleterre.

C'est en forgeant qu'on devient forgeron, depuis peu de jours, d'aujourd'hui seulement, je vois clairement la marche que je dois suivre ; j'avais jusqu'à present mal dirigé mes efforts ; je m'étais principalement occupé d'éclaircir les idées qui me paraissaient devoir (devaient) entrer dans le discours preliminaire de la future encyclopedie

et j'avais provoqué la discussion sur quelques unes d'elles.

Que m'est-il arrivé ? Les personnes qui se sont occupées de mes idées n'avaient pas l'instruction suffisante pour les comprendre et pour les juger (de force à les comprendre) ; de manière que leurs (les) observations (qu'elles sont produites) n'ont point

S-S361a-005

fourni (été suffisantes pour fournir) matière à une discussion, et les personnes en état d'alimenter cette discussion d'en utiliser les résultats ne s'en sont point occupées (de les comprendre n'y ont pas fait d'objection).

Les seules personnes en état de juger le discours préliminaire de la future encyclopédie (de les comprendre), sont les savants adonnés à la culture des sciences exactes (positives). Chacun d'eux s'est attaché (adonné) à une des branches de la science positive (directions particulières de la science physiques), aucun d'eux ne s'élève à des considérations générales sur les sciences physiques et mathématiques. aucun d'eux en un mot ne cultive la science générale positive et par conséquent, aucun d'eux n'a pris, ni n'a dû prendre d'intérêt (ne prend un intérêt) à mes travaux.

Pour changer cet état des choses il faudrait (faudra) déterminer les savants à travailler à une nouvelle encyclopédie. Ce travail une fois établi, tous les savants composeraient un jury qui examinerait avec ardeur les plans qui lui seraient proposés c'est à dire, les discours préliminaires qui lui seraient soumis.

J'ai donc appris par l'expérience et je me suis

convaincu par le raisonnement que tous mes efforts devaient (doivent) tendre

à déterminer la réunion des savants anglais et français pour travailler (en commun) à (un mot raruré) une nouvelle encyclopedie.

Que de solides et excellentes raisons j'ai à faire valoir !

Par quel moyen un prince francais ou anglais obtiendrait-il une gloire superieure ou même égale à celle dont brillerait celui qui determinerait les savants anglais et français à

S-S361a-006

travailler en commun à une encyclopédie, sous sa protection ?

Par quel moyen les savants anglais et français obtiendraient-il une consideration égale à celle qui resulterait pour eux d'un travail scientifique general fait en commun ?

Par quel moyen les gouvernements francais et anglais pourraient-ils assurer plus complètement [sic] leur existence que par un travail scientifique fait en commun par les hommes les plus savants des deux nations ; ce travail (et) ayant pour objet de consolider les deux gouvernements ?

Par quel moyen les Proprietaires français et anglais (anglais et français)

pourraient-ils mieux assurer la libre jouissance de leur fortune

que par un travail scientifique dans lequel il serait démontré

clairement (et vigrousement) que les principes democratiques qui sont fondés sur

l'idée de la loi agraire, ne sont autre chose que des (n'ont d'autre valeur que celle de) principes

revolutionnaires

Par quel moyen le peuples anglais et français pourraient-ils donner une base plus solide à leur liberté (un mot biffé) individuelle que par un travail scientifique fait en commun par les savants les plus marquants de France et d'Angleterre (anglais et français), travail (et) ayant pour objet (but) d'établir les principes de la liberté individuelle (cette liberté scientifiquement, c'est-à-dire de l'ériger en principe moral qui joue le rôle principal dans l'enseignement de la société) ?

Tous les peuples du globe sont intéressés au succès de mon entreprise, car la découverte de la combinaison politique

S-S361a-007

qui pourrait concilier les intérêts des Français et des Anglais est la seule chose qui leur soit favorable. Les Français et les Anglais se partagent le monde et l'humanité entière gemira sous l'oppression tant que ces deux peuples géants seront en guerre.

J'ai vu le mal, j'ai vu le remède. Le mal est qu'en France et en Angleterre la théorie et la pratique sont en opposition. Les gouvernements anglais et français sont monarchiques, et on élève les Français et les Anglais dans les principes démocratiques.

Le remède consiste à concilier en France et en Angleterre la théorie avec la pratique, il consiste à élever les citoyens de la manière la plus convenable pour les faire vivre heureux sous le gouvernement monarchique.

Pour donner cette éducation aux Français et aux Anglais, il faut refaire les livres anglais et français ; il faut commencer

par refaire le grand livre qui est l'encyclopedie et ce sont incontestablement les savants les plus marquants de france et d'angleterre qui doivent travailler en commun à l'edification d'une nouvelle encyclopedie.

Ma conviction de la justesse de l'idée générale que je poursuis est entiere. Je poursuivrai ce travail ; c'est-à-dire, je ferai paraitre de nouveaux prospectus ou plutot je

S-S361a-008

continuerai ce prospectus jusqu'à ce point auquel je serai parvenu à determiner l'institut imperial de france et la société royale de Londres à travailler en commun à une nouvelle encyclopedie⁴.

S-S361b-001

Projet d'Encyclopédie

par C-H S Simon

Second Prospectus

Première partie

Les grandes pensées sont le résultat des grandes fermentations morales, ainsi les révolutions scientifiques suivent (ont toujours suivi) de près les revolutions politiques. La decouverte de l'algebre, celles des premiers principes de la chimie et de la physiologie, ont eu lieu

sous les califes qui ont succédé à mahomet [sic] .

Le novum organum, le doute methodique, (le système des tourbillons,) l'application de l'algebre à la géometrie, sont des travaux que l'esprit humain produisit peu de tems après que Luther eut soustrait la moitié de l'Europe à la puissance Papale.

La tourmente revolutionnaire n'était pas encore finie en

S-S361b-002

angleterre quand Newton fit la decouverte de la gravitation universelle quand Locke publia ses essais sur l'entendement humain.

La chute de la dynastie des Bourbons, (quelques mots biffé) (quelques mots biffés) l'exaltation de la brillante dynastie des Bonaparte, la formation des corps representatifs, sont de grands événements (politiques,) qui seront nécessairement suivis de grandes decouvertes scientifiques.

Les trois principales conceptions scientifiques, sont la conception Encyclopédique, la conception du système système [sic] du monde et celle de la methode.

L'ecole française, sous ces trois rapports, n'a produit jusqu'à ce jour (aujourd'hui)

que des commentateurs de Bacon, de Locke et de Newton. + mais elles

+ J'entreprends de rendre l'initiative (scientifique)

à l'ecole francaise. Je presente

une nouvelle conception

encyclopedique, un nouveau

système [sic] du monde et une

nouvelle methode. Mes
idées ne sont point en
opposition avec celles de
Bacon, de Locke et de Newton,

sont des perfectionnements importants des decouvertes faites par ces
grands hommes.

Bacon

C'est Bacon qui a fondé la science generale positive, de même que
Moïse avait fondé la science sacerdotale et superstitieuse. La superiorité de
Bacon sur Moïse a été constatée (démontrée) par l'experience, les deux
peuples qui ont
adopté (suivi) sa doctrine se sont élevés infiniment au-dessus du reste de
l'humanité. Les anglais, les français, par la force de leurs armes,
par la justesse de leurs combinaisons politiques et militaires, ont
soumis tous les habitants de l'univers, de maniere qu'aujourd'huy
sur le globe, il n'existe que deux forces nationales virtuelles,
La force française et la force anglaise.

S-S361b-003

Les anglais, les français, sont aussi superieurs aux autres peuples
par leur politique interieure que par leur politique exterieure. Ces deux
nations ont les meilleures constitutions, ou plutot elles sont les seules qui
jouissent du bienfait d'une constitution. Si on compare les anglais
et les français à tous les autres peuples de la terre, on trouvera qu'ils

ont obtenu en bonheur national une superiorité positive. Leurs deux corps scientifiques sont superieurs à tous les autres corps scientifiques nationaux; leur premiere classe politique, je veux dire leurs grands propriétaires et leurs grands fonctionnaires, ont plus d'instruction et de libéralité que chez aucun autre peuple (les autres peuples). le

bonheur physique et les lumieres courantes se sont repandus d'avantage [sic] sur leurs non-propriétaires que sur les autres non-propriétaires du globe. La france et l'angleterre sont les deux pays dans lesquels la masse de la population est le mieux logée, le mieux vetue et le mieux nourrie. C'est dans ces deux pays, proportion gardée de la population, qu'on trouve le plus grand nombre d'hommes sachant lire, écrire et compter.

(un mot biffé) jusqu'en 1789, les anglais nous ont été superieurs en doctrine Baconiste sous tous les rapports, superieurs en application comme en théorie, superieurs en physique et en mathematiques, comme en morale et en politique; mais depuis cette époque, les choses ont bien changé de face, examinons ce qui

S-S361b-004

s'est passé depuis 1789. mettons en parallele [sic] notre conduite avec celle des anglais.

Conduite des anglais depuis 1789

Bacon aurait tenu le langage suivant à ses compatriotes, s'il etait sorti de son tombeau (fût sorti de la tombe) en 1789.

« Perfectionnez la théorie et la pratique de la science générale
« positive, remplacez la doctrine précaire et superstitieuse que vous
appelez
« religion, par une doctrine basée sur l'observation, cessez de promettre
« aux hommes, le bonheur dans une autre vie ; indiquez-leur le moyen
« de le trouver dans celle-ci. mettez en évidence cette grande vérité,
« que tout homme (l'homme) qui emploie ses forces dans une direction utile
au
« bien public, + obtient tout le bonheur possible dans tous les ages de

+ que celui qui
contribue au bonheur
public, en remplissant
les devoirs de son état,

« la vie. »

Réforme parlementaire

« Procédez sur le champ à votre reforme parlementaire, aneantissez
« vos bourgs-pourris. Faites disparaître l'action populaciere qui s'exerce
« dans vos élections [sic] , rendez votre representation proportionnée à la
« population, à l'industrie et à la richesse de chaque partie de
« votre territoire, que les électeurs [sic] soient composés de deux classes,
« d'une part, les propriétaires fonciers et commerciaux et d'une
« autre part, des non-propriétaires qui se distinguent par leurs
« talents dans les sciences, dans les arts, ou dans l'industrie.
« que personne ne puisse être élu membre du parlement sans

S-S361b-005

« jouir d'une fortune d'au moins 1 000 sterling de revenu.(1)»

Pouvoir Royal

« Donnez beaucoup d'accroissement à votre pouvoir royal, vous
 « avez tort de craindre son action, les digues que vous lui opposez,
 « compliquent votre machine politique, entravent et ralentissent la marche
 du
 « gouvernement, vous exposent à des cassements de vitres et à d'autres
 « mouvements brutaux de vos non-propriétaires ignorants. une seule
 barriere
 « est suffisante pour contenir le pouvoir royal dans les limites qu'il ne
 « pourrait franchir sans inconvenient pour l'ordre social. cette barriere
 « consiste dans la formation d'une conception claire de la maniere dont on
 « doit considérer la royauté, dans la faculté generalement repandue
 « dans la classe gouvernante de la nation, d'envisager la royauté
 « sous deux faces différentes. »

Royauté passive

« La royauté passive se compose de la liste civile, des honneurs

(1) Cette admirable pensée politique a été trouvée par l'Empereur napoléon qui l'a donnée pour base à la constitution de son royaume d'Italie. Cette imperissable decouverte doit être considérée comme la solution du **plus important** problème **(le plus important en)** politique. Une pareille base constitutionnelle [sic] met à

tout jamais un peuple à l'abri d'une révolution, en lui assurant de posséder toujours le meilleur ordre social possible, la classe des gouvernants se composant nécessairement toujours d'après cette disposition constitutionnelle [sic] , des hommes les plus instruits, et même de tous les hommes instruits.

S-S361b-006

« rendus à la personne du roi et de son inviolabilité. Cette royauté
« doit être héréditaire; si elle était elective, l'ambition des gens
« médiocres qui forment toujours la majorité, serait continuellement
« stimulée par le desir d'obtenir de tels avantages qui, par la
« nature des choses, sont les seuls qu'ils soient en etat d'apprécier. »

Royauté active

« La Royauté active doit toujours être elective, j'appelle [sic]
« royauté active l'action gouvernante de la royauté. Vous etes
« déjà habitués à elire votre roi actif, c'est à dire votre premier
« ministre. Votre nomination, pour être indirecte, n'en est pas
« moins positive, puisque vous ne votez l'impot qu'autant que
« le Roi fait choix pour premier ministre, de l'homme qui vous
« parait le plus capable de (vous) gouverner ; puisque par le même
moyen, vous forcez le roi à changer de ministre toutes les
fois que cela vous convient. »

Observation

« Il y a la chance que le roi hereditaire se trouve en
« même temps etre le roi actif. cela arrivera quand l'heritier du

« trone sera l'homme d'angleterre le plus capable de gouverner.
 « (une ligne biffée)
 « (une ligne biffée)
 « (une demi-ligne biffée) En pareil cas, defiez-vous du
 « mecontentement que témoigneront les hommes qui meriteront
 « le plus votre estime par leur capacité. Ces hommes

S-S361b-007

« tomberont dans une espece de melancolie qui sera causée
 « par la privation de l'espoir d'etre élus à la royauté active.
 (un mot biffé) Sachez jouir des avantages que vous procurera la (cette)
 « concentration des forces royales qui se manifestera d'une
 « maniere precieuse pour vous, (un mot biffé) en donnant un grand
 « accroissement à votre preponderance sur l'humanité. Cette
 « circonstance etant la seule dans laquelle votre politique
 « exterieure puisse être dirigée avec toute l'énergie necessaire
 « à votre gloire. »

Reclamation des catholiques irlandais

« La reclamation des catholiques irlandais doit vous ouvrir
 « les yeux sur les dangers auxquels votre liberté est exposée.
 « L'équilibre entre les pouvoirs est la seule garantie que puisse avoir
 « la liberté d'un peuple. La grande division du pouvoir politique est
 « celle du pouvoir spirituel et du pouvoir temporel. Ces deux forces
 « doivent être distinctes, elles doivent être virtuelles, elles doivent se
 « balancer. Le pouvoir spirituel et le pouvoir temporel sont entre

« les mains de votre roi; cet etat de choses est monstrueux, il ne
« peut pas durer. votre affaire politique la plus importante est
« de le faire cesser. voici la maniere de rétablir l'équilibre entre
« ces deux forces. voilà l'organisation qu'il faut donner à votre
« pouvoir spirituel. »

« Tous vos savants qui cultivent les sciences positives
doivent être réunis en **corps (atelier)** pour travailler à la confection d'une

S-S361b-008

« Encyclopédie. cette Encyclopédie doit fonder la doctrine générale
« et les doctrines particulieres pour **(chacune des) toutes les** classes de la
société.

« Votre clergé doit se composer de deux classes, **(d'une) la** classe
« perfectionnante et **(d'une) la** classe enseignante. La classe perfectionnante
« doit **travailler (s'occuper)** toujours à ameliorer la theorie de la science
générale,

« la classe enseignante doit s'occuper de répandre sur toutes les
« classes les lumieres acquises, dans la proportion que les
« travaux et l'éducation de chacune d'elles comporte [sic] . Pour rendre
« votre clergé independant du roi, il est necessaire que vous
« fournissiez à ses besoins par des contributions volontaires.
« Pour le rendre le plus heureux possible et le plus utile possible
« pour vous, il faut imposer à ses membres : 1.° l'obligation de
« ne se point marier. 2.° celle de ne posseder aucune propriété
« territoriale ni commerciale, et même de renoncer à tout heritage. »

Vous avez jusqu'à present, pris des principes de
« circonstance pour des principes generaux. La grande affaire

« de l'humanité était de renverser la doctrine superstitieuse et de
 « la remplacer par une doctrine basée sur des observations.
 « La tolérance était un principe fort bon pour favoriser l'action des
 « physiciens contre les théologiens. Aujourd'hui que la théologie est
 « renversée, la tolérance [sic] ne vaut plus rien. Le bien général
 « exige qu'il y ait concentration dans la croyance en la nouvelle
 « doctrine et que toutes les forces politiques concourent à sa
 « meilleure organisation et à sa plus prompte vulgarisation. »

Politique extérieure

« En politique extérieure, votre but doit être de faire adopter

S-S361b-009

« votre doctrine scientifique (politique) et vos institutions politiques
 (scientifiques) à tous les peuples
 « du globe. Les français qui déjà ont adopté votre doctrine scientifique (, les
 Français, dont l'École,
 « puisque leur école de même que la vôtre, professe que la science, dans
 « son ensemble comme (et) dans ses parties, doit être fondée (basée) sur
 l'observation.
 « Les français, dis-je, manifestent l'intention de se donner une organisation
 « nationale semblable à la vôtre. Proposez aux français :
 « 1.° De réunir en un seul corps, les savants des deux nations. »
 « 2.° De charger ce corps d'organiser la doctrine positive,
 « c'est à dire, de baser la science générale vulgairement appelée [sic]
 Religion,

« sur des observations. »

«3.° De rendre ce corps permanent ; de lui donner le titre
« de clergé anglo-français et de déclarer que ce clergé, c'est à dire,
« que cette église represente Dieu sur (la) terre et que ses décisions sont
« des décisions Divines.»

«4.° De diviser ce clergé en deux classes, la premiere chargée
« de perfectionner, et la seconde d'enseigner. »

Proposez encore aux français, sous le rapport de la
« politique temporelle, de faire avec eux une alliance offensive et
« deffective [sic] , ayant pour but de faire adopter votre doctrine scientifique
« et vos institutions politiques à tous les peuples du globe.

Ce qui est arrivé

Bacon n'est pas (point) sorti de sa tombe. aucun anglais ne
s'est élevé à des considérations politiques generales, aucun d'eux
n'avait suffisamment étudié la serie des progrès de l'esprit humain

S-S361b-010

pour prévoir (avoir prévu) la crise politique et religieuse que l'ascendant
politique

scientifique pris par les Laïcs sur les eclesiastiques [sic] et que la
degradation des mœurs du clergé devaient inevitablement déterminer.

Aucun d'eux ne s'était rendu capable d'adoucir, d'abreger, de terminer
cette crise en reorganisant le pouvoir spirituel, en composant le clergé
des hommes les plus instruits dans les sciences positives; en
instituant des seminaires où l'enseignement fût dans son ensemble

comme dans ses parties basé sur l'observation ; en imprimant à la discipline collégiale une grande severité de mœurs, en donnant aux Catechumenes des professeurs capables de les enthousiasmer pour l'abnegation d'eux-mêmes, pour le mépris de la fortune et des jouissances directes, des professeurs capables de demontrer rigoureusement à leurs eleves que le mepris de la fortune et des jouissances directes, est le seul (où la discipline collégiale fût de la plus grande sévérité pour les mœurs ; où les professeurs inspirassent aux catéchumènes la passion de l'abnégation d'eux-mêmes, du mépris de la fortune et des jouissances des sens comme étant le) moyen dans la ([la]) direction scientifique ou clericale, d'obtenir le plus haut degré [sic] de considération et de bonheur.

En 1789, la tête politique la plus forte en angleterre etait (trois mots biffés) celle de m. Pitt.

M. Pitt

M. Pitt etait très jeune en 1789 et cependant il avait déjà obtenu la confiance de la nation. La royauté active etait déposée dans (entre) ses mains depuis plusieurs années quand la revolution française est arrivée. a commencé (est arrivée). Ce chef des anglais possedait une grande capacité dans toutes les directions politiques secondaires. personne ne connaissait

S-S361b-011

mieux que lui les différentes manieres (la manière) de diriger et de combiner les (différentes)

actions de la banque, de la compagnie des Indes, des douanes (de la douane) et de

l'assise de l'impôt. C'était, en un mot, un grand administrateur et un grand ministre des finances; mais ce n'était pas un grand politique, il ne se doutait pas que l'humanité fut arrivée à une époque climaterique, il n'avait même aucune idée nette des relations politiques **existantes** à cette époque (existant) entre les puissances continentales. (1)

M. Pitt d'après sa capacité administrative et son incapacité en politique extérieure et en connaissance de la marche de l'esprit humain fit nécessairement [sic] la combinaison suivante :

« Les français entrent en révolution, la crise politique dans laquelle ils s'engagent, leur fera nécessairement [sic] négliger l'industrie et le commerce. C'est

« une circonstance dont il faut profiter pour étendre l'industrie et le commerce

« de l'Angleterre. »

D'après cette combinaison, M. Pitt s'occupa : d'une part, de agir sourdement **au moyen de ses agents secrets en France, pour** augmenter la crise révolutionnaire (**au moyen de ses agents secrets en France**) ; et d'une autre part, d'activer le plus possible l'industrie et le commerce de l'Angleterre.

(1) Le fait de l'ignorance de **Mr. (M.)** Pitt sur les forces militaires et **sur** les relations politiques des différents [sic] états de l'Europe, m'a été attesté par M. George Elis qui était un de ses amis les plus intimes et que j'ai vu très souvent à Paris chez madame.***, lorsqu'il fut envoyé en France avec Lord Malmesbury.

S-S361b-012

M. de Taleyrand [sic] , qui etait le français le plus capable en Politique, passa en angleterre pour presenter à M. Pitt quelques idées de politique générale, et pour lui faire sentir qu'il etait de (que) l'interet des anglais (était) de seconder le desir que les français avaient (manifestaient) d'établir chez eux les institutions politiques anglaises.

M. Pitt fut sourd aux communications de M de Taleyrand [sic] ecrites ou faites par intermédiaire d'amis ; il refusa de le voir, il ne changea rien à son système [sic] jusqu'à la catastrophe de Louis XVI.

Quand Louis XVI eut perdu la vie, quand l'Autriche eut serieusement declaré la guerre à la france, M. Pitt imprima (donna) à son système [sic] un caractère d'activité. De (Dès) ce moment, il conçut le projet d'ecraser, d'anéantir la nation francaise. Il envoya des emissaires sur le continent pour coaliser toutes les nations européennes (de l'Europe) contre la france. Il se fit le chef d'une premiere coalition qui échoua et d'une seconde (deuxième) qui n'eut pas plus de succès.

Deux opinions politiques du plus haut degré [sic] d'importance ont été émises dans le parlement d'angleterre sous le ministère de M. Pitt. L'une a été produite par M. Burke et l'autre par (un mot biffé) le Docteur Horne-Tooke.

Burke

M. Burke après avoir longuement parlé et volumineusement écrit sur la revolution française, s'est résumé en disant : Les français « ont assassiné leur Roi, ils ont laissé prendre le dessus à la classe des

S-S361b-013

« non-propriétaires, entre les mains desquels le gouvernement se « trouve aujourd'hui et qui ont choisi pour chef Robespierre le « plus incapable et le plus atroce de tous les hommes. Les français ont « passé au travers de la (un mot biffé) liberté, ils marchent directement à (vers) « leur ruine, bientôt la France n'existera plus; déjà j'ai de la « peine à l'apercevoir sur la carte de L'Europe. »

Le ministère anglais ainsi que la majorité du parlement ont approuvé l'opinion de M. Burke, le peu de personnes qui l'ont combattue ne l'ont point réfutée (réfutée ne l'ont point fait) d'une manière convenable. Le défaut de réfutation de l'opinion de M. Burke a constaté à la fois l'incapacité de M. Pitt et (celle) de la nation anglaise en haute politique.

S'il s'était trouvé un seul anglais capable de traiter cette question de politique générale, il aurait répondu à M. Pitt Burke : « Burke, tu te laisses aller à ton brutal desir de voir anéantir « la nation française. Tu as perdu de vue l'histoire de notre revolution, « tes raisonnements ne sont point (pas) basés sur l'observation; ils sont ceux « d'une tête légère et il serait honteux à la nation de les écouter « et de les suivre. Lis attentivement l'histoire de notre revolution, « tu y trouveras l'assassinat de Charles I^{er}, la longue et atroce

« existence des niveleurs et la tyrannie de Cromwell. Tous
 « ces desordres nous ont-ils fait manquer le but qu'on s'était
 proposé, celui de la liberté. »

Horne-Tooke (Hornetooke)

Le Docteur Horne-Tooke (Hornetooke) a fait ses efforts (un mot biffé) :

S-S361b-014

1.° pour déterminer la nation anglaise à procéder à sa
 réforme parlementaire.

2° pour lui inspirer le désir de diminuer le pouvoir
 Royal et d'accroître [sic] celui du parlement.

Les efforts d'Horne-Tooke (Hornetooke) ont été sans effet ; mais la
 résistance qui lui a été (qu'on lui a) opposée a été sourde, astucieuse et
 ignoble.

Aucun ministre (Ni les ministres) ni aucun membre du parlement ni aucun
 habitant

des trois royaumes n'a osé croiser le fer politique avec lui.

Si j'avais été anglais, j'aurais répondu à Horne-Tooke (Hornetooke) :

« Les institutions republicaines ont été les premières que
 « l'humanité ait établies, elles ont été le produit de l'intelligence
 « de son premier âge. Nous devons l'institution monarchique
 « aux progrès des lumières et à l'avancement en âge de l'espèce.
 « Vos efforts pour nous républicaniser tendent à nous faire retrograder.
 « Ils ne peuvent avoir aucun succès durable et ils nuiraient (nuiront)
 « nécessairement au bonheur de la génération présente. »

«Les organisations nationales n'ont jamais pu être que
« des organisations secondaires. L'organisation générale, que vous
« pouvez appeller [sic] indifferemment scientifique ou religieuse, est celle
« qu'il faut étudier, qu'il faut avoir étudiée pendant longtemps, pour
« acquérir le droit de parler à ses compatriotes des bases sur
« lesquelles ils doivent fonder leur constitution. »

« Les republics les plus celebres telles que celles
« de Sparte, d'Athenes (d'Athènes,
de Sparte), de Rome et de Carthage, florissaient (ont eu lieu)

SS361b-015

« du tems du polythéisme [sic] . Depuis l'établissement du Déisme,
« les peuples qui ont joué le premier role ont vécu sous le
« gouvernement monarchique de plus en plus perfectionné. »

Mort de M. Pitt

Les chutes morales ne sont pas moins dangereuses que les
chutes physiques. La demonstration que l'amerique n'existait pas
aurait (nécessairement) tué Christophe Colomb. M. Pitt est mort à l'instant
qu'il
lui a été prouvé que le systême [sic] politique qu'il avait fait adopter
à sa nation ne valait rien.

La mort de M. Pitt a été honorable aux Chatams,
sous le rapport qu'elle a constaté la superiorité de M. Pitt sur
tous ses compatriotes, puisqu'il a été la victime choisie par le
grand ordre des choses pour remettre la verité en évidence, et
qu'il a été foudroyée [sic] par l'erreur qu'il avait lancée.

Ministres qui ont succédé à M. Pitt

L'inferiorité des successeurs de M. Pitt est évidemment constatée par le fait, qu'ils ont suivi et qu'ils continuent à suivre la même direction (que lui – direction) dont les inconvenients avaient été si clairement démontrés à ce grand Chatam, qu'il en avait été tué roide et qu'il était (est) mort au champ politique d'honneur.

Les successeurs de M. Pitt ne se sont pas bornés à exploiter ses erreurs, ils les ont successivement augmentées, (exagérées.) ils sont tombés dans une direction politique de plus en plus mauvaise,

S-S361b-016

ils sont arrivés à une direction politique absurde.

La bonne direction politique pour les individus comme pour les nations, consiste à favoriser interieurement et exterieurement les progrès des lumieres.

Les anglais suivent aujourd'huy la direction opposée , ils ont épousé la cause des Espagnols, le peuple le plus ignorant et le plus superstitieux de l'Europe. Ils se sont ligüés avec les negres de S^t Domingue, c'est à dire, avec la derniere variété de l'espece humaine, avec l'animal qu'on peut regarder comme l'intermediaire entre l'Européen et le Singe pour massacrer les français qui se trouvaient dans cette colonie, la plus belle, la plus riche et la plus civilisée des colonies Européennes du globe. Le contraste de la conduite des anglais et des français est bien frappant dans ce moment.

En Espagne, en Italie, dans toute l'Europe, les français portent des idées libérales. Chez tous les peuples qu'ils ont conquis, ils ont aboli la féodalité; ils ont renversé la doctrine superstitieuse ou **du moins (au moins)** ils ont diminué son influence ; ils ont organisé des monarchies limitées par le pouvoir national constitué. Tandis qu'on voit en Espagne les armées anglaises jouer le rôle de troupes auxiliaires de la phalange monacale.

Ce que les anglais devraient faire

Les anglais devraient proposer aux français une alliance offensive et deffensive [sic] ayant pour objet d'anéantir la

S-S361b-017

doctrine superstitieuse sur le globe, de la remplacer par une doctrine basée sur les observations, de renverser tous les gouvernements despotiques ou republicains et d'établir partout des monarchies limitées. Ils devraient sur le champ donner (1') ordre à leurs généraux en Espagne de se réunir aux troupes du grand Napoléon ; ils devraient concerter avec lui une expedition contre St Domingue ayant pour but d'exterminer jusqu'au dernier des nègres qui ont osé porter la main sur les blancs.

Ce qui arrivera aux anglais

Incessamment, les anglais renverseront leur gouvernement, ils amelioreront leur Religion et leur constitution.

La dette est devenue si enorme que la banqueroute du tresor public en angleterre est inevitable. Le pressentiment de cette banqueroute determine un grand nombre d'anglais, surtout les cultivateurs, à enfouir le numeraire metallique, ce qui discredite le papier monnaie dont le discredit par la nature des choses doit toujours aller en augmentant.

La cessation du commerce des anglais avec le continent fait languir les branches les plus interessantes et les plus importantes de leur industrie. L'avantage qu'ils ont acquis de faire exclusivement le commerce avec l'Asie l'affrique [sic] et l'Amérique est une compensation très insuffisante pour eux de l'avantage dont ils jouissaient dans leur commerce avec l'Europe.

S-S361b-018

Chaque jour, ils acquerront de plus en plus la certitude que leur gouvernement leur en impose en leur disant que leurs importations augmentent, que le (leur) commerce s'ameliore. Il est possible qu'il y ait eu cette année des envois très considérables de marchandises en amerique. Mais ces envois auront nécessairement [sic] (ont certainement) depasse [sic] de beaucoup la consommation de ce pays. Il est un principe certain parce qu'il est basé (puisque il est fondé) sur l'observation : c'est que les peuples consomment des objets manufacturés à proportion de leur degré [sic] de civilisation. Sur tout le globe, le peuple le plus consommateur est le peuple anglais qui est incontestablement le peuple le plus civilisé, c'est à dire le

peuple le plus éclairé et le mieux organisé. Après le peuple anglais, c'est le peuple français qui **consomme le plus (est le plus consommateur)**; après le peuple français, c'est le peuple allemand ; après le peuple allemand, le peuple italien, &cet. L'Europe à elle seule consomme plus que tout le reste du globe dans une proportion que je n'essayerai pas de (un mot biffé) fixer ; mais qui est très-considérable. L'Asie et l'affrique [sic] ne consomment presque rien, et si la consommation de l'amerique est plus grande, c'est parce qu'il s'y trouve un plus grand nombre d'Européens qu'en asie et en affrique [sic] ; mais ce nombre (**d'Européens**) est bien petit en comparaison de celui qui existe en Europe. La banqueroute du tresor public est inévitable (**en Angleterre,**) comme je l'ai dit au commencement de cet article. Le gouvernement ne se sentant pas assez fort pour la faire ; le gouvernement

S-S361b-019

sentant qu'il sera necessairement renversé par cette banqueroute, la retarde le plus possible. Pour la retarder, il dit que le commerce va bien; que la dette peut s'éteindre et que la banque pourra reprendre ses paiements en argent, &cet. La dette augmente tous les jours, le commerce diminue tous les jours, le discredit du papier s'accroît sans interruption. Voila les observations materielles sur lesquelles je fonde le pronostic d'une prochaine **revolution en angleterre (banqueroute)**.

Conduite des français depuis 1789

Pour expliquer d'une maniere claire, precise, completement satisfaisante, la conduite des francais depuis 1789, il est necessaire

de remonter jusqu'à cette époque memorable à laquelle Galilée [sic] (pour avoir démontré que la terre tournait sur son axe et qu'elle avait un mouvement de translation autour du Soleil) fut cité par le tribunal de l'inquisition à comparaitre devant lui pour entendre lecture du jugement par lequel ce tribunal prétendu scientifique, le condamnait à **retracter** (réfuter) ses démonstrations astronomiques, comme étant en opposition avec les saintes écritures. Jugement dont l'absurdité mit en évidence cette grande et importante vérité que les écritures appelées [sic] saintes, que les idées révélées, **n'étaient (ne sont)** que des écritures, que des idées superstitieuses, que des instruments dont le clergé se servait pour arrêter le progrès des sciences, pour retenir les peuples et les Rois dans **(l'ignorance et)** l'esclavage l'esclavage. Je me trouve **(forcé)**

S-S361b-020

par la raison que je viens de dire, **forcé de (à)** diviser cet article en deux parties, en examen **(direct)** préliminaire et en examen direct.

Examen préliminaire

Bacon fut l'avocat de Galilée, il défendit [sic] à la fois la cause de ce physicien, de tous les savants, de tous les peuples et de tous les Rois; il fut en un mot, l'avocat de l'humanité contre le clergé. Bacon dans son novum organum démontra qu'il fallait refaire la science, qu'il fallait en exclure entièrement les idées révélées, qu'il fallait la baser dans son ensemble comme dans toutes ses parties sur des observations, qu'il fallait, en un mot, renverser de fond en comble la théorie

sacerdotale pour établir une doctrine positive.

Peu de tems après la publication du novum organum Descartes fit paraitre son système [sic] des tourbillons; système [sic] admirable sous ce rapport, qu'aucune idée revelée n'est entrée dans sa composition. Système [sic] admirable sous cet autre rapport, que son auteur a fixé d'une maniere invariable le point de vue auquel doit se placer le genie organisateur qui entreprend le plan de l'edifice scientifique général. Donnez-moi, disait Descartes, de la matiere et du mouvement et je (vous) ferai un monde.

Ce système [sic] admirable sous les rapports que je viens d'indiquer est pitoyable, sous celui d'avoir manqué le but fixé par Bacon ; celui de baser l'ensemble et toutes les parties de la science sur des observations. mais ce n'est point à Descartes que l'humanité doit faire ce reproche ; c'est au grand ordre des

S-S361b-021

choses qui a soumis les individus et l'humanité même à ne marcher que lentement dans la carriere scientifique. On est aujourd'huy vis à vis de Descartes d'une injustice atroce, on considère son ouvrage comme un resumé d'observations, tandis qu'on devrait **le regarder** (**l'envisager**) comme

l'aperçu astronomique qui a servi de guide à Newton pour decouvrir la loi de la gravitation. Toutes les tetes fortes, tous les hommes instruits, se sont ralliés à l'etendard planté par Bacon ; ils ont adopté sa theorie, ils ont travaillé à la perfectionner, et on a vu depuis cette époque le clergé qui jadis etait le corps le plus

savant, (qui, jadis, était) le seul corps savant, être dépassé en science par les Laïcs.

On a vu les (des) laïcs former des academies qui tous les jours s'illustraient par d'importantes decouvertes dans les sciences positives (en science positive). On a vu le clergé descendre successivement dans les plus basses régions de la théologie et retourner moralement vers les siecles d'ignorance auxquels les vertueux S^{ts} peres allaient reflechir dans le Desert, n'ayant point d'idée assez claire et assez nette de l'unité systématique [sic] pour en conserver le fil au milieu des distractions et des amusements de la société.

Au commencement du 18^{me} siecle, Bayle fit un dictionnaire dans chaque article duquel il mit en comparaison les opinions des theologiens et celles des Physiciens (physiciens) . Bayle demonstra rigoureusement (aux hommes de seconde ligne par leur organisation et par leur instruction) que les sciences physiques etaient infiniment préférables aux sciences

S-S361b-022

theologiques.

Voltaire esprit moins profond que Bayle ; mais pourvu de plus de grace, de finesse et de talent, fit une étude particuliere des demonstrations de cet auteur, et par ses volumineux et piquants ecrits, il les mit à la portée des hommes de la cour et de toute la nombreuse et puissante classe des desœuvrés.

Dalembert [sic] et Diderot vinrent à bout de determiner tous

les savants **les plus marquants** de france à travailler à une Encyclopédie. Leur projet etait de faire un livre qui pût remplacer la Genese et qui lui fut [sic] très-superieur sous le rapport des details scientifiques, comme sous celui des vues générales et de la conception systematique. L'ouvrage dirigé par Dalember[t] [sic] et Diderot n'a que très-incompletement organisé la doctrine positive ; mais il a completement anéanti la doctrine superstitieuse.

Un événement politique du plus haut degré [sic] d'importance a **suivi (succédé)** presque'immédiatement **les travaux de Diderot et de Dalember[t] [sic] (aux travaux de d'Alembert et de Diderot)** ; La création morale de l'amerique.

Les anglais etablis dans l'amerique du Nord, ont secoué le joug de la mere patrie ; ils se sont declarés indépendants; ils ont basé leur organisation sociale sur des raisonnements. Les travaux legislatifs des americains ont enflammé les Européens et **surtout (particulièrement)** les français, du desir de secouer le joug de la superstition, et de renverser toutes les institutions sacerdotales ou temporelles qui en

S-S361a-023

etaient emanées, pour se donner une nouvelle organisation sociale entierement basée sur le raisonnement.

Voila les veritables causes de la revolution francaise. J'aurais pu commencer ma recapitulation à une époque anterieure à l'apparition de Gallilée [sic] ; j'aurais pu prendre l'examen de la marche des idées, à la memorable époque du règne de Charlemagne et du Calife Almamoum [sic. Al-Mamoun] , epoque du

commencement

de la desorganisation de l'ancien et système [sic] et de l'organisation du nouveau.

L'ancien système [sic.système] dont les ruines encombrant encore l'Europe consistait :

- 1.° En la croyance en Dieu ;
2. ° En la croyance aux saintes ecritures comme contenant des idées révélées ;
- 3.° En la croyance au pouvoir confié par Dieu à l'église, de le représenter sur terre, et par conséquent de gouverner les peuples et les Rois.

Le nouveau système [sic] qui a été basé sur l'observation de la marche (trois mots biffés) du phénomène général et des phénomènes particuliers, a successivement démontré (montré) la fausseté des idées prétendues révélées, l'ignorance du clergé, son ambition, son despotisme, &cet. Ce système [sic] sera complètement [sic] organisé quand les savants adonnés à l'étude

S-S361b-024

des sciences positives, seront réunis en un seul corps (un mot biffé) auquel on donnera le nom d'église et auquel on confiera le pouvoir d'enseigner les lois de la nature qu'ils découvriront et le principe (les principes) de morale qu'ils établiront : que tout homme doit pour son bonheur, pour celui de sa famille et de sa patrie (l'humanité), travailler au perfectionnement de la direction scientifique ou industrielle dans laquelle il emploie ses forces.

Cet article n'est pas celui dans lequel je dois développer la marche suivie par l'esprit humain, ni dévoiler l'avenir scientifique

et politique de l'humanité. Les idées que j'ai présentées à ce sujet, ont eu seulement pour objet (but) de faire voir que la révolution française qui est devenue celle de l'Europe, (un mot biffé) n'est (n'était) pas un grand événement qu'on puisse (pût) attribuer à de petites causes, et de déterminer les politiques à remonter jusqu'à l'examen des premières et grandes causes de cette révolution, seule manière qu'ils aient de se placer à un point de vue assez élevé pour découvrir les moyens de terminer la crise dans laquelle les peuples Européens se trouvent engagés.

Examen direct de la conduite des français
depuis 1789

Je partagerai cet examen en quatre parties ;

1^{re} partie. Depuis la réunion de l'assemblée nationale jusqu'à la mort de Mirabeau.

2^{me} partie. Depuis la mort de Mirabeau jusqu'à celle de Robespierre

S-S361b-025

3^{me} partie. Depuis la mort de Robespierre jusqu'au retour de Bonaparte.

4^{me} partie. Depuis le retour de Bonaparte jusqu'à ce jour.

(sept lignes biffées)

Première époque

Après avoir fait d'inutiles efforts pour combler le déficit qui se trouvait dans les finances, le Roi prit le parti de convoquer les états généraux, il espérait les trouver mieux disposés que

le parlement à lui accorder des secours extraordinaires.

Les etats generaux dès qu'ils furent réunis, se declarerent assemblée constituante, et ils se mirent à travailler à la formation d'une nouvelle constitution.

Les membres de cette assemblée, dès ses premieres seances, se diviserent en trois differens [sic] partis politiques. Le parti monarchique, le parti républicain et le parti constitutionnel.

Le parti republicain etait infiniment plus nombreux que les deux autres. Tous les députés, tous les français de cette generation avaient été eleves dans les principes du républicanisme. À cette époque, dans les éducations particulieres, comme dans les

S-S361b-026

établissements d'éducation publique, on commençait par fixer l'attention des enfants sur l'histoire ancienne , on leur donnait les Grecs et les Romains pour des modeles, on cherchait à enflammer leurs jeunes cœurs pour les vertus républicaines des Brutus, au lieu de leur faire apercevoir que les institutions republicaines avaient pris naissance à l'époque de l'enfance de l'humanité et de la science politique, on les leur presentait comme les meilleures de toutes les institutions sociales. idée fausse, ainsi que Montesquieu l'a démontré en prouvant que la monarchie limitée par des corps representatifs etait le meilleur de tous les gouvernements. Quand on faisait passer les enfants de l'étude des langues anciennes à celle de la langue française, Voltaire, Jean Jacques, l'Encyclopédie etaient les ouvrages sur lesquels on fixait principalement leur attention ; et dans ces ouvrages, comme tout le monde sait, les institutions

monarchiques sont tournées en ridicule, attaquées par les raisonnements les plus séduisants et les plus rigoureusement erronés.

Le parti républicain, dis-je, en 1789, était et devait être dans la masse de la **population (nation)** comme dans l'assemblée, infiniment plus fort que les deux autres. Car les hommes étaient, sont, et seront toujours, en masse, les produits moraux de l'éducation qu'ils ont reçue. Très peu d'hommes prennent la peine de refaire leur éducation. Il n'y avait que ceux qui avaient refait leur éducation en étudiant Montesquieu et les publicistes anglais, qui composaient le parti constitutionnel.

S-S361b-027

Quant au parti royaliste, il était composé de la noblesse, des privilégiés, des gens attachés à la cour. Les hommes livrés à ce parti, n'agissaient d'après aucun principe ; ils suivaient par une espèce d'instinct, la direction dans laquelle ils se trouvaient lancés, par le désir de conserver les privilèges et les avantages dont ils jouissaient.

Le parti constitutionnel était le moins nombreux ; mais il était le plus capable, sa supériorité en science **positive (politique)** a été constatée par le fait qu'il a **(toujours)** eu **constamment** l'avantage dans la discussion pendant toute la durée de l'assemblée constituante.

Les royalistes et les républicains sentant **toute** leur infériorité scientifique vis à vis des constitutionnels, et voulant à tout prix faire primer leurs opinions, travaillèrent à renverser

l'assemblée. Les royalistes voulaient l'anéantir, les republicains voulaient la composer de democrates.

Les royalistes, c'est à dire les nobles et les privilégiés émigrèrent; ils allèrent solliciter les secours du Roi de Prusse et de l'Empereur d'Autriche; ils s'armerent; ils s'organiserent militairement et (, devenus auxiliaires des troupes prussiennes et autrichiennes, ils) tenterent de rentrer en france le sabre à la main pour renverser l'assemblée, pour anéantir tout pouvoir representatif ou parlementaire et pour remettre entre les mains du Roi un pouvoir illimité dont les nobles et les privilégiés fussent les agents exclusifs.

Les

S-S361b-037

Les républicains, au contraire devinrent à cette époque des démagogues, il n'y eut plus de veritables republicains ni de veritables royalistes ; on ne vit plus que des partisans de la féodalité ou de la démocratie (démocratie et de la féodalité).

Les demagogues, dis-je, s'autoriserent des menaces des emigrés (quelques mots biffés) pour armer tous les non-propiétaires, (quelques mots biffés) pour professer le principes de la démocratie la plus outrée. Par une metaphisique [sic] atroce ils (un mot biffé) rapprocherent les idées de liberté, d'égalité de fraternité ou de la mort. ils precherent l'egal partage des terres.

Les constitutionnels pour opposer des forces materielles aux forces physiques que les souteneurs de la féodalité et les (un mot biffé) demagogues faisaient mouvoir pour les écraser,

solliciterent l'appui de l'Angleterre.

L'Évêque d'Autun et Mirabeau étaient les deux plus fortes têtes du parti constitutionnel, ils convinrent ensemble de partager leurs efforts. Mirabeau se chargea de soutenir la discussion dans l'assemblée et l'évêque d'Autun se mit à la tête des affaires extérieures de son parti ; (quelques mots biffés)
(une ligne biffée)

Mort de Mirabeau

Plus un homme a de caractère, plus il a de capacité et plus inévitablement, plus promptement il est tué par la démonstration qu'il s'est trompé dans ses combinaisons, qu'il ne peut pas atteindre

S-S361b-029

le but vers lequel il tendait ; en un mot, par le fait constaté à ses yeux qu'il a manqué sa vie. Mirabeau vit clairement qu'il aurait le dessous vis à vis des démocrates. Mirabeau mourut. Il mourut dans la force de l'âge ; s'il avait fourni sa carrière entière, il aurait fait faire de grands progrès à la science politique.

Aucun des jugements que j'ai entendu porter sur Mirabeau ne m'ont [sic. a] satisfait, ce serait un important service à rendre à l'humanité, de lui faire connaître les relations **existantes (existant)** entre les défauts et les qualités d'un homme comme Mirabeau.

Je ne puis me refuser au désir de présenter ici un aperçu [sic] à cet égard.

À la lecture des ouvrages du petit nombre d'auteurs qui se sont lancés avec succès dans la carrière de la politique générale qui n'est autre chose que la haute philosophie on serait porté à croire

que dans leur vie privée ils ont été des modèles de sagesse. mais le raisonnement et l'examen des faits attestent le contraire, et démontrent que cette opinion basée (fondée) sur les premières apparences est complètement [sic]

erronée. La philosophie théorique et la philosophie pratique sont essentiellement distinctes. Le même homme ne peut à la fois parcourir ces deux carrières. Voyons les faits.

Luther, Bacon et Descartes sont parmi les modernes les trois hommes qui en direction de politique générale se sont le plus distingués dans la carrière scientifique (, parmi les Modernes, les hommes qui, en direction de politique générale, se sont le plus distingués).

Luther a attaqué de front l'ancien système système [sic] scientifique

S-S361b-030

il a mis en évidence (les absurdités et) les vices collectifs et individuels des membres du clergé qui en étaient défenseurs [sic] .

Bacon a indiqué le moyen (les moyens) d'organiser un nouveau système [sic] d'idées.

Descartes a commencé l'organisation de ce système [sic]

Le premier a dit : Ce n'est pas la révélation, c'est la raison (le raisonnement) qui doit servir de base à notre croyance et à l'organisation de nos institutions sociales.

Le second a indiqué les moyens d'organiser un système [sic] scientifique et politique dans lequel les idées révélées ne jouassent

aucun role.

Le dernier a déclaré que si on lui donnait de la matière et du mouvement, il ferait un monde, c'est à dire, il a entrepris d'expliquer le mécanisme de l'univers sans avoir recours aux idées révélées et quant à la politique, il a déclaré que la physiologie devait servir de base à cette science qui en la dégagant de tout préjugé ne devait être considérée que comme de l'hygiène [sic] .

Luther a trop aimé la table.

Bacon a été ambitieux d'honneurs et de fortune.

Descartes a eu le goût du jeu et celui des femmes.

Ainsi aucun des trois n'a été philosophe pratique.

S-S361b-031

Passons maintenant aux raisonnements.

L'âme est d'autant plus accessible aux passions qu'elle est plus exaltée; or le plus haut degré [sic] d'exaltation est nécessaire pour traiter la question générale dans toute son étendue. On ne doit donc pas être étonné de voir les philosophes inventeurs fortement tourmentés (agités) par les passions pendant tout le cours de leurs travaux d'invention.

On peut envisager la question sous un autre point de vue.

Pour faire faire des progrès à la science, il faut faire de nouvelles expériences. Dans la science de l'homme qui est une des deux sources de la science générale ; dans la science de l'homme dis-je, les nouvelles expériences consistent à établir de nouvelles relations (sociales), soit entre les autres soit entre soi et les autres. Toute action neuve

ne peut être classée comme bonne ou mauvaise, comme utile ou nuisible que d'après des observations faites sur ses résultats ; et toutes les tentatives de ce genre ne peuvent pas être heureuses. Ainsi l'homme qui se livre à des recherches de haute (de hautes recherches de) philosophie, peut et doit même commettre pendant le cours de sa vie expérimentale beaucoup de folles actions. Mirabeau est mort à la fin de sa vie expérimentale. Mirabeau aurait certainement fait faire de grands pas à la politique, s'il eut [sic] fourni toute sa carrière.

Troisième époque

(deux lignes biffées)

S-S361b-032

Deuxième époque

Mirabeau n'arrêtait pas le torrent démocratique, mais il retardait sa marche.

Dès qu'il fut mort, la France fut inondée par ce torrent. Les mesures politiques

les plus extravagantes et les plus atroces furent adoptées. Le Maximum et la Guillotine firent arriver la famine qui ouvrit enfin les yeux de la masse ignorante

et qui la poussa à réagir contre Robespierre et ses agents (adhérents,) dont elle fit justice.

Pendant cette longue époque, les Français les plus estimables et ayant le

plus de talents, ont emigré ou se sont portés à la défense **des frontieres (de la frontière)**.

L'Eveque d'Autun avait été solliciter les secours de l'angleterre et après avoir fait d'inutiles efforts pour ouvrir les yeux au cabinet **(de)** S^t James sur ses veritables interets, se voyant forcé de renoncer à l'esperance qu'il avait conçue d'eviter à la france des malheurs semblables à ceux que les anglais avaient éprouvés lors de leur revolution et voyant l'inutilité du sacrifice qu'il ferait de sa vie en retournant se mettre entre les mains des forcenés démagogues qui dominaient la france, il prit le parti d'aller en amerique pour attendre que la crise révolutionnaire fut [sic] passée ; bien sûr que l'incapacité politique de Robespierre et de ses adherents amenerait la famine et des atrocités poussées à un **point tel (tel point)** que le peuple verrait sans répugnance ni résistance le pouvoir rentrer entre les mains des hommes instruits.

Troisième époque

Après la mort de Robespierre, le politique le plus marquant en france **se trouva être (fut)** un homme du bas clergé

S-S361b-033

les idées de cet homme etaient très-embrouillées ; il n'était pas sans talent ; mais son talent n'était pas **un talent** organisateur. La nature ne l'avait point appelé [sic] à être législateur. La nature par une combinaison bizarre [sic] , l'avait fait **(à**

la fois) révolutionnaire et poltron. La seule de ses conceptions (combinaisons) qui passera à la postérité porte le titre de tiers état. Ses conceptions politiques organisatrices étaient batardes, le gouvernement qu'il a institué n'avait ni le caractère démocratique, ni le caractère aristocratique. La France était sans guide et sans constitution sous le Directoire. Cet homme a (eu) cependant eu un mérite qu'on n'a pas fait assez valloir [sic] , ce fut (c'est) celui, sentant son incapacité, d'user (d'avoir usé) de son ascendant pour faire revenir Bonaparte d'Égypte. Cet homme a gouverné la France derrière le rideau depuis l'exécution de Robespierre jusqu'au retour de Bonaparte.

Quatrième époque

Bonaparte avait constaté sa capacité politique et militaire par sa belle campagne d'Italie, par son traité de Campo-Formio et par son expédition d'Égypte. À son retour en France, tous les yeux se fixèrent sur lui, les vœux de la majorité l'appelaient [sic] (l'appellent) à remplir la place de chef du gouvernement. La majorité approuva donc la révolution du 18 brumaire. La Nation fit bien, (elle fit) très bien, de placer Bonaparte à la tête du gouvernement ; mais elle fit mal, elle fit très mal

S-S361b-034

de limiter ses pouvoirs et de ne lui confier qu'une autorité consulaire. Les Français, les Européens, auraient dû mettre

entre les mains de Bonaparte un pouvoir illimité; ils auraient dû le créer législateur suprême de la société Européenne, de manière qu'il pût à son gré anéantir toutes les institutions politiques générales ou nationales qui existaient en Europe et en créer de nouvelles. Que de maux les Européens se seraient évités s'ils avaient pris ce parti. il est évident que l'ancien système ^[sic] politique Européen a été renversé ; qu'il ne peut point être relevé et qu'il est nécessaire ^[sic] d'en organiser un nouveau.

2.° Que Bonaparte était, qu'il est l'homme le plus capable (et), le seul homme capable d'opérer cette organisation.

La **conduite (faculté)** militaire, politique et scientifique de l'Empereur est depuis longtemps l'objet de mes méditations. Je dois à la faculté que je possédais de fixer mon attention entière sur cette étude, ce que j'ai appris, ce que je sais, ce que j'enseigne de positif. Le Grand Napoléon avait coordonné dans son vaste cerveau la reorganisation de la société Européenne avant de prendre les Rênes du gouvernement français. Je me suis attaché à découvrir son plan et à trouver les moyens d'en aider l'exécution. Je crois avoir levé une copie exacte de ce plan, je crois m'être mis en état de coopérer à son exécution ^[sic] .

Parler de l'organisation de la société Européenne

S-S361b-0035

c'est parler d'un état de choses tel que tous les peuples Européens se trouvent liés par une institution politique de laquelle chacun d'eux dépende et qui ne dépende d'aucun d'eux en particulier. C'est parler d'un état de choses tel que les organisations nationales de chacun de ces peuples

soient fondées sur le même principe. Cet état de choses a existé pendant les derniers (Pendant les deux) siècles qui ont précédé la réforme de Luther. La Religion Catholique était presque également professée par les Polonais, par les Allemands, par les Danois, par les Suédois, par les anglais, par les français, par les Espagnols et par les Italiens. Et les Italiens, les Espagnols, les français, les anglais, les Danois, les Suédois (les Suédois, les Danois), les Allemands, et les Polonais étaient nationalement [sic] soumis au régime de la féodalité. La société Européenne était organisée à cette époque mais elle était mal organisée.

注

- 1 Je poursuivrai sans interruption le travail dont je présente en ce moment le premier cahier jusqu'à ce point auquel je déterminerai l'Institut impérial de France et la Société royale de Londres à concourir à l'édification d'une nouvelle encyclopédie.
- 2 il peut être considéré sous le rapport politique, et sous ce rapport, il peut et doit être d'un intérêt vif et général pour tous les hommes qui ont quelques lumières en France et en Angleterre. Car les maux de la guerre se font sentir à tout le monde. Le désir de la paix existe nécessairement chez tous les individus qui ont eu à supporter les maux de la guerre. Or je demande à tout homme de bon sens qui voudra prendre la peine d'y réfléchir un moment s'il n'est pas évident à ses yeux que le rapprochement de l'Institut impérial de France et de la Société royale de Londres pour travailler en commun à l'édification d'une nouvelle encyclopédie doit anéantir un rapprochement entre les gouvernements, entre les peuples français et anglais.
- 3 et je dirai dans le cours de mon travail les raisons sur lesquelles je fonde ma prédication
- 4 Une conception neuve est une bonne fortune pour celui dans la tête duquel elle se forme, pour ses parents, pour ses amis, pour la société dans laquelle il vit, pour ses compatriotes et pour ses contemporains. La conception que je présente est neuve. Elle est éminemment philanthropique et patriotique. Il est de l'intérêt de mes contemporains, de mes compatriotes, de mes co-sociétaires, de mes amis et de mes parents de la seconder de tous leurs efforts. Je réclame leur secours et je leur observe,

en réponse aux reproches qu'ils me font souvent de négliger mes affaires personnelles, qu'ils devraient prendre plus d'intérêt qu'ils ne font à mes travaux, qui ont pour objet le bien-être général.

Le lecteur sensé jugera que le travail que je lui livre, étant écrit en France, doit être frappé de l'empreinte du patriotisme français et que j'ai dû, sous tous les rapports, montrer le plus vif désir de

voir arriver mes compatriotes et leur chef au plus haut degré de gloire et de prospérité. Il aurait tort de me blâmer de mon entière identification avec les intérêts de l'Empereur et du peuple français.

J'observe encore au lecteur que je suis né avec une organisation passionnée et que j'étais déjà avancé en âge quand je me suis livré à l'étude.

D'après cette déclaration, j'ai le droit de réclamer son indulgence relativement au défaut de mesure et de grâce, et je reconnais qu'il a le droit d'exiger de moi de la force et de l'originalité dans les pensées, ainsi que de la vigueur dans l'expression.

* Mme Juliette Grange, professeur à l'université de Tours et un des éditeurs des *Œuvres complètes* de 2012, a accepté de coopérer à nos recherches sur les manuscrits de notre fonds Saint-Simon lors de sa venue au Japon en 2017, sous l'invitation de la faculté de droit de l'université Nihon. Elle a également accepté de donner à cette occasion une conférence sur la laïcité en France. Celle-ci a été traduite en japonais et publiée dans le Bulletin de la faculté *Ômonronsô* (n° 98, octobre 2018) sous le titre « L'idée de laïcité en France » (trad. de Yasuko Eshima). M. Olivier Grand'Esnon, étudiant à l'ESSEC Business School et stagiaire à la bibliothèque de la faculté de droit de Nihon en 2018, nous a aidés à transcrire le manuscrit et a contribué ainsi au développement de notre travail. Nous les remercions tous les deux de leur soutien.

* Cette publication entre dans le cadre des recherches sur le thème de la laïcité, que nous effectuons grâce à la Subvention d'aide à la recherche scientifique (Recherche de base C n° 17 K 0 2 6 0 4).

- *サン＝シモン・コレクションの草稿に関しては、2017年度に日本大学法学部海外招聘教員として来日されたジュリエット・グランジュ教授に調査に協力していただいた。教授は、トゥール大学で教鞭をとっておられ、2012年版全集（PUF刊）の編者の一人である。来日に際しては、「フランスにおけるライシテ」に関する講演を行っていただいた。この講演の内容は、『桜文論叢』第98巻（2018年10月発行）に、「フランスにおけるライシテの観念」（ジュリエット・グランジュ、江島泰子訳）として掲載された。さらに、草稿361の翻刻にあたっては、2018年に日本大学法学部図書館でインターンシップを行っていた当時 ESSEC ビジネススクールの学生であったオリヴィエ・グランデノン（Olivier Grand'Esnon）に、全集版（国立古文書館草稿）との差異の調査に協力してもらった。この資料の公表にあたって、両氏に謝意を表したい。
- *この草稿調査は、ライシテのテーマをめぐって19世紀の作家とサン＝シモン主義者たちとの関連の検討がその一部をなす科研費研究（基盤研究C 課題番号17K02604）の一環である。

『桜文論叢』 執筆要領

平成16年2月10日大宮校舎委員会決定

平成17年9月29日桜文論叢編集委員会改正

平成17年9月29日施行

平成19年7月 5日改正

平成19年7月 5日施行

平成22年7月 1日改正

平成22年7月 1日施行

平成25年5月30日改正

平成25年5月30日施行

- 1 原稿は未発表の完全原稿とし，提出締切日を厳守する。他誌に投稿中でないものに限る。また，審査の迅速化のため，原稿の要旨を添付する。翻訳原稿については，必ず原著者又は原出版社の許可を得てから提出することとし，許可の確認ができる文書等も添付する。
- 2 文章は原則として常用漢字，現代仮名遣いを用いる。学術上必要な場合は，その限りではない。
- 3 原稿は，原則として，Microsoft Wordで作成し，フォントは和文では「MS明朝」，欧文では「Times New Roman」を使用し，いずれも下部にページ番号を付すこととする。注は，原則として，「挿入」メニューの文末脚注機能を使用せず，すべて尾注とする。
- 4 原稿の提出は原則として，電子メールの添付ファイルで研究事務課（kenjimu.law@nihon-u.ac.jp宛）へ送付するとともに，印刷した原稿2部を同課へ提出する。

5 原稿の長さは、表題、氏名、本文、注、引用文献を含めた上で、和文の場合 20,000 字以内、欧文の場合 10,000 語以内とする（和文は「ツール」メニューの「文字カウント」で「スペースを含めない文字数」、欧文は「単語数」でカウントする）。なお、多少の超過はやむを得ないものとする。表題と氏名は、和文表記及び欧文表記を併記する。

6 要旨は和文 600～1,000 字程度、欧文 300～500 語程度とし、A4 版 1 枚に収めるものとする。

7 校正については、初校の際の加筆、訂正はやむを得ない場合に限るものとし、再校以後の加筆、訂正は避ける。

執筆者による校正は再校までとし、初校、再校ともに入手後 1 週間程度で返却する。再校返却の際は、タイトル頁に「校了（または責了）」と明記する。

8 文献の引用について

① 横書きの場合、本文の当該箇所の右上（行間）に括弧つきの算用数字で注記番号を付し、各章等の後に引用文献等を表示する。縦書きも同様とする。

② 表示については、著書の場合、著者名、書名『 』、発行年、頁等を示し、論文の場合は、執筆者名、論文名「 」、掲載誌名、巻・号、発行年、頁等を示すことを原則とする。

以 上

執筆者紹介 (掲載順)

佐藤 英 日本大学准教授 前嵩西 一馬 日本大学助教
ルベルティエ・カミーユ 日本大学助教 江島 泰子 日本大学特任教授

機関誌編集委員会

委員長	大岡	聡	委員	石川	徳幸
副委員長	賀来	健輔	委員	石橋	正義
副委員長	南	健悟	委員	岩井	圭子
委員	大久保	拓也	委員	大熊	圭也
委員	小野	美典	委員	大杉	竜子
委員	加藤	雅之	委員	加藤	暁未
委員	黒滝	真理子	委員	中野	静和
委員	高畑	英一郎	委員	野松	村彦
委員	友岡	史仁	委員	松島	江雪
委員	横溝	えりか	委員	米崎	寛実
委員	渡辺	徳夫	委員	前田	

桜文論叢 第105巻 (非売品)

令和3年9月30日発行

発行者 小田 司

発行所 日本大学法学部
機関誌編集委員会
東京都千代田区神田三崎町2-3-1
電話 03(5275)8510番

印刷所 株式会社メディオ
東京都千代田区神田猿楽町2-1-14 A&Xビル

ŌMON RONSŌ

Vol. 105, September 2021

CONTENTS

— ARTICLES —

- SATO Suguru*, Clemens Krauss' Musical Activities of the 1930s in Berlin 1
- Camille LEPELTIER*, La transcription des phonèmes du français en *katakana* :
Le cas des voyelles du français 33
- MAETAKENISHI Kazuma*, Witnessing a Smirk on History: An Ethnographic
Analysis of Okinawan Immigrants 55

— MATERIAL —

- ESHIMA Yasuko*, *Second prospectus, Introduction et Projet d'Encyclopédie*,
Second prospectus : manuscrits de Claude-Henri Saint-Simon 85